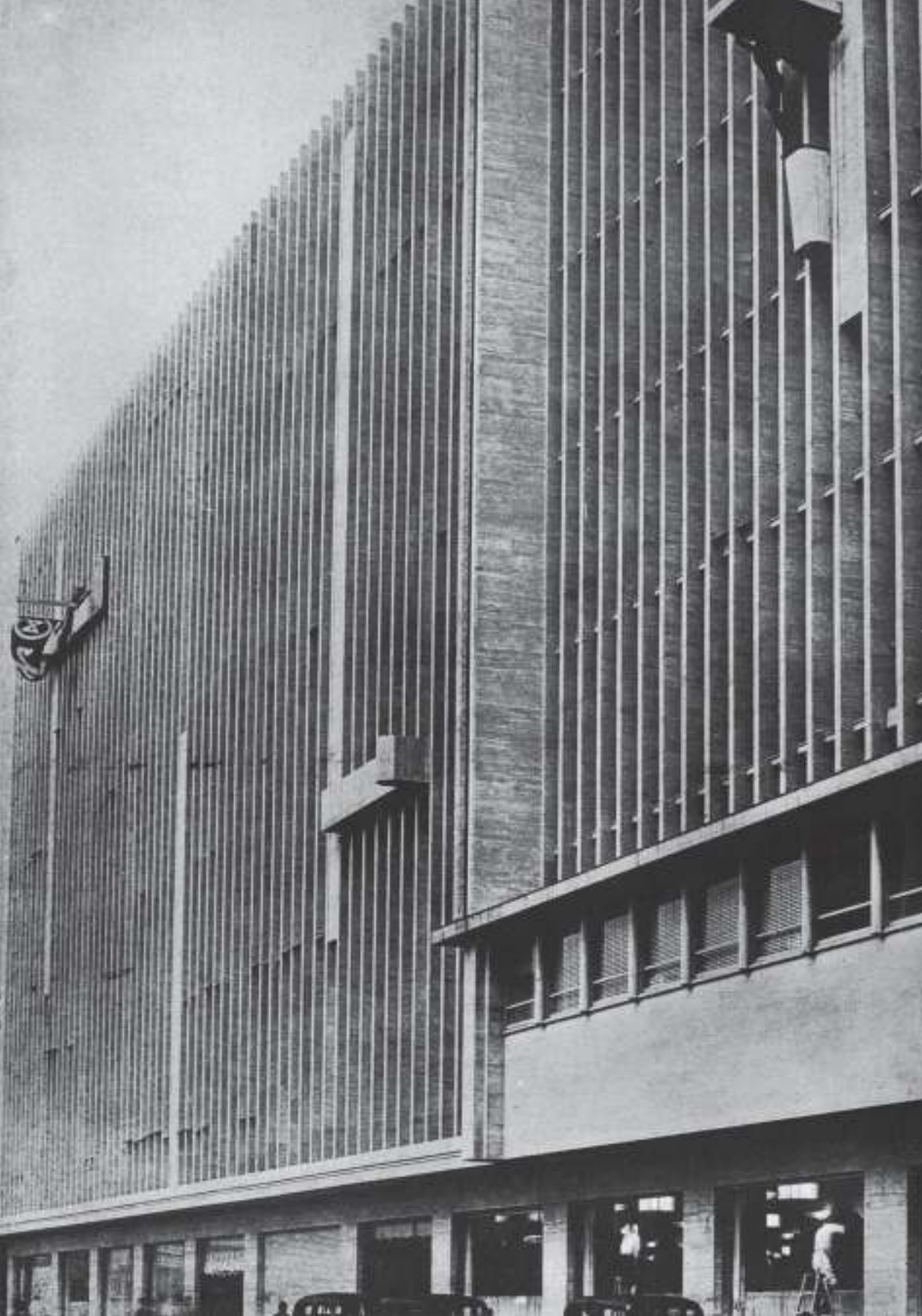




建築と社会

Architecture and Society

2019 vol.100
03 No.1164
日本建築協会

特集 東海支部特集

主催：一般社団法人
日本建築協会
後援：東リ株式会社
＜会員の集い
IN TOKYO＞
トークセッション
と懇親の夕べ

■日 時
2019年4月2日(火)
18:00～21:00
(受付17:30～)

東京で行う初めての主催企画として、東京・大阪にまたがる視野をお持ちの下記の2人のゲストを招いてトークセッションと懇親の夕べを企画しました。トークセッションでは、遠藤氏からは近作（大阪中之島美術館、茨城県大子町新庁舎）の紹介を中心にお話いただき、倉方氏には建築と社会のつながりを大事にしてきた日本建築協会の視点から聞き役として話題を展開していただく予定です。

東京在住の会員の方は誘い合わせの上、ぜひご参加ください！

■ゲ ス ト

遠藤克彦（えんどう かつひこ）



株式会社遠藤克彦建築研究所 代表取締役。

1970年横浜市生まれ。武蔵工業大学（現東京都市大学）卒業、東京大学大学院修士課程修了（東京大学生産技術研究所 原広司研究室在籍）、同大学院博士課程進学。在学中の1997年に遠藤建築研究所を設立し、1998年大学院博士課程退学。2007年に株式会社遠藤克彦建築研究所に組織変更し、現在に至る。

設計の対象は住宅から公共建築、街づくり提案まで多岐に渡っている。積極的に設計プロポーザルへの参加や提案を行っており、受賞歴多数。2017年2月に「大阪中之島美術館」で最優秀案に選定後、大阪にも事務所を開設。東京・大阪にまたがり活動中。

倉方俊輔（くらかた しゅんすけ）



大阪市立大学大学院工学研究科 准教授。

1971年東京都生まれ。早稲田大学理工学部建築学科卒業、同大学院修了。博士（工学）。西日本工業大学准教授などを経て、2011年から現職。近現代建築の研究・批評・紹介の他、日本最大級の建築公開イベント「イケフェス大阪（生きた建築ミュージアムフェスティバル大阪）」実行委員会委員などを務める。

主な編著書・共著に『東京モダン建築さんぽ』（エクスナレッジ）、『生きた建築 大阪1・2』（140B）、『大阪建築みる・あるく・かたる』（京阪神エルマガジン社）、『吉祥寺ハモニカ横丁のつくり方』（彰国社）、『伊東忠太建築資料集』（ゆまに書房）などがある。

■会 場

東京デザインセンター 8F会議室
(東京都品川区東五反田5-25-19)

■最 寄 駅

JR山手線五反田駅東口より徒歩2分
都営浅草線五反田駅A7出口正面
東急池上線五反田駅より徒歩3分

■タイムスケジュール

東リショールーム見学 18:00～18:30
トークセッション 18:30～19:45
懇親会 19:45～21:00

■定 員 50名

■参 加 費 (懇親会費込み)

会員3,000円、一般5,000円

■申込方法

- ①催し名
- ②氏名（フリガナ）
- ③会員・一般の別
- ④会社名
- ⑤住所
- ⑥当日連絡先電話番号

上記を明記いただき、E-mailにてお申込みください。ホームページからもお申し込みいただけます。
<http://http://www.aaj.or.jp/>

■申し込み・お問い合わせ先

一般社団法人 日本建築協会
TEL: 06-6946-6981/
FAX: 06-6946-6984
E-mail: jigyoaka@aaj.or.jp (担当:内山)

U-35委員会企画
6th action
「建築とOSAKA」

第2回
フューチャーセッション
＜予 告＞

U-35委員会は、現在 6th action の開催にむけ準備しています。「action」とは、年度毎の活動を総括し、U-35委員会からの「アウトプット」を広く行う公開型イベントです。

今回は、新しい大阪の魅力を発見するため大阪の街へ飛び出し、情報を集め、未来の大阪のあり方について、皆さんとともに議論したいと思います。

開催日は、2019年4月13日(土)を予定。

詳細は、決まり次第、U-35委員会のホームページやfacebookなどでお知らせしますので、下記へアクセスしてください。

U-35委員会facebook
↓↓↓
www.facebook.com/U35.aaj

日本建築協会 U-35委員会 HP
↓↓↓
<http://www.aaj.or.jp/u35>

■U-35委員会とは

日本建築協会における「若手設計者を中心とし業種・組織を超えた同世代をつなげるプラットフォームの創出、U-35世代の多角的な視野の獲得、建築における多様な価値の社会への発信を活動の目的としています。



第2回片岡安賞 (日本建築協会論考コンクール)

募集テーマ：建築をつくるひと
—これからの姿を問う

1次審査通過論考決定

日本建築協会主催による第2回片岡安賞(日本建築協会論考コンクール)の1次審査通過論考が、右記の通り決定いたしましたので発表します。なお、3月2日には、1次審査通過者による最終審査前の公開プレゼンテーションが行われます。

1次審査通過論考3編 (到着順・敬称略)

- ・「ポスト建築家」時代の建築家たち
吉田 和弘
- ・集団意識と建築～1910年からの問いかけ～
吉野 良祐
- ・DIYとギフトエコノミー
山口 純

日本建築協会京都支部：主催
(公社)日本建築家協会京都
地域会・事業委員会文化財担
当委員会：共催

「都市の緑の 育成管理」 勉強会

都市の緑は、景観・環境・観光に寄与する大切な文化資源です。

夏の木陰は良いけれど、落ち葉は嫌だ…。

市民からそんな苦情の嵐を受けて初秋に枝葉を切り詰めて丸坊主の剪定をしていました。秋の紅葉の風情もなんもあつたもんじゃない…。

京都市では近年、街路樹の京都市型景観剪定(紅葉する街路樹の二段階剪定)や街路樹サポーター制度の立案など、街路樹行政にかかる独自の政策を積極的に打ち出して、京都市ならではの整備や育成管理を構築し、次代に美しい都市の緑を引き継いで行こうと努力しています。今、政策と技術と市民のチカラの融合が必要な時です。都市の緑のあり方を皆さんで考えましょう。



新緑のケヤキ並木 (御池通)

■講師プロフィール

片山博昭 (かたやま ひろあき)
(一財)日本造園修景協会京都府支部
支部長
技術士【建設：都市および地方計画】
日本造園学会 企画委員、京都造形芸術
大学非常勤講師 (環境デザイン)

日 時 2019年3月15日(金)
18:30~20:30
(質疑30分含む)
定 員 25名(先着順)
参 加 費 会員1,000円(主催・共催 共)
一般1,500円
学生 500円
会 場 京都建設会館別館4F会議室
(京都市中京区押小路通柳
馬場東入橋町641)



街路樹サポーター (烏丸通)

最 寄 駅 地下鉄東西線「市役所前」駅
より徒歩7分、地下鉄烏丸線
「烏丸御池」駅より徒歩10分
申込方法 ①講演会名「3/15勉強会」、
②氏名、③勤務先・学校名、
④当日連絡先、⑤E-mail
アドレス又はFAX番号、
⑥会員、一般、学生の別
上記項目を明記しFAXで
下記へお申し込みください。
申 込 先 (一社)日本建築協会京都支部
事務局 FAX 075-255-6077

京都支部では、平成31年度も隔月セミナーを開催予定です。
ぜひ、ご参加ください。



秋のイチョウ並木 (堀川通)

若き創造者たちへ

「第66回青年技術者顕彰」のご案内

日本建築協会では、昭和29年（1954年）から「青年技術者」を表彰してきました。これは、35才以下の優秀な設計者、技術者、研究者等を対象とするもので、若手建築技術者のいわば登龍門として定着しています。

今年も、青年技術者選考委員会を設けて、これまでどおり、計画・設計・構造・設備・施工およびその他の分野について青年技術者を表彰します。

選考は有職者による選考委員会が行い、選出された方は、本会総会での表彰、「建築と社会」への掲載等を予定しています。建築界の様々な分野で活躍されている皆様の積極的なご応募をお待ちしています。

応募提出規定

1. 応募できる人は満35歳（2019年3月30日現在）以下の青年技術者であって、本会個人会員に限る。
2. 原則として、すいせん者を併記する。
すいせん者は被すいせん者（青年技術者）の勤務する組織の上司が上長とする。すいせん者が学校教官である場合はこの限りでない。また本人が組織の代表者である場合は自せんとする。
3. 応募分野は特定しない（建築に関するあらゆる分野を対象とする）。応募者は、たとえば計画、一般設計、住宅・インテリア設計、構造、設備、施工、技術開発、行政、情報、コーディネート等の分野にあって、なしたげたすぐれた実績について、下記の所要資料を1部、本会に期日までに提出する。
4. 提出された資料は「青年技術者選考委員会」において選考する。
5. 「青年技術者選考委員会」において選出された青年技術者は本会総会において表彰し、「第66回青年技術者特集号」（2019年7月号予定）に掲載する。

6. 提出資料

■応募用紙

本会事務局で発行、またはホームページからダウンロードしてください。

■略歴

本人の氏名、生年月日、最終学歴、業歴、作品経歴など

■選考資料

A：業績資料（A3版5枚以内／書式は任意）

- ① 設計の場合——鮮明な写真、配置図および主要平面図、概要、設計要旨、その他設計内容を説明するに十分な資料
- ② 計画、構造、設備、施工の場合（それぞれの設計計画なども含む）——上に準じた資料
- ③ 上記以外の分野の場合——それぞれの分野にふさわしい資料

B：青年技術者の思い（A4版2枚以内／書式は任意）

上記業績資料に記載した業績において、本人が特に貢献した部分、または力量が活かされたと思われる部分の詳細な説明をしてください。また、本人の建築、都市、環境などに対する考え方、取り組み姿勢や将来展望等についてまとめてください。文字だけでなく必要に応じて図表、写真等も用いてもかまいません。ただし、応募者本人の執筆に限ります。

この資料は、応募者の考え方を知る上で大変重要と考えていますので、十分配慮をしてください。

7. 提出期限 2019年3月29日（金）

8. 提出先 （一社）日本建築協会「青年技術者選考委員会」

〒540-6591 大阪市中央区大手前1-7-31

大阪マーチャндаイズ・マート7階

電話 06-6946-6981 FAX. 06-6946-6984

E-mail : jigyouka@aaaj.or.jp

9. 提出方法 郵送（当日消印有効）または持参

10. 青年技術者選考委員会（予定）

委員長 勝山 太郎／(株)日建設計設計部門理事
グループマネージャー設計部長

委員 岸田 文夫／(株)竹中工務店開発計画本部長（西日本担当）

長尾 健／長尾健建築研究所代表

橋本 修／(株)昭和設計執行役員プロジェクト推進室室長

松原 茂樹／大阪大学大学院工学研究科地球総合工学専攻
准教授

北尾 聡子／大阪電気通信大学工学部建築学科准教授

榊田 洋子／(有)桃李舎代表取締役

井村 隆／清水建設(株)関西支店設備設計部設計長

小倉 良友／(株)日建設計エンジニアリング部門
設備設計グループ理事副代表設備設計部長

山口 善史／(株)大林組大阪本店建築事業部生産技術部長

山辻 直樹／大成建設(株)関西支店建築部購買管理室課長

建築と社会

Architecture and Society

Journal of the Architectural Association of Japan

日本建築協会

2019 03

Vol.100 No.1164

■特集予告

● 4月号／建築と社会を繋ぐプロダクション(仮)

● 5月号／働き方いろいろ(仮)

今月の表紙

「建築と社会」vol.18 1935年11月号より「株式会社そごう新築写真」外観の一部(御堂筋側)

株式会社そごう(そごう大阪店)は、概要によると1931年10月に起工、1935年9月3日に竣工している。約4年の歳月をかけた建物は、地下3階(中2階あり)、地上8階(中2階あり)、塔屋3階のアルデコ様式の外観を持つ建物で、設計は村野藤吾。

会誌では心斎橋筋側入り口の吹抜や8階のイタリア産大理石を使った噴水、扉に漆時絵の模様が入ったエレベータなど豪華な内装も紹介されている。

現在この場所には、大丸心斎橋店北館がある。



特集 東海支部特集

■東海支部会員作品2019

常葉大学静岡草薙キャンパス	6
愛知淑徳大学 長久手キャンパス 健康栄養学科棟	8
テレビ静岡新本社	9
中京銀行今池支店	10
東春信用金庫名古屋支店	11
四日市北警察署	12
愛知トヨタ自動車 瀬戸営業所	14
東海興業株式会社 高浜第2工場	16
こねくとキッズ鈴鹿	18

■TOKAI Sketch Book

■特集Ⅰ 建築がつなぐ都市、地域、まちの記憶(第2回)

1: 三重県大台町・旧大杉小学校・「大杉谷自然学校」 ●中井孝幸	22
2: 地域を学び伝える自然学校 — 地域の終焉から未来を見つめる — ●大西かおり	23
3: 小学校を核に地域で輝く拠点づくり — 縮減時代の地域再生を先取りした大杉谷自然学校 — ●浅野 聡	27
4: 廃校活用の実態とその可能性 — 愛知県・岐阜県・三重県の事例を通して — ●野澤英希	29
5: 小学校から自然学校へ — 地域の記憶を未来へ刻む — ●中井孝幸	33

■特集Ⅱ 納マリ倶楽部

東海支部青年部会における30代前後の若手設計者の活動報告

●塩田哲也・中井孝幸・久保久志・三宅伸幸・鈴木豊一郎・小杉嘉文・佐藤 剛・鶴飼浩平	36
---	----

■東海の建築：屋根

施設をつなぐ「縁側モール」 阿久比町庁舎	41
超高層ビルの足元に賑わいを生む「第二の大地」 グローバルゲート屋上庭園	42
社員を家族のように大切にする企業風土のシンボルとして CKD株式会社企業内託児所	43
ショッピングモールを印象づけるHPシェル構造の屋根 ららぽーと名古屋みなとアクルス	44

■東海支部だより

上海・杭州建築の旅 — 速度・密度から記号へそして記号性の剥奪・漂流 — ●高木舞人・北川啓介	45
--	----

会告	＜会員の集い IN TOKYO＞トークセッションと懇親のタベ U-35委員会企画 6th action 「建築とOSAKA」第2回 フューチャーセッション＜予告＞ 第4回建築セミナー 建築と設備の接点 トラブル予防 のツボ 論考コンクール1次審査通過論考決定、京都支部主催 「都市の緑の育成管理」勉強会 若き創造者たちへ「第66回青年技術者顕彰」のご案内	1 2
gallery	Casting The Invisible ●大西康明	4
法令コーナー	実務経験要件を資格登録要件に見直し 建築士法の一部を改正する法律(平成30年改正)の概要 ●佐々木雅也	50
構造の頁	膜型圧電セラミックスを用いたスマートな制振鉄骨階段 SPADA®-stairs ●熊野豪人	51
再読 関西の建築	池坊 ●石田潤一郎	52
information	六本木クロッシング2019展：つないでみる／特集展示 「なにわ人物誌 三好木屑」／クリスチャン・ボルタ ンスキー-Lifetime／The ACG Collection—大西康明、 新平誠洙、水野勝規	54
月間の動き	2019年1月	56

Casting The Invisible

彫 刻 家

大 西 康 明

制作は現在の境界線を明らかにし、輪郭を更新するような作業です。作品と空間を共にする身体感覚に働きかけ、人の手を超える体系を暗示させながら、この世界やその裏側を知る方法を探ります。

ポリエチレンシートの薄い膜や接着剤の無数の線など、形に留めにくい素材を用いて、透過性を保ちながら、空間を満たします。それは特定の事象を示すものではなく、解釈を見る者に大きく委ねる彫刻です。

空間は、現象や行為を伴って様々な作用が溜め込まれた容器のように機能します。見えないものや捉えられないものを空間に抽出する。「それいがい」を扱うことで、「そのもの」がよりくっきりと見える。

その先や向こう側に思いを巡らせ、空洞や空白の部分を想像力で補完することで、人はそれぞれの実体を得ることが可能です。

大西 康明（おおにし やすあき）

1979 大阪府生まれ
2001 筑波大学芸術専門学群美術専攻卒業
2004 京都市立芸術大学大学院美術研究科彫刻専攻修了

近年の主な展覧会

▷2019
「The ACG Collection」アートコート
ギャラリー、大阪（1月15日-3月16日）

▷2018
「5Rooms II ーけはいの純度」
神奈川県民ホールギャラリー

「The Moon」Louisiana Museum of
Modern Art、デンマーク

個展「Hidden Landscapes」
Coconino Center for the Arts、アメリカ

▷2017
「On the Art of Building a Teahouse」
Neues Museum Nuremberg、ドイツ

企画編集：作品作風小委員会
協力：アートコートギャラリー



《reverse of volume RG》ポリエチレンシート、接着剤|2012|個展「reverse of volume」Rice Gallery、アメリカ|撮影：Nash Baker



《vertical emptiness FP》木、接着剤、尿素、他
2016|「Fresh Paint 8 - Tilted」Yarid Hamizrach、イスラエル



《untitled》ポリエチレンシート
2018|「水と土の芸術祭」万代島多目的広場、新潟



《vertical volume ACG》ポリエチレンシート、ファン、タイマー、他
2014|個展「空洞の彫刻」アートコートギャラリー、大阪|撮影：豊永政史



東海支部会員作品2019

常葉大学静岡草薙キャンパス

愛知淑徳大学 長久手キャンパス 健康栄養学科棟

テレビ静岡新本社

中京銀行今池支店

東春信用金庫名古屋支店

四日市北警察署

愛知トヨタ自動車 瀬戸営業所

東海興業株式会社 高浜第2工場

こねくとキッズ鈴鹿

『建築と社会』東海支部特集特別編集委員会

委員長：篠原佳則

特集記事担当委員：中井孝幸、塩田哲也

作品作風担当委員：土井敬三、今井 亨

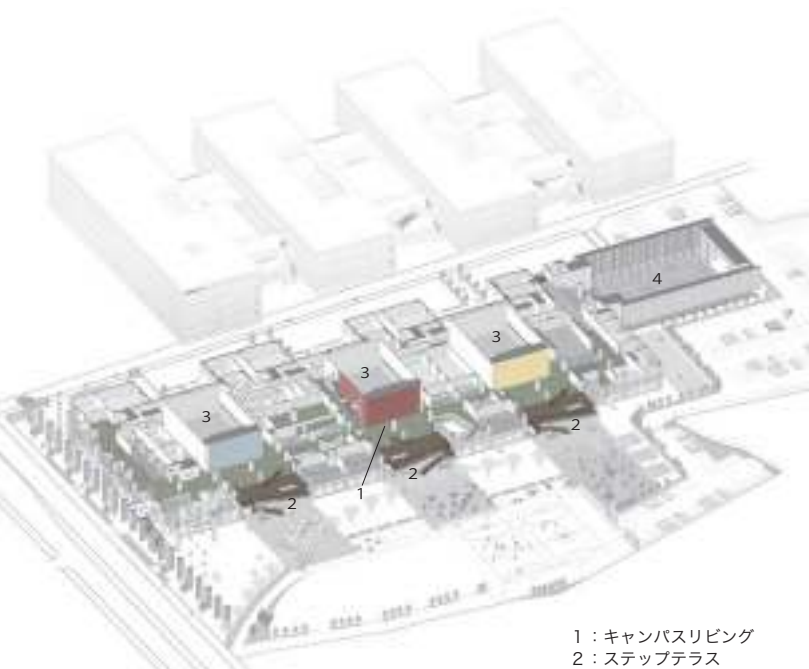
支部だより担当委員：松元親司、今津芳清

委員（順不同）：河田克博、福田泰造、佐伯 博、加藤武範、富田昌志、本梅 誠、宮丸孝史、井平 敬

吉祥子、西澤太良、芳山明久、野呂和弘、澤田康司、片山友美

常葉大学静岡草薙キャンパス

建 築 主 学校法人常葉大学
設計・監理 竹中工務店
施 工 竹中工務店



- 1：キャンパスリビング
- 2：ステップテラス
- 3：大教室
- 4：アリーナ

キャンパス内動線の大動脈となる「キャンパスリビング」は内部空間へ周辺環境を取り込み、多分野、多機能が混じり合う交流の場である。2階に400席教室、3階に300席教室をつくる大壁面は3箇所それぞれの表情を持ったボーダータイル壁面とし、上部のトップライトからの光を受ける知の集積を象徴する壁とした。

所 在 地 静岡市駿河区弥生町
敷地面積 38,414.35㎡
建築面積 14,892.55㎡
延床面積 50,928.22㎡

構造規模 S造 地上6階
工 期 2016年9月～2018年2月
最 寄 駅 JR東海道線 草薙駅
撮 影 エスエス名古屋



常葉大学は学生数4000人規模の旗艦シップとなる静岡草薙キャンパスを開設した。街の中心から10分程度で着いてしまう駅前の計画地は、利便性が高いだけではなく、周囲を豊かな自然に囲まれており、年間を通して温暖で気候条件も厳しくない。このような場所においてこそ、「自然・地域・交流の接点」となる新しいキャンパス（地方中核都市型キャンパス）が生み出せると考えた。建物は、大学の顔となりキャンパスの結界になる「ゲート」、豊かな自然環境を享受する「ステップテラス」、3階以上で内部の異なる4棟のボリュームをまとめるルーバーなどの「スキン」によって特徴づけられている。2階の「キャンパスリビング」は、上下階もつなぐことで空間に都市性を与え、立体的なネットワークの中心として教室内に留まっていた「学び」を開放し、多分野、多機能が重なり合う交流の場としてインタラクティブな学びの場を提供する。吹抜上部のトップライトや隣接するテラスから光、風、緑を取り込むことで目的空間である教室や事務室へ豊かな外部環境を届ける媒体として機能している。南から北へと22本の桜を建物と対峙させながら植えて並木をつくる東側のオープンスペースには多様な活動を促す「食」「知」「育」「動」の4つのテラスを設けた。それぞれは近傍にある1階内部の機能だけでなく2階から4階に設けたステップテラスとも立体的に連動することで、活動は地域とつながり、キャンパスは大学が掲げる「開かれた知と地の拠点」となっている。

（長谷川寛、伊藤潤、石黒紘介、牧村将吾/竹中工務店）



東面のオープンスペースに面した4棟構成の建物ボリューム
南側（写真左）にはゲート、北側（写真右）にはアリーナ外壁が位置する



豊かな自然環境を取り込む「キャンパスリビング」



東側外観 市道沿いに配したテラス席と季節を感じる緑

愛知淑徳大学 長久手キャンパス 健康栄養学科棟

建 築 主 学校法人 愛知淑徳学園
設計・監理 日建設計
施 工 安藤・間

ひらいて、つながる、食と健康の学び舎

既存キャンパスから緩やかに延びる上空通路につながる、食と健康を学ぶ「健康栄養学科」の実習棟。

丘陵地麓の戸建住宅地に接して建てられた、おおらかな弧を描く大屋根の低層校舎である。

ゆるやかにカーブした道沿いに樺を中心とした植栽で季節感のある景観を創ると共に、実習厨房を望む見学通路や食堂テラス、天然木ルーバーの勾配天井をもつ、スタディコーナーやライブラリーを配した。

食を学ぶ学生たちの姿を建物内外で垣間見ることのできる仕掛けをちりばめた。

(奥宮由美、石森秀一／日建設計)

所 在 地 愛知県長久手市片平二丁目9

敷地面積 4,686.39㎡

建築面積 3,198.54㎡

延床面積 5,692.63㎡

構造規模 RC造、S造 地上2階

工 期 2016年1月～2017年2月

最 寄 駅 地下鉄東山線 本郷駅、藤が丘駅

撮 影 (株)エスエス



2階 天然木ルーバーの勾配天井を持つスタディホールとライブラリー



1階 北側公園に面した明るい調理学実習室



テレビ静岡新本社

建 築 主 株式会社 テレビ静岡
 設計・監理 日建設計
 施 工 鹿島・静鉄・鈴与 特定建設工事共同企業体

所 在 地 静岡県静岡市駿河区栗原18番65号
 敷地面積 10,156.23㎡
 建築面積 1,937.61㎡
 延床面積 6,637.65㎡
 構造規模 SRC造、S造 地上5階
 工 期 2015年4月～2018年6月
 最 寄 駅 JR東海道線 東静岡駅、静岡鉄道静岡線 県総合運動場駅
 撮 影 (株)エスエス

開局50周年を迎えるにあたり、マスター機器更新に合わせて敷地内建替えを行った。外観は富士の山容や日本平の景観と一体となる「緑の丘」をイメージし、階段状にセットバックした白いバルコニーの緑化や前庭のイベント広場の植栽を連続させて、地域に親しまれるような緑の景観をつくった。エントランスホールとカフェには「木漏れ日」のモチーフを鏡にセラミックプリントしたデザインウォールを掛け、周辺の緑を映し出すことで、広がりのある明るい空間とし、賑わいを演出している。整形でオープンなワンルームのワークプレイスは、様々なワークスタイルに対応できる計画とし、サブやNV編集室などの放送局特有の部屋をガラス張りとすることで視覚的な一体感をつくった。また、2階から3階のオフィスの窓際に上下階を直接つなぐ階段を掛け、周囲にミーティングテーブルなどのマグネットスペースを設けることで、階をまたいだコミュニケーションを活性化して創造的な仕事をサポートする環境づくりを行っている。

震災被災直後から放送業務を継続できるよう、免震構造を採用。各種インフラの途絶に備えたBCP計画を行い、クールヒートトレンチ、外気冷房、オフィスの自然換気窓の設置など、災害時に有効活用できる環境配慮手法を中心に採用した。

(小谷陽次郎、岡田宏介、樺山由佳／日建設計)



イベント広場と一体利用も可能なエントランス



吹き抜け階段付近にマグネットスペースを設けた事務室



外観 南東面

中京銀行今池支店

建 築 主 中京銀行
 設計・監理 伊藤建築設計事務所
 施 工 日東建設

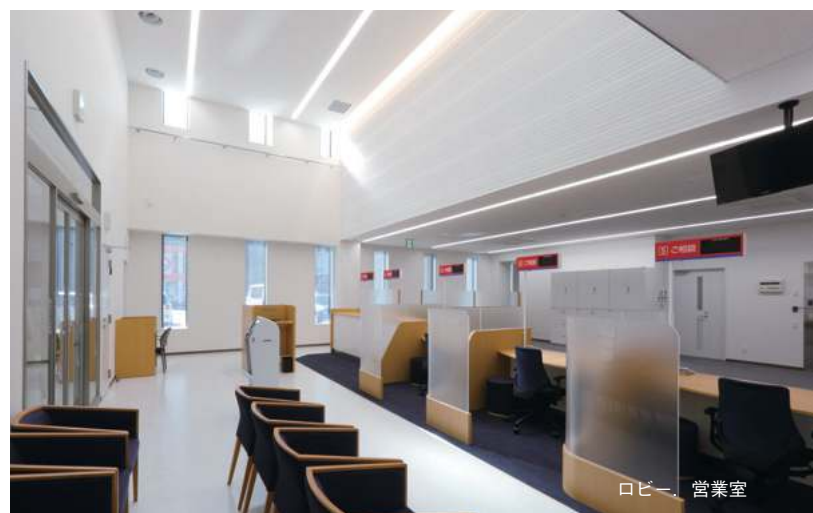
銀行支店の建替えである。建設地は名古屋市環状線沿いにあり、地下鉄今池駅から徒歩3分程度の繁華街で、昼夜を問わず賑やかな場所である。名古屋市都市景観条例で今池都市景観形成地区に指定されており、商業、娯楽、文化が混在する街の特性を活かした、個性的で魅力ある都市空間を担う建物を目指して設計した。大通りに面した東側ファサードは、フロストガラスと透明ガラスが連続するカーテンウォールとし、昼間は銀行らしい上品さを醸し出し、夜間は「あんどん」のように廻りを照らし、街の賑やかさに寄与するものとした。南側の外壁は、室内環境負荷の低減を目的としたLow-E複層ガラスによるスリット窓と600角大判タイルのコンビネーションで構成し、東正面カーテンウォールとの対比を意識してデザインした。限られた敷地の中でお客様スペースを優先的に確保しながらコンパクトに建物機能を確保した。待合ロビーは吹抜空間として視覚的な広がりを持たせ、快適性の向上を図っている。

(梶井信嘉／伊藤建築設計事務所)

所 在 地 名古屋市千種区今池3丁目4-14
 敷地面積 352.16㎡
 建築面積 320.74㎡
 延床面積 626.54㎡
 構造規模 S造 地上2階
 工 期 2018年4月～2018年11月
 最 寄 駅 地下鉄 今池駅
 撮 影 リフレクト



夜景 南東面



ロビー 営業室



東春信用金庫名古屋支店

建 築 主 東春信用金庫
 総 合 監 修 ティーファス
 設計・監理 伊藤建築設計事務所
 施 工 滝建設



外観 北西面

本建物は旧支店の老朽化による建替えに伴い建設された。敷地は名古屋市の幹線道路である広小路通り沿いに位置しているため、通りからの視認性に配慮し、通りに面して間口いっぱいに建てる計画とした。

必要最小限の機能を有したコンパクトな支店とするため、カウンターと営業室を完全に分離しカウンター内に窓口対応に必要な機器をレイアウトできるスペースを確保した。また、間仕切りは将来レイアウト変更する場合に対応できるようパーティションとした。

外観は1階の開かれた店舗としての透明性のあるガラス張り、2階の金融機関としての堅固で重厚なイメージの大判タイル張りの素材の差異を対比的に使用し、親しみやすさと堅実さを表現した。

(大河内直哉、鈴木里美／伊藤建築設計事務所)



ロビー

所 在 地 愛知県名古屋市中千種区春岡一丁目204、205

敷地面積 547.17㎡

建築面積 239.56㎡

延床面積 383.34㎡

構造規模 S造 地上2階

工 期 2018年3月～2018年10月

最 寄 駅 地下鉄 池下駅

撮 影 アーキフォトKATO／加藤敏明



コーナーのガラスボックスが地域への顔をつくる北西側外観 ①

規則正しいグリッドファサードによる北側夕景 ②



四日市北警察署

建 築 主 三重県
設計・監理 安井建築設計事務所
施 工 鴻池・大宗・堀田特定建設工事共同企業体（建築）
藤原・カキトー特定建設工事共同企業体（機械設備）
桑名電気・三重電設特定建設工事共同企業体（電気設備）

津波浸水地域に立地し、老朽化・狭隘化が進んでいた旧四日市北警察署を、災害時緊急輸送路となる高速道路インターチェンジに近く、津波の恐れがなく県民を見守ることのできる高台の地に移転建替えるプロジェクトである。新たな治安・防災活動拠点として「強さ、正しさ、温かさ」をコンセプトに計画した。

いざという時に頼りになる「強さ」を持つ警察署として、一般来庁者エリアと警察エリアの明快なゾーニング、一般動線と護送動線の確実な分離により、警察機能を最大限に発揮できるよう配慮した。また大地震後にも機能を継続可能とするため、基礎免震構造を採用した。

地域の安全の象徴としての「正しさ」を持つ警察署として、PCaPC造とすることでロングスパンを実現し、自由度が高く正しい執務を行える空間とした。また外観はPCa部材によるグリッド構成によって、秩序ある規則正しい表情とした。このグリッドはメンテナンスバルコニーとなり、維持管理性の向上および被疑者逃走防止に貢献している。

県民や地域を受け入れる「温かさ」の表現としては、四日市の萬古焼や三重の豊かな森林資源をふまえた土と木の素材感を各所に用いた。外装タイルは土色のアースカラーとし、玄関庇軒天は県産木材張り、内部カウンターにも木材を用いた。またメインアプローチに面した1階北西角部を、腰壁部を木目調としたガラスボックスとし、地域に開かれた明るく親しみやすい表情を演出した。

（寺西敦敏、奥村幸生／安井建築設計事務所）



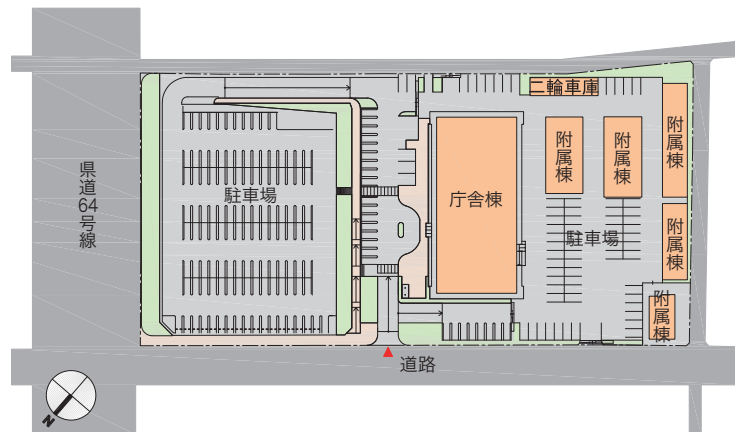
北東側外観 ③



軒天に県産木材を活用した玄関庇 ④



カウンターに木を活用したエントランスロビー ⑤



所 在 地 三重県四日市市大字羽津4452番地
敷地面積 12,661.43㎡
建築面積 2,335.22㎡
延床面積 5,755.30㎡
構造規模 PCaPC造一部RC造 地上5階
工 期 2016年10月～2018年7月
最 寄 駅 近鉄名古屋線 近鉄富田駅
撮 影 サンカメラ ①②③、三重県警 ④⑤⑥



道場 ⑥



木調仕上やタイル仕上を用いた温もり溢れるショールーム



サービス工場 外観



ショールーム 外観

愛知トヨタ自動車 瀬戸営業所

建築主 愛知トヨタ自動車株式会社
 設計・監理 安井建築設計事務所
 施工 杉本組
 施工協力 川北電気工業、アベックエンジニアリング
 創栄、協和建材、尾州工業、JOBART

「瀬戸物」の由来ともいわれる、やきものまち瀬戸。この地で長く愛される地域に根差した店舗づくりをテーマに、レンガやタイルなどの素材をふんだんに用いる計画とした。
 敷地は交通量の多い前面道路を短手とした細長い矩形状をしている。そのため、ショールームは前面道路に面する限られた敷地間口を最大限に活用した門型構成とし、目透かしレンガを組み合わせた「せとのファサード」とすることで、店舗の存在をよりアピールできる外観計画とした。目透かしレンガは外壁面から持ち出したスクリーン状とし、下部から上部に向かって徐々にレンガ高さを小さくすることで、密度の粗い下部ではショールーム内外に適度な距離感を生み出すスタレの役割を、密度の細かい上部では屋上駐車場の目隠しとしての役割を持たせている。車両進入部はレンガとは対比的なガラスカーテンウォールとし、メーカーサインをより印象的に演出すると共に、レンガに適度な焼きムラをつけることで前面道路への圧迫感低減を図った。平面計画は、前面道路からショールーム、事務所機能、サービス工場の3つのエリアに分け、店舗運営の核となる事務所エリアから各所への見通しとコンパクトな動線を確保した。店内は木調仕上をベースとした温もりのある環境とし、各所にアクセントとしてタイル仕上をあしらうことで、お客様が随所に瀬戸らしさを感じられる計画とした。

(清水満、小田祐司／安井建築設計事務所)

所在地	愛知県瀬戸市共栄通3-25	構造規模	S造 地上2階
敷地面積	3,081.56㎡	工期	2017年9月～2018年10月
建築面積	1,619.25㎡	最寄駅	名鉄瀬戸線 新瀬戸駅
延床面積	1,781.58㎡	撮影	エスエス名古屋支店



ショールームと一体的につながるピロティ駐車場



タイル仕上をあしらった総合受付カウンター

東海興業株式会社 高浜第2工場

建 築 主 東海興業株式会社
設計・監理 安井建築設計事務所
施 工 熊谷組名古屋支店



アプローチより



北東より 左奥が高浜第1工場

既存建物を有効活用した経済的な工場の提案

約20年前に当社で設計し建設された元食品工場の躯体・外装を極力有効活用し、東海興業の新たな工場として生まれ変わらせるプロジェクトである。既存建物の鉄骨構造躯体及びアルスター鋼板の外壁・屋根は劣化損傷はほとんど見られず十分利用できる状態であった。既存建物の西側3分の1の部分は十分な階高があったため、既存のまま利用する方針とした(図1)。不要な床の設備ピットを埋め、屋根をダブル折版化する改修工事を行い、断熱性能を高めて働きやすい環境に改善した。東側3分の2の部分は天井高さが不足していたため、上屋を解体し、ほぼ同規模にて建て替える方針とした。その際、既存建物の下部構造(スラブ、基礎、地中梁、杭)は出来るだけ解体せず活用することとし、床の解体範囲をなるべく減らす工夫として、既存建物の外側に柱を新設し、内部の柱も出来るだけ少なくなるよう計画した(図2)。

解体範囲を削減し、本来撤去されるべき杭を全て活用したことにより、全面解体・建替を行う場合と比較して、躯体工事費として20%程度、全体としては10%程度の工事費の削減を達成した。また、廃棄物を大幅に削減することで環境保全への貢献につながった。

白いシンプルな建物は、隣接する高浜第1工場とイメージを合わせたもので、東海興業高浜工場としての一体感を大切にしたい。また、北側の近隣住宅への音や臭いに対する配慮として、北側外壁には窓を一切設けず、通風・採光のためにハイサイドライトを確保する計画とした。

(本梅誠、奥村幸生、西野培夫、築谷朋也)

／安井建築設計事務所



図1 配置図

所在地	愛知県高浜市芳川町
敷地面積	20,931.62㎡
建築面積	6,974.64㎡
延床面積	8,223.19㎡
構造規模	S造 地上2階
工期	2018年2月1日～2018年10月31日
最寄駅	名鉄三河線 三河高浜駅
撮影	(株)エスエス古屋

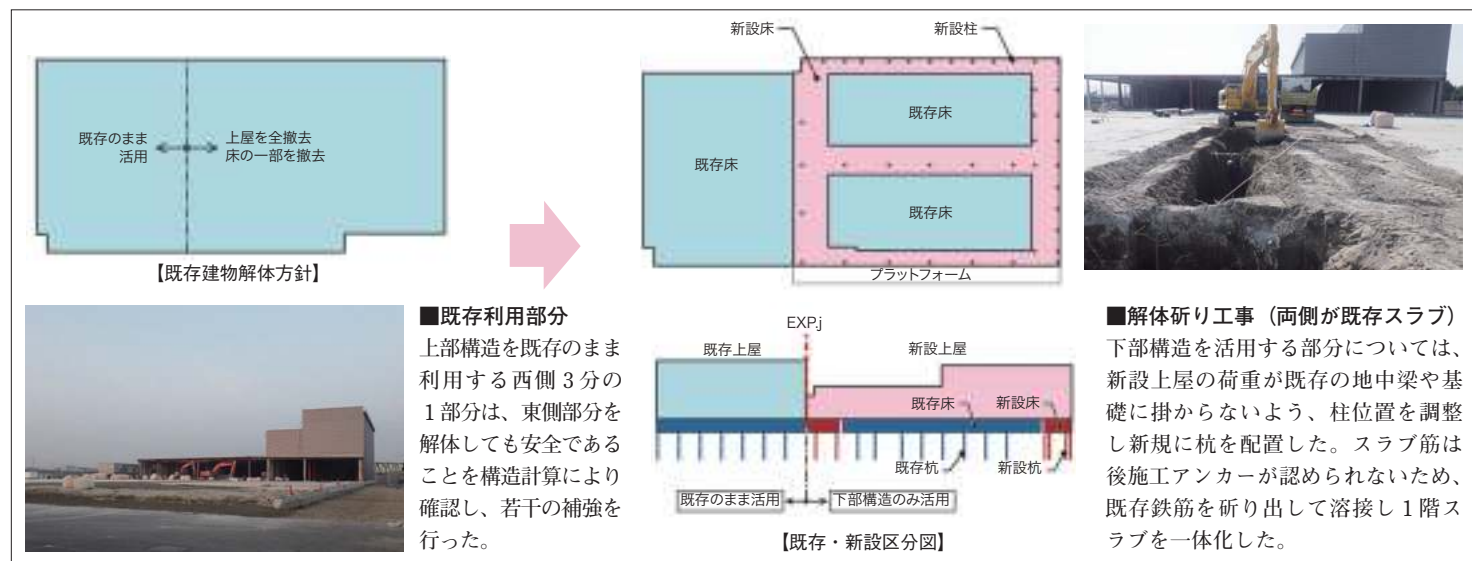


図2 解体範囲を極力減らす計画



南西より 手前が既存建物



プラットフォーム



西側外観



廊下・ウッドデッキ



乳児室

こねくとキッズ鈴鹿

建 築 主 住友電装株式会社
 設計・監理 東畑建築事務所
 施 工 トヨタT&S建設（建築）
 住友電設（設備）
 スミセツエンジニアリング（設備）

所 在 地 三重県鈴鹿市三日市南3丁目8
 敷地面積 2,806.20㎡
 建築面積 322.50㎡
 延床面積 295.09㎡
 構造規模 S造 地上1階
 工 期 2016年12月～2017年3月
 最 寄 駅 近鉄名古屋線 白子駅
 撮 影 エスエス名古屋支店

こねくとキッズ鈴鹿は、自動車のワイヤーハーネスを製造する住友電装㈱の鈴鹿製作所に建設された企業主導型保育園です。育児の問題を抱える若い世代の社員達が、安心して仕事に集中出来る職場の環境づくりとして整備されました。

敷地背後の住宅地に配慮した建物配置と、片流れ屋根のシンプルな外観構成とし、自然光と通風確保を意識した建築計画としています。活発な子供達の安全に配慮した柱や家具の出隅処理、不用意に子供たちが扉を開けない建具や家具への工夫、指詰防止対策等シンプルな意匠でまとめています。年齢に応じた保育室は、使い分けが出来る扉を設けている他、スタッフが子供達を見守りやすい窓の設置等運営面にも配慮しています。保育室や乳児室には温水機器床暖房を採用しています。アレルギー対応食用の厨房設備を備え、時にはバイキング形式でも子供達が昼食を楽しめる様に、配膳カウンター家具への工夫も盛り込んでいます。子供の目線高さの変化ある妻窓や、園庭の築山など、子供たちの興味や遊び心に働きかける設も行っています。深めの軒下は、梅雨の長雨や夏の強い日差しを避けて遊べる屋外スペースです。既存樹の桜と共に、四季の移り変わりを感じる山法師や金木犀などを植え、育児世代の社員が安心して子供を預けられる場として、そしてその子供達が、楽しく過ごし、樹木が育ち花を咲かせるように、すくすくと育ってくれる事を願っています。

（米田聡／東畑建築事務所）



保育室



エントランス



保育室



アプローチからの全景



豊川市民病院 院内保育所 はいっぽ

設計 (株)日建設計
施工 (株)波多野組

所在地 愛知県豊川市八幡町野路23番地
敷地面積 41,875.94㎡
建築面積 638.57㎡
延床面積 617.07㎡
構造規模 W造、地上1階
工期 2017年8月～2018年3月
最寄駅 名鉄豊川線 八幡駅



静岡ホーム保育学園

設計 (株)飯尾建築設計事務所
施工 平井工業(株)

所在地 静岡市葵区井宮町
敷地面積 2,507㎡
建築面積 930㎡
延べ面積 1,394㎡
構造規模 S造、地上2階
工期 2017年3月～2018年3月
最寄り駅 JR東海道本線 静岡駅から静鉄バス「妙見下」下車



岐阜地方・家庭裁判所大垣支部

設計 (株)安井建築設計事務所
施工 日本国土開発(株) (建築)、
三和電気土木工事(株) (電気)、
三建設備工業(株) (機械)

所在地 岐阜県大垣丸の内1-22
敷地面積 3,321.00㎡
建築面積 930.65㎡
延床面積 2,722.93㎡
構造規模 RC造、地上3階
工期 2016年11月～2018年3月
最寄駅 JR東海道本線 大垣駅



京都銀行長浜支店

設計 (株)東畑建築事務所 名古屋事務所
施工 大和ハウス工業(株) 滋賀支社

所在地 滋賀県長浜市八幡町441番地5
敷地面積 871.04㎡
建築面積 407.40㎡
延床面積 388.52㎡
構造規模 S造、地上1階
工期 2018年6月～2018年10月
最寄駅 JR北陸線 長浜駅



愛知製鋼 本館

設計 竹中工務店
施工 竹中工務店

所在地 愛知県東海市荒尾町ワノ割1番地
敷地面積 5,175.71㎡
建築面積 2,016.19㎡
延床面積 9,605.76㎡
構造規模 S（免震）造、地上8階、塔屋1階
工期 2016年1月～2018年2月
最寄駅 名鉄常滑線 聚楽園駅



ヤマハイノベーションセンター開発棟 (本社21号館)

設計 竹中工務店
（展示エリア共同設計：乃村工藝社）
施工 竹中工務店

所在地 静岡県浜松市中区中沢町10番1号
敷地面積 39,715.44㎡
建築面積 8,499.27㎡
延床面積 35,497.41㎡
構造規模 S造、地上7階、塔屋1階
工期 2016年12月～2018年5月
最寄駅 遠州鉄道 八幡駅



川島モータース(株)PLAZA浜松

設計 (株)飯尾建築設計事務所
施工 中村建設(株)

所在地 静岡県浜松市西区入野町
敷地面積 1,370㎡
建築面積 531㎡
延べ面積 521㎡
構造規模 S造、地上1階
工期 2018年1月～2018年6月
最寄駅 JR東海道本線 浜松駅から遠鉄バス「南平東」下車



フォレストノート岐阜工場第1工場 第3号棟（森のホール）

設計・施工 金子工業(株)
企画・監修 (株)ウッドフレンズ

所在地 岐阜県養老郡養老町大坪15-1
敷地面積 44,955.67㎡
建築面積 3,738.99㎡（内、森のホール136.5㎡）
延床面積 3,927.35㎡（内、森のホール136.5㎡）
構造規模 RC, W混構造（森のホールはW造）
工期 2017年11月～2018年5月
最寄駅 JR東海道本線 大垣駅から名阪近鉄バス「蛇持」下車

東海支部特集

「社会と建築」という流れ

昨秋は中国の上海・杭州建築の旅を行った。東海支部だけでなく、大阪、京丹後からも参加者があった。参加者の置かれた状況が刻々とかわり予測がつかないスリリングな旅であった。現代の建築が猛烈なスピードで取り巻く状況が変わる中で、まちづくり国づくりという視点において歴史という手がかりを探しているようにも感じられた。スピード感のある旅の様子は30カットの写真を盛り込んだ東海支部だよりをぜひご覧ください。

中国に限らず日本においても、建築が街をつくるのではなく、実社会における情報リテラシーにより建築が左右されているのではないかと感じられる。「建築と社会」ではなく「社会と建築」という関係性となってきたのではないのでしょうか。

そのような状況において、今年の東海支部特集は昨年に引き続き、「建築がつなぐ都市、地域、まちの記憶（第2回）」と若手設計者による「納マリ倶楽部」の活動という2つの特集にて構成しました。特集Ⅰは今まであった地域に根付き、住民の記憶にある学校という建物による新しいコミュニティ拠点づくりの試みを、多角な視点であらわにしました。特集Ⅱは良質な建築を題材にし、協会を構成する若手設計者たちによる率直な感性を記してもらいました。どちらの特集も「社会と建築」という流れに対して示唆に富んだ内容となりました。

「東海の建築」では「屋根」というテーマに対して、屋根形状2件、屋上利用2件を取り上げることができました。

(東海支部特集特別編集委員会委員長 篠原佳則)

■特集Ⅰ 建築がつなぐ都市、地域、まちの記憶（第2回）

- 1：三重県大台町・旧大杉小学校・「大杉谷自然学校」／中井孝幸
- 2：地域を学び伝える自然学校 ―地域の終焉から未来を見つめる―／大西かおり
- 3：小学校を核に地域で輝く拠点づくり ―縮減時代の地域再生を先取りした大杉谷自然学校―／浅野 聡
- 4：廃校活用の実態とその可能性 ―愛知県・岐阜県・三重県の事例を通して―／野澤英希
- 5：小学校から自然学校へ ―地域の記憶を未来へ刻む―／中井孝幸

■特集Ⅱ 納マリ倶楽部

東海支部青年部会における30代前後の若手設計者の活動報告

／塩田哲也・中井孝幸・久保久志・三宅伸幸・鈴木豊一郎・小杉嘉文・佐藤 剛・鵜飼浩平

■東海の建築：屋根

施設をつなぐ「縁側モール」 阿久比町庁舎／安井建築設計事務所

超高層ビルの足元に賑わいを生む「第二の大地」 グローバルゲート屋上庭園／竹中工務店

社員を家族のように大切にする企業風土のシンボルとして CKD株式会社企業内託児所／日建設計

ショッピングモールを印象づけるHPシェル構造の屋根 ららぽーと名古屋みなとアクルス／竹中工務店

■東海支部だより

上海・杭州建築の旅 ―速度・密度から記号へそして記号性の剥奪・漂流―／高木舞人・北川啓介

三重県大台町・ 旧大杉小学校・ 「大杉谷自然学校」

愛知工業大学工学部建築学科
教授

中井孝幸

1967年 大阪府生まれ
1991年 三重大学工学部建築学科卒業
1993年 三重大学大学院工学研究科修士課程
修了
1993年 三重大学工学部建築学科助手
2001年 安井建築設計事務所名古屋支社
2005年 INA新建築研究所名古屋支社
2006年 愛知工業大学工学部都市環境学科
講師
2008年 愛知工業大学工学部都市環境学科
准教授
2009年 愛知工業大学工学部建築学科准教授
2016年 愛知工業大学工学部建築学科教授
現在に至る

■東海特集号テーマ：建築がつな ぐ都市、地域、まちの記憶

昨年度から、東海特集号の新しいシリーズとして、「建築がつなぐ都市、地域、まちの記憶」と定め、第1回は名古屋市・稲葉地配水塔・演劇練習場「アクテノン」を取り上げた。稲葉地公園の中に立地しており、配水塔としての役目は比較的にかつたが、建物自体の堅牢さもあって、その後は地区図書館、演劇練習館へ転用され、現在も使い続けられている建物である。

転用を繰り返しながらも使い続けられているため、配水塔、図書館、演劇練習館のそれぞれの計画について、また文化財としての活動についてもレポートしてもらい、見学記も含めていろんな視点から論考を行った。

■東海支部：愛知、三重、岐阜、 静岡

さてそれでは第2回目の施設は、どうするのか。東海支部の役員会や編集委員会でも協議をしたが、なかなかよいアイデアが浮かばなかった。新テーマ2回目にして大ピンチとなったが、かねてより「東海支部」といっても、やはり名古屋を中心とした愛知県内を対象にすることが多いことが気になっていた。そこで、東海支部ならばとの思いで、愛知、三重、岐阜、静岡など地域を絞って対象を探していくことを考えついた。

私自身が三重県に縁が深いこともあり、第2回目は三重県を対象とすることを決め、施設を検討し始めた。しかし、文化財など有名な建物は出てくるが、次がなかなか出てこない。たまたま「アクテノン」は文化財であったが、特集では歴史的に重要な建造物だけではなく、私たちの身の回りにある長く使い続けている建物を取り上げたいと考えている。



図1 宮川の清流 (2018年11月)

それならば、詳しい人に教えるを乞おうと思い、三重大学の工学部建築学科准教授の浅野聡先生にご相談した。浅野先生は、都市計画の分野が専門で、歴史的な建造物や市民参加型のまちづくりなど、たいへん幅広く研究活動を行っている方である。その浅野先生からご紹介して頂いたのが、今回対象とした「大杉谷自然学校」であり、NPO法人を立ち上げられた大西かおり氏である。

■第2回「大杉谷自然学校」

大台町大杉谷は、三重県と奈良県との境に位置し、地域全体が吉野熊野国立公園と奥伊勢宮川峡県立公園に含まれる、風光明媚な峡谷である。林業が盛んであったが、ダムの建設や高度経済成長期の転職により、急速に過疎化が進み、現在は高齢化率が70%を超える限界集落となっている。

町内にあった3つの小学校が廃校になり、その中の旧大杉小学校は平成9年度に平成11年度から統合することが決定し、平成11年3月に閉校、平成13年3月に廃校し、平成13年4月から大杉谷自然学校が開校している。

旧大杉小学校の跡地利用は、住民が主体となって行政と共に検討された。地域内での高齢化も進み、旧宮川村の中心部に（仮称）保健福祉総合センターを建設、校舎跡を地域総合センターに再利用する計画が持ち上がった。

学校の統廃合は、今後も進められ、全国で様々な取り組みが行われているが、愛着のある学校施設の利活用を論考していきたい。

■活用、まちづくり、建築計画な ど様々な立場からの論考

特集号としては、様々な視点から一つの建物を取り上げたいと考え、まず小学校跡地の活用とそこでの活動内容についてNPO法人校長の大西かおり氏、地域再生やまちづくりの視点から既存建物の活用について三重大学の浅野聡先生、愛知県・岐阜県・三重県における廃校活用の動向とその可能性について愛知工業大学の野澤英希先生に執筆して頂き、現地取材による見学記として中井が担当し、過疎地域にある施設の「保存と活用」についても論考していきたい。

(なかい たかゆき)

地域を学び伝える 自然学校

地域の終焉から
未来を見つめる

NPO法人大杉谷自然学校
校長

大西かおり

1972年 三重県多気郡大台町生まれ
1995年 三重大学教育学部中学校養成課程卒業
1995年 青年海外協力隊理数科教員隊員
1998年 帰国
1998年 三重県立高校にて常勤講師
2000年 (公社) 日本環境教育フォーラム「自然学校指導者養成講座」黒松内ぶなの森自然学校実習生
2001年 NPO法人大杉谷自然学校 勤務
現在に至る

■廃校の今

少子化に伴い全国的に学校の統廃合が進んでいる。平成14年度から平成27年度の間に全国で廃校になった公立学校は6,800校余であり、現存する校舎の約70%が再活用されている。用途は学校、庁舎、社会教育・文化施設、老人福祉施設、保育施設、児童館等の公共施設への転用の他、企業や創業支援、体験交流施設等民間の力を利用して運営されている廃校もある。

地域で廃校になった理由の多くが、過疎高齢化による少子化である。このような廃校を持つ自治体に共通するのが、都市から遠く交通が不便、主幹産業が一次産業であり不振、自然豊かな環境頼みの観光やインバウンド、

移住者誘致をするも過疎化や少子化は止まらないといった状況であろう。概ね行政の財政力は弱く、国の豊富な補助金を使って廃校の改修はできたとしても、その後の運営経費をどう捻出するのか、そして継続的に必要になる施設補修費を出し続ける価値があるのか、喫緊の検討事項となっているところも少なくないだろう。旧大杉小学校は2001年3月に廃校となり、同年4月に大杉谷自然学校が設立され、今年で19年目を迎える。設立当時には想像も及ばなかったほど社会や地域の変化が進み、今一度、廃校活用の意味について再考すべき岐路に立っている。廃校を持つ他の地域にも将来訪れるかもしれない廃校活用後の最前線にたつ旧大杉小学校のこれまでとこれからについて報告したい。

■旧大杉小学校の歴史

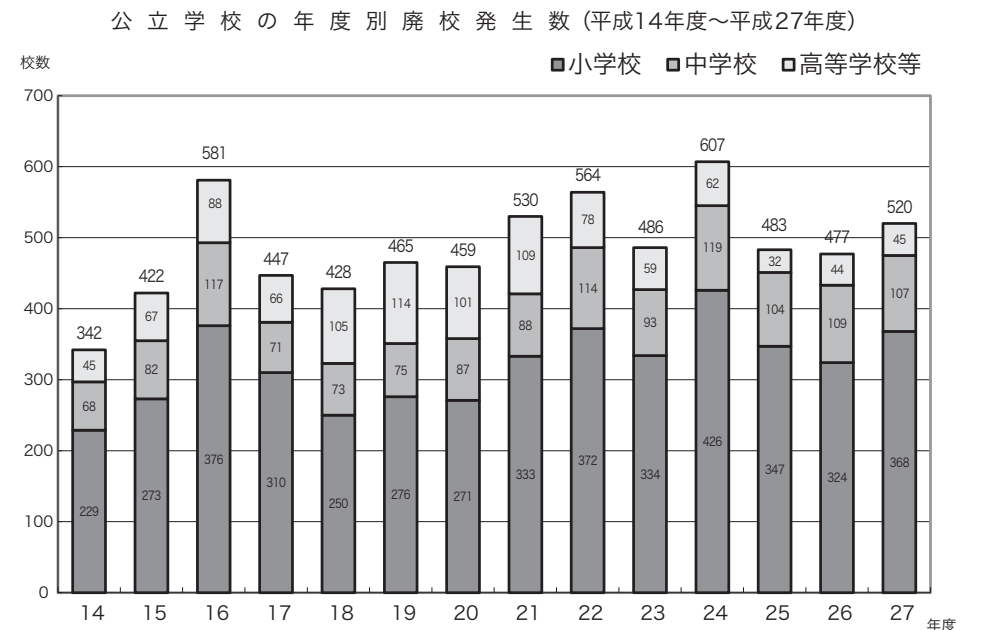
三重県大台町の最奥部、大杉谷地区は日本一水質が美しい川に何度も選ばれた一級河川宮川の源流及び上流域に位置する吉野熊野国立公園を含む自然豊かな地域である。この地に建つ鉄筋コンクリート2階建ての建物が旧大杉小学校である。大杉小学校は1921年の大杉尋常小学校の建設に始まり、1985年の現存校舎への建て替えを経て、1999年3月の閉校をもって、その78年の歴史を閉じた。前身の木造校舎が60年以上利用されたのに対し、鉄筋コンクリートの校舎は14年間しか使用されておらず、閉校時の在校児童数は4名だった。

主な活用用途	件数	
	H25	H27 (今回)
学校 (大学を除く)	1,379	1,609
社会体育施設	856	1,015
社会教育施設・文化施設	623	675
社会教育施設	516	604
文化施設	107	71
福祉施設・医療施設等	375	424
老人福祉施設	137	146
障害者福祉施設	84	92
保育施設	44	37
認定こども園	—	11
児童福祉施設 (保育所を除く)	26	41
放課後児童クラブ	46	54
放課後子供教室	21	21
医療施設	17	22
企業等の施設・創業支援施設	304	370
企業や法人等の施設	296	339
創業支援施設	8	31
庁舎等	279	268
体験交流施設等	191	239
備蓄倉庫	72	102
大学	30	35
住宅	15	12

(複数回答)

出典：文部科学省大臣官房文教施設企画部施設助成課作成

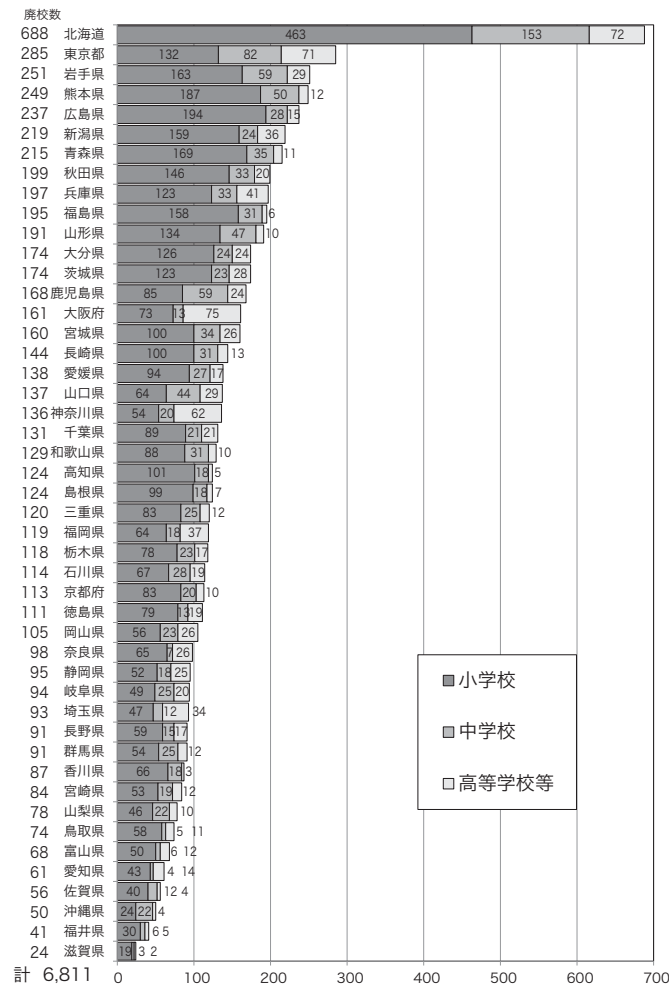
表1 廃校の活用用途



出典：文部科学省大臣官房文教施設企画部施設助成課作成

図1 公立学校の年度別廃校発生数

公立学校の都道府県別廃校発生数（平成14年度～平成27年度）



出典：文部科学省大臣官房文教施設企画部施設助成課作成

図2 都道府県別の廃校発生数



図4 1921年建設の大杉尋常小学校

■廃校から大杉谷自然学校へ

大杉谷自然学校は大杉谷地域総合センター2階の一部に事務所と図書室、倉庫を有し、官設民営の組織として2001年4月にスタートした。施設改修には環境省の補助事業を活用し、教室の統合、理科室を倉庫へと改装、身障者用トイレの設置、木材装飾、空調設備などの改修がなされた。

宿泊機能や野外炊飯施設を持たないため、大杉谷自然学校部分の施設改修は元の小学校設備を生かした最小限のものとなった。隣接した教員住宅は、自然学校やデイサービス利用者の食事を提供する調理室となり、地元の主婦たちが調理をするグループ「大杉谷せせらぎ会」を立ち上げた。



図5 大杉谷せせらぎ会の皆さん

小学校は元々子どもたちに適した設計であったこと、雨天時に利用可能な体育館があることは、子どもと自然を相手にする仕事をする上で大きなメリットだった。加えて、食事を提供してくれる組織や、高齢者の方が体験活動に講師として携わってくれるという地域の協力体制が、当時はまだ珍しく注目された。スタッフには大台町出身で北海道の自然学校で1年間の実地研修を受けていた筆者、町の教育委員会からの出向者と町在住の移住者の方を非常勤として3名が採用された。

廃校年度		前回 平成14年度～平成25年度 (平成26年5月1日現在)		今回 平成14年度～平成27年度 (平成28年5月1日現在)	
廃校の数(A)	小学校	(校)	3,788	(校)	4,489
	中学校	5,801	1,089	6,811	1,307
	高等学校等		924		1,015
施設が現存している廃校の数(B)		(校)	(%)	(校)	(%)
活用されているもの(a)		5,100	87.9	5,943	87.3
活用されていないもの(b)		3,587	70.3	4,198	70.6
活用されているもの(c)		1,513	29.7	1,745	29.4
活用されていないもの(d)		302	5.9	314	5.3
活用用途		1,081	21.2	1,260	21.2
取壊しを予定(e)		130	2.6	171	2.9
現存する施設なし(C)		701	12.1	868	12.7

出典：文部科学省大臣官房文教施設企画部施設助成課作成

図3 廃校の活用状況

1999年当時、学校の統廃合はまだ珍しく、地域住民にとって廃校に対するマイナスイメージは非常に大きいものであり、住民と行政が共にその校舎跡活用について検討を重ねた。その結果、当時三重県で始まった地域全体が博物館であるという取り組み「フィールド・ミュージアム」に着想を得て、地域の豊かな自然資源を環境教育プログラムや自然体験として提供する「自然学校」を柱に、廃校

活用することとなった。

さらに、施設の大きさや立地を生かして、独居老人や老人夫婦のみの世帯が多数派となった大杉谷地区で介護予防を行う「元気老人デイサービス」、隣接の老朽化した公民館の代替機能、及び避難所と防災拠点としての設備もこの廃校舎に配置することとなり、旧大杉小学校は大杉谷地域総合センターとして再出発した。

■自然学校を稼げる組織へ

施設改修、スタッフ、協力体制が整い、課題となったのが運営である。行政直営の公的機関にすると、環境教育や自然体験の内容に自由度が少なくなることや運営費が町の負担になることから民間のNPOで運営することになった。民間であれば体験活動を有料で提供でき、NPOでは寄付金を募るなど、収益源を複数持つことが可能である。こうして、大杉谷自然学校は町から5年間の期限付き補助金で援助してもらい、将来的には経済的に自立を目指すという方向で活動を開始した。

子ども向け自然体験、キャンプや学校の総合学習をはじめ、大人向けの登山やエコツアー、大杉谷の田舎暮らし講座、企業の社会貢献事業等、様々な体験活動の企画から運営、環境教育に携わる人材育成や研修会、講演会、宮川の魚類調査や伝統漁法等の記録や保存、移住促進事業、インバウンド誘致、環境省のビジターセンターの管理運営など多様な業務を展開してきた。



図6 夏の体験活動

最初は大杉谷地区中心の活動だったが、ニーズに応じて大台町全域、町外や県外へと活動場所を広げた。大杉谷地域に十分な収益を得られる仕事を呼び込めればよかったのが難しかった。よって事務所機能は大杉谷にあるが、いわゆる“出稼ぎ”的な状態で一部の収入を得ている。このような柔軟性を取ることができるのは民間の利点でもある。

設立当初の2001年度は補助金1,377万円、専従職員1名だったが、2009年度は補助金650万円専従職員5名、2017年度は補助金540万円、専従職員6名となった。2017年度の事業への年間参加者数は約4000人、事業収益は2,820万円、これに会費、寄付金、助成金、さらに町からの補助金540万円を合わせると収益



図7 宮川小学校森林体験学習間伐材搬出

の合計は3,540万円である。結局18年経った今も経済的自立は果たせていないが、活動の内容や存在意義は評価されるようになってきた。だが、町の財政も困窮を極め、2018年度は補助金480万円、2019年度は200万円と大幅に削減されていく見通しである。今後は補助金削減分をどう補っていくのか、どのように運営していくかが課題である。

■稼ぐことを度外視して

職員を削減し、事業を本当に経済的利益のあるものだけに絞れば、あるいは自立できていたのかもしれない。また、仕事としてかわらず、ボランティアとして運営するという道もあっただろう。だが、それらの選択肢はとらず、現在、職員7名、非常勤8名で運営している。職員は隣の地区出身者である私以外は、関東や関西の都市部からの移住者で構成されている（環境省のビジターセンター勤務者を除く）。大杉谷地区にはそのうち4名が住んでおり、空き家だった住居に暮らす者もいる。神事の手伝いもすれば、地区の作業にも積極的に参加し、生活用水である山水の管理なども担う。地元の林業家に嫁いで子どもが2人いる職員もあり、大杉谷地区の若者人口を少し増加させることにも貢献した。



図8 大杉谷自然学校のスタッフ

これらは、自然学校を仕事として確立したからこそ、地域に定住できた結果であると思っている。しかし、収益性が高い仕事だけに注力すると、社会や地域にとって必要な仕事を続けにくくなる。例えば、ここ5年ほど力を入れるのが宮川の伝統漁法の継承である。

伝統漁法というのは非常に地域性があり、宮川を知り尽くし編み出された文化である。引き継ぐ子どもや若者がいなければ、途絶えてしまう。そこで、漁協と協力し子ども伝統漁法大会の開催や小学校の総合学習への導入を働きかけるなどし、地元の子どもたちへの継承活動を行っている。同時に、地元の方への聞きとり調査や動画記録、漁の道具の保存や展示など、多くの方々に伝統漁法の素晴らしさや現状などを伝える活動もしている。



図9 伝統漁法しゃくり体験

このように社会、地域や私たちが必要だと思ったら事業にしてきた。しかし、これらの活動は時間や手間はかかるが、参加費は求めにくく、資金調達の面では課題になる。

■大杉谷自然学校の効果

大杉谷自然学校が地域から発信してきたことはいくつかあるが、そのうち重要なものを2点紹介したい。一つ目は自然と乖離した現代社会において、自然と触れ合い学ぶ機会の提供である。人工物に囲まれた都会で生まれ育った子供の中には、炎を見たことがない、土の道を歩いたことがない子らが出現している。私たちは10年前から「森のようちえん」に取り組んでいるが、小さい子どもたちが喜んで繰り返すことがある。火を扱う、水に入る、生き物や食べ物を探す、ものを作る、探検する、そして挑戦する。



図10 森のようちえん

人間が生きるために必要だった活動を、子どもは遊びを通して真剣に練習している。どれだけ文明が発展しようとも、人間の本質や本能は容易に変化しないのだと思う。だが今、都市にどれだけ生きる練習をする場所があるだろうか？ その点、田舎の人は幼少期から火を扱い、川に潜り、山や川で食料を捕り、刃物を使って創意工夫し、山を隅なく歩き回ってきた。人が暮らしてきた自然には、生きる練習ができる場所が豊富にある。

大杉谷地域で体験できる様々なことは、感覚や経験知となり、特に現代に生きる子どもにも大人にも人間らしく生きる力の獲得を助けるだろう。



図11 地域の祭事 1

二つ目は日本の地域社会を知る機会を提供することである。ネイティブアメリカンやアジアの少数民族に会いに行くより、日本の地域社会の高齢者の方に、今、会いに行くべきである。

地域社会には、高度成長期以前まで日本のどこでも営まれていた自然に支えられた暮らしの影響が色濃く残っている。日本の厳しい自然を生き抜き、食糧を得て暮らすには、家族、親戚や地域が丸丸となって力を合わせていく必要があった。地域に生まれた子たちは生まれた時から様々な通過儀礼を経て、地域の団結力や帰属意識、責任を学び、地域で役立つ立派な人材となった。



図12 地域の祭事 2

他にも地域に残る様々な事象が必然的に定着した意味を読み解くことができる。例えば、祭事は人を育成し地域に帰属させる仕組みだし、信仰は飢えとの葛藤や恵みへの感謝から、林業や漁業における多くの禁忌は自然の脅威や命の危険を回避するための戒めである等。現代の視点からは不可解であっても、地域の視点に立つと自分なりに腑に落ちる解釈が可能になる。自然の摂理からなる地域の人の生き方や考え方が、まるで世界の真理についているようで、時に宗教性すら帯びて感じられる。今の地域の人々は大なり小なりそういったものを受け継いでいる。

自然という畏敬と脅威の中で何世代にも渡って暮らすことにより完成された、複雑な集合体が地域社会なのである。それはネットで繋がり、単純化、単一化していく社会や世代とは対極に位置する。複雑を知っての単純と単純しか知らぬ単純は大きく異なる。

地域を伝えることができる仕掛けこそ、過疎地域に残された廃校を活用した自然学校的存在なのである。私たちは体験活動を企画し、参加者やボランティアを募り、学ぶ場を作ることができる。小学校や中学校の体験学習や大学や専門学校の研修生も受け入れる。研究をし、研究者への資料提供もする。私たち職員自身も地域の人も学ぶ。このような地域の学習や再評価の場を多くの人に提供できていることこそ、大杉谷自然学校の最大の効果なのかもしれない。

■過疎高齢化により廃校になって20年後

現在、大杉谷地区の高齢化率は71%である。10年前は66%であったので、高齢化は抑制されていない。廃校後20年も経ち、大杉谷せせ

らぎ会の方々は60代から70-80代になり、活動できる会員は20名以上おられたが、現在は5名程度に減ってしまった。今後は、繁忙期に重労働となる食事作りは難しくなるだろう。体験時に利用していた地域の方と交流できる民泊は当初10軒程開業されたが、2軒だけとなった。そして、色々なことを教えて、助けていただいた地域講師の方々は50名ほどおられたが、現在は15名程度である。この方々の人数が増加することは、今後ない。廃校直後の地域には、新しい活動を支えてくれる地域の人がまだ多く残っているはずである。しかし、20年を経ると残念ながら地域の終わりが見えてくる。また、最近では地域に住みながら地域の人ではない人も増えた。

「地域社会」と私たちが呼んだものが、大杉谷ではあと数年で終わる。居住する人がいなくなるにはまだ長い年月を要するであろうが、「地域社会」は10年もせずに消滅する。自然や地域とのつながりが必然だった人がいなくなるからである。それは寂しいことであるが、恐らく同じ境遇を抱える廃校でも、いたしかたなくやってくる未来である。

■時代が自然学校を呼ぶ

インターネットの普及により社会は大きく変わろうとしている。溢れる情報、電子マネー、汗を流さずできるきれいな仕事、自分以外の誰かがやってくれるサービスの増加、バーチャルリアリティーでの体験など、実体のないものが次々に開発されている。確かなものしかなかった時代から、不確かなものが存在する社会へと突入した。地域社会が欲しかった物質的なものが何でもお金で手に入るようになって、皮肉なことにその裏に存在した大切なものが見えてくる構造が生まれた。

NPO法人大杉谷自然学校の今の役割は、地域社会に残る必然を、地域の終焉という現象を通して社会に提示し、そこから新しい社会像を見ることにあるのではないかと考えている。今こそ地域社会を経済だけで評価せず、新たな視点で再評価すべきであると思うし、どの地域にも一つ自然学校があったらいいのと思う。

(おおにし かおり)

小学校を核に 地域で輝く 拠点づくり

縮減時代の地域再生を 先取りした大杉谷自然学校

三重大学大学院工学研究科建築学専攻
准教授

浅野 聡

1964年 東京都生まれ
1987年 早稲田大学理工学部建築学科卒業
1989年 早稲田大学大学院工学研究科
博士前期課程修了
1992年 早稲田大学大学院理工学研究科
博士後期課程単位取得満期退学
1991年 早稲田大学理工学部建築学科助手
1994年 三重大学工学部建築学科講師
1998年 三重大学工学部建築学科助教授
2007年 三重大学大学院工学研究科准教授
現在に至る

■縮減時代の地域再生

本特集で取り上げている「NPO法人大杉谷自然学校」は、現在、私たちが直面している縮減時代に必要とされているこれからの地域再生の考え方を、約20年前に先取りして実践している優れた事例である。ここでは、筆者の専門の地域再生やまちづくりの視点から、大杉谷自然学校について振り返ってみたい。

人口減少や高齢化といった本格的な縮減時代に入り、地方都市の衰退が深刻化する中で、全国各地でローカルな資源を活かした地域再生への取り組みが盛んになりつつある。

国土交通省は、これからの地方都市の将来像として「コンパクト・プラス・ネットワーク」を掲げている。「コンパクト・プラス・ネットワーク」とは、地域に必要な住居・医療・福祉・商業等の生活機能を将来においても維持するために、過度な財政負担とならないように出来るだけ分散させずに中心拠点地域に集積して立地させるとともに、中心拠点地域と周辺の居住地域を公共交通と情報通信でネットワークさせることによって、地域全体を支えていくという考えである。この考え方をとりいれて総合的に取り組んでいる地域は未だ多くないが、近未来的なデザインのライトレールを整備した富山市のコンパクトシティ政策は、国内でトップレベルにあり、大変に注目されている。

■未来の国土の小さな拠点づくり

「コンパクト・プラス・ネットワーク」の考え方を踏まえて、国土交通省は、2050年の日本を見据えた最新の国土づくりの理念や考

え方をとりまとめて、2014年に「国土のグランドデザイン2050」を発表している。

この中では、基本戦略の1つとして「小さな拠点」づくりの必要性が掲げられている。これは、2050年の人口動態の予測結果について全国を1キロ²毎の地点で見ると、人口が半分以下になる地点が現在の居住地域の6割以上を占めるものの、旧役場庁舎や小学校の周辺の集落では、現在でも日常の生活機能が存在していることから、これらを拠点にして日常生活を支える買い物や医療等の生活機能をコンパクトに集積することによって、集落を維持出来る可能性があることを指摘しているものである。逆のいい方をすると、旧役場庁舎や小学校から遠い集落を維持することは、厳しいことを物語っている。

現在、小さな拠点づくりは、各地で行われている。地方小都市における先進事例としては、人口約3万人の岩手県紫波町において、マルシェ（産直販売所）、診療所、飲食店、役場、図書館、スポーツ施設、子育て応援センター等をコンパクトに集積した拠点施設を実現したオガール・プロジェクトが注目されている。また東日本大震災の被災地では、人口約7千人の宮城県女川町において、鉄道駅舎、公共公益施設、商業施設、小中学校、住宅等を中心市街地にコンパクトに集約して整備しており、今後の復興に向けて新たなまちづくりへの挑戦が始まっている。

■きらりと輝く小さな拠点づくり ー先進的な大杉谷自然学校ー

前述の通り、国によるコンパクトシティ政

策が本格的に取り組みられる前から、廃校となった小学校を活用してきらりと輝く小さな拠点づくりを実現してきた三重県における好例が、大杉谷自然学校である。

大杉谷自然学校の詳細については、大西かおり氏と中井孝幸先生の原稿に委ねるが、地域再生やまちづくりの視点からみた同学校の先進性について私見を述べ

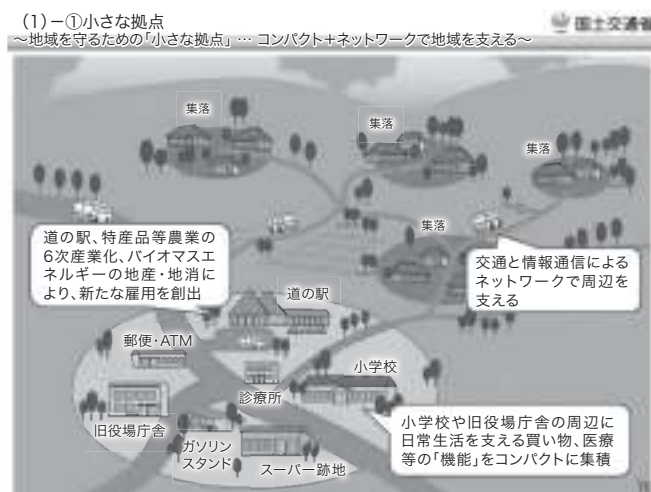


図1 小さな拠点のイメージ（「国土のグランドデザイン2050」（国土交通省）より）

ると、①リーダー、②コンセプト、③活動場所、④協力体制、等がキーワードとしてあげられる。

第一にリーダーであるが、地域再生やまちづくりを実現するためには、優れたリーダーは必ず必要である。大杉谷自然学校のリーダーは、地元出身で地域再生の最前線で活躍した校長の大西かおり氏である。彼女の関わりを抜きにして、この自然学校を語ることは出来ない。卓越した企画力、創作力、行動力、リーダーシップ、優しい眼差しが備わっていないければ、自然学校を長期間にわたってマネジメントすることは不可能である。

第二にコンセプトであるが、大杉谷地区の風土条件をよく理解し、地域の自然を活かした環境教育プログラムや自然体験を提供する「自然学校」というコンセプトを構築したことである。大杉谷地区をはじめ旧宮川村のエリアは、吉野熊野国立公園と奥伊勢宮川峡県立自然公園に指定されており、まさに地域全体が自然公園法にもとづく「自然公園」なのである。国立公園を持っていないためにその指定を環境省に希望する都道府県も多い中で、自然公園に指定されている素晴らしい自然公園としての価値を活かす自然学校のコンセプトは、この地の風土条件にかなっている。



写真1 大杉谷自然学校の周辺の美しい森林
(大西かおり氏提供)

地域再生の際に歴史資源や自然資源が重視されるのは、わざわざそこに行かないと体験できないホンモノがあるからである。こればかりは、インターネットから得る情報では代用できない感動を生むこともできない。

第三に活動場所であるが、廃校となった小学校を再利用して活動場所に行っていることである。もし活動場所が空家となった民家や倉庫等を再利用して自然学校として開校したら、

その場所を訪れた参加者は、どのような印象を持ったであろうか。民家であれば予想していたよりも随分と小さいと思ったかもしれないし、倉庫であれば無機質な空間で人間味に欠けたと思ったかもしれない。やはり小学校として設計された建築を活用して自然学校を開校することができたことは、コンセプトと活動場所が一致しており、参加者にとってはきっとイメージしてきた通りの活動場所であり第一印象がよかったのではないだろうか。

思い起こすと成長する時代の都市計画においても、小学校は重要な施設として地域を中心に優先的に配置するように考えられてきた。近代都市計画の代表的理論であるC.A.ペリーの「近隣住区」では、小学校区の大きさを1つの住区（地域社会）を形成し、学校を住区を中心に配置することが未来都市の姿であることを提唱し、世界中に影響を与えていった。国内でもその影響下で設計された戦後のニュータウンでは、住区を中心に小学校が配置されている。いつの時代も小学校は、地域社会にとって大切な建築であり、故郷の原風景を構築する重要なランドマークといえる。

第四に協力体制であり、地域住民や自治体との協力体制が十分に構築された上で、マネジメントされてきたことである。大杉谷自然学校が入居している大杉谷地域総合センターは、デイサービス、公民館、災害時の避難所等としての機能を併せ持っているが、デイサービス利用者の食事を提供するために地元の主婦たちが立ち上げた「大杉谷せせらぎ会」のメンバーや地域の高齢者の方が、自然学校の自然体験活動に講師として協力している。自然体験活動に講師として参加された地域住民の方にとっても、きっと忘れることのできない愉快的な経験であったにちがいない。

■縮減時代に地域の記憶を継承する建築の役割と求められる条件

本特集のテーマは、「建築がつなぐ都市、地域、まちの記憶」であるが、地域社会の変容が大きい現在の縮減時代において、建築が地域の記憶を継承しながら地域再生に果たす役割は大変に大きい。

ただし、全ての建築が地域の記憶を継承できるわけではない。そのためには、継承でき

る条件を整えていることが必要となる。

本稿で取り上げた大西かおり氏による大杉谷自然学校の長期間にわたる活動は、廃校となった小学校に自然学校という風土条件にかなったコンセプトで新しい命を吹き込み、バラエティーに富む自然体験活動を通して、地域の記憶を継承することの大切さを私たちに示してくれている。

今一度、自然学校が開校した約20年前を思い出してみたい。当時は、バブル経済の中で、経済優先の開発事業が民間によって積極的に進められていた時期である。開発事業を推進していたのは民間だけではない。リゾート法が制定され、全国の自治体も積極的にスキー場等の開発に取り組み、三重県でも同法にもとづいて「国際リゾート：三重サンベルトゾーン構想」を策定し、国によって全国で第1号の認定を受けていた時期である。サンベルトゾーンの区域に入っていた伊勢志摩地域や東紀州地域では、リゾート開発が一部地域では進んだものの、バブル経済崩壊後は事業が頓挫したり、経営が困難になったものも多い。いずれも同時期に取り組みされた大杉谷自然学校とは対照的である。

大杉谷自然学校のHPに紹介されている自然体験プログラムを拝見すると、特に「森のようちえん」は、ネーミングも魅力的だが、参加した幼児がイキイキと活動して、新しい発見を通して大切なことを学習している様子が伝わってきて、改めてその素晴らしさに気づかされる。

前述の通り、「国土のグランドデザイン2050」の中では、人口減少が深刻化する農山漁村集落でも、旧役場庁舎や小学校等が存在する地区は、これらの建築を利用し続け、周辺に買い物や医療等の生活機能をコンパクトに集積することによって、集落を維持出来る可能性があること、すなわち地域の記憶を継承できる可能性があることを指摘している。

大杉谷地区も集落の存続が厳しい状況にあるとのことであるが、約20年間にわたって積み重ねてきた活動の経験から、私たちが学ぶことは多い。極限まで記憶の継承に挑戦する大杉谷自然学校の行く末についてこれからも注目し、多くのことを学んでいきたい。

(あさの さとし)

廃校活用の実態と その可能性

愛知県・岐阜県・三重県の
事例を通して

愛知工業大学工学部建築学科
准教授

野澤英希

1967年 東京都生まれ
1990年 愛知工業大学工学部建築学科卒業
1992年 愛知県立芸術大学大学院美術研究科
博士前期課程デザイン専攻修了
1992年 株式会社日建設計入社
2013年 名古屋大学大学院環境学研究科
博士後期課程都市環境学専攻修了
2014年 金城学院大学生活環境学部
環境デザイン学科非常勤講師
2018年 株式会社日建設計退社
2018年 愛知工業大学工学部建築学科准教授
現在に至る

社会的背景

我が国は長期の人口減少の過程に入り、少子・高齢化が更に進行すると予想されている。農山漁村地域では過疎化がより進み、都市地域では年少人口・生産年齢人口の郊外への流出から学校の統廃合や商業機能の空洞化が起こり、郊外では都市地域からの流入による無計画な都市化の肥大化に至っている。今後、更なる人口の減少、少子・高齢化の進行から建築ストックの余剰が増加し、農山漁村地域・都市地域ともに人口構成の変化から学校を含む公共建築ストックの再整理が喫緊の課題になると考えられる。

児童・生徒数と学校施設の状況

小・中・高等学校の児童・生徒数は、今後も減少傾向が続くことから、廃校数の増加も現状の高いレベルのまま推移すると予想される。学校施設は児童・生徒数の増加に伴いこれまで一斉に整備されてきたため、老朽化の進行が近年加速しており、効果的な整備・改修の手法の検討が必要となっている。

学校施設は、十分な隣棟間隔を確保した南向きの校舎配置と均質な教室の並んだ標準化されたゆとりある施設計画となっており、地域に特別な愛着を持たれている場合が多く、地域に根差した重要な施設と言うことができる。

建築ストックの再利用

低炭素化を目指す社会情勢により、スクラップ&ビルド主体から改修再利用・転用への転換をはかることが重要である。その割合は、欧米各国と比較し、未だ低いものの、ストック重視に向けて法的な整備も徐々に進みつつあり、また社会に認知され始めている。

特に学校は、公共建築物の約4割を占めていることから、積極的に再利用すべき施設であると言える。しかし、ある一定数は有効な再利用がなされているものの再利用されていない事例も散見され、未だ

多くの課題が残されている。

廃校の再利用

廃校の再利用に関する知見の蓄積は進みつつあるが、本稿では地域の特徴を表す「地域属性」、施設の特徴を表す「建築諸元」に着目し、これらと学校の種類別、再利用・未利用・取り壊し別、再利用の用途別の視点から再利用の傾向を探り、「改修工事内容」も併せた再利用の実態及び、再利用の際に配慮すべき点について論じることとする。

廃校の発生状況

東海三県の自治体へのアンケート調査などから廃校を把握し、分析を行った。

調査対象の廃校は、1989年（平成元年）～2009年（平成20年）の間に廃校となった公立小学校・中学校・高等学校の合計161校で、それらの位置をGIS（地理情報）にて人口密度との関係も併せて図1に示す。

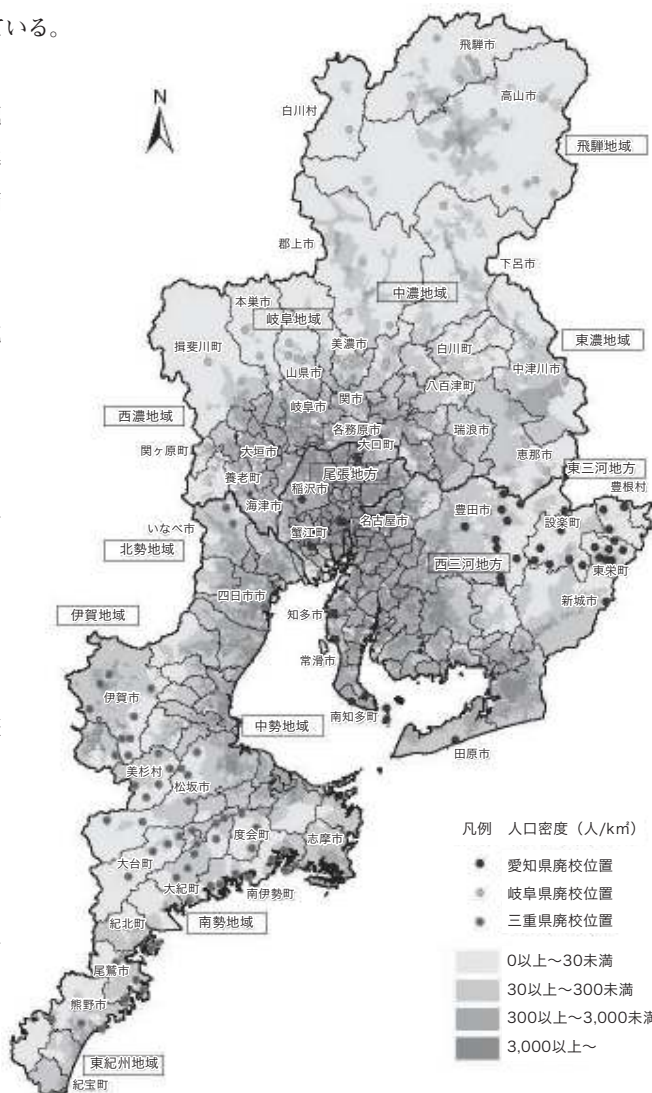


図1 廃校の位置と人口密度

児童・生徒数・廃校数の推移

児童・生徒数は20年間で約30%減少しており、学校種類別の内訳は小学校児童数－18%、中学校生徒数－33%、高等学校生徒数－39%で、高等学校の減少率が最も高い。

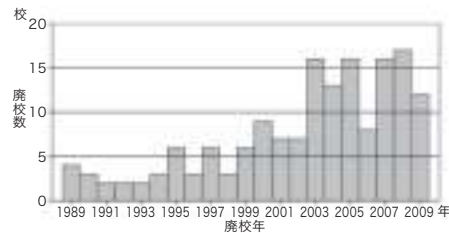


図2 廃校数の変化

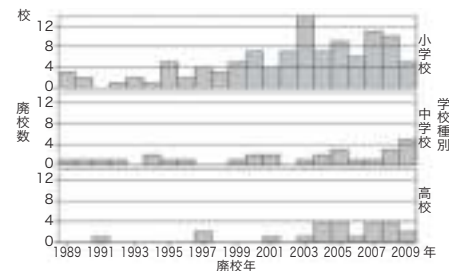


図3 学校種類別の廃校数の変化

廃校数の推移は、1994年頃までは2校～4校程度であったものが、1995年から2002年頃には3校～9校程度に増加し、更に2003年以降は2006年を除き12～17校と急増している。

特に2003、2005、2007、2008年には廃校が16～17校と、2003年以降に多く発生していることがわかる（図2、図3）。徐々に進行してきた少子化の影響が、この頃から顕著に表れ始めたと考えられる。

廃校の立地、学校減少率、地域再生計画

図1に示した廃校の立地の分布から、廃校は特に人口密度の低い、少子・高齢化の進んだ山間部及び沿岸部の農山漁村地域に多く、また都市地域においても発生していることがわかる。廃校による学校の減少率は、特に農山漁村地域で高く、地域衰退への影響が大きい。

廃校活用による地域再生計画の整備率は都市・農山漁村地域ともに低く、「再利用検討委員会」などの設置は廃校の発生後となるケースが多く、活用への対応が後手にまわっているのが現状である。廃校は再利用までに長い時間を要する場合も多いことから、円滑かつ有効な再利用を行うためには、廃校が発生する以前から地域再生計画などで廃校活用の方針等を整備しておくことが重要である。

■ 地域属性の特徴と廃校の再利用

廃校の立地・周辺環境の特徴を示す地域属

性に着目し、地域属性と廃校の発生状況、廃校の再利用・未利用・取り壊し別の状況、及び再利用の用途との関係について考察を行う。

廃校の発生と地域属性の関係

20年間に発生した廃校数と、人口密度、人口増加率、年少人口割合、老年人口割合、財政力指数、森林面積割合、及び第一次産業割合との相関を分析したところ、廃校は年少人口割合が低く、老年人口割合の高い少子化・高齢化の進んだ、森林面積割合の高い農山漁村地域に多く発生していることがわかった。

再利用・未利用・取り壊し別の状況

廃校の再利用・未利用・取り壊し別の状況は、再利用69%、未利用20%、取り壊し11%で、高い割合で再利用されており、廃校は転用性の高い施設であると言える。

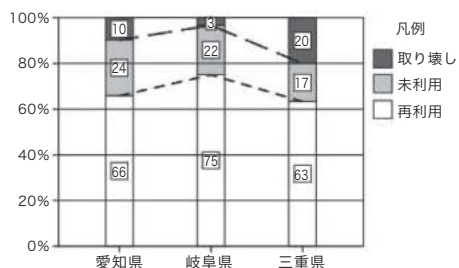


図4 県別の廃校の利用状況

県別に見ると（図4）、再利用・未利用・取り壊し別の割合に差異が見られることがわかる。このことは、農山漁村地域は過疎化の進行に対する懸念から、より積極的に再利用の意向が働く傾向になり易いこと、「未利用の廃校」は過疎化の進行が緩やかな廃校による地域への影響の比較的小さい都市部近郊に多い傾向にあることなどが影響していると考えられる。

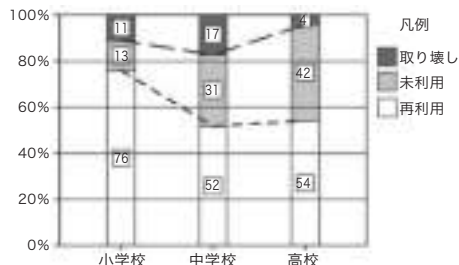


図5 学校種類別の廃校の利用状況

学校種類別では（図5）、中学校・高等学校と比較し、小学校の再利用の割合は76%と高く、積極的に再利用されていることがわかる。このことは、小学校は地域に強く根差したコミュニティの中心的な施設であり、それが無くなったことで、更なる過疎化への懸念と施設規模が比較的小規模で再利用を行い易いこと

が、その要因として考えられる。また、高校の取り壊しは最も少ないが、小学校・中学校は木造の割合が約40%で、高校の木造の割合が0%に留まっていることから、構造種別が取り壊しの主要因のひとつであると考えられる。

廃校の再利用の用途

廃校の再利用用途の事例数の割合は、社会体育施設21%、社会教育施設19%、他の学校19%、宿泊・住居施設12%、医療・福祉施設7%、倉庫7%、事務・研修施設6%、その他の施設6%、文化施設3%で、さまざまな用途に再利用されており、廃校は多くの用途への高い転用の可能性を持った施設であると言える。

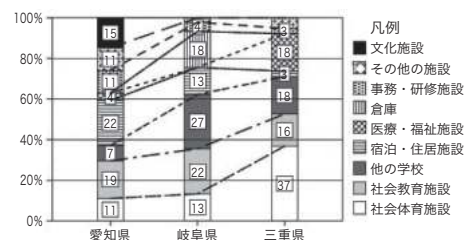


図6 県別の再利用の用途

県別にみると（図6）、愛知県と比較し、岐阜県と三重県は「社会体育施設」と「社会教育施設」の合計の割合が35～53%と高い。このことは、岐阜県と三重県は、愛知県と比較し、少子・高齢化の進んだ地域が広範囲に及んでおり、更なる過疎化の抑制のため改修を行わなくてもすぐに再利用が行えるこれらの用途への転用が多くなっているものと考えられる。

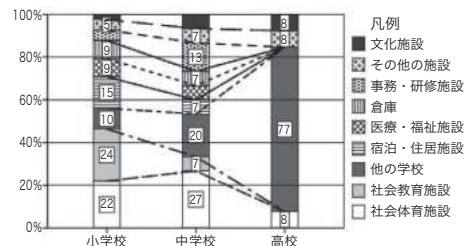


図7 学校種類別の再利用の用途

学校種類別では（図7）、小学校は「社会体育施設」と「社会教育施設」のみで46%を占めていることがわかる。このことは、中学校・高等学校と比較し、規模が小規模で学区が小さいこと、元々学校と言った地域のコミュニティの中心的な施設であったことなどが、これらの用途への転用が多い主要因と考えられる。

高等学校は、「他の学校」の再利用のみで77%を占めており、用途は県立特別支援学校への再利用事例が多い。このことは施設規模

が大きいこと、所管が県のままで再利用が可能などことが主な要因と考えられる。

廃校の位置と地域属性との関係

GISを用いて廃校の位置を老年人口割合と重ねて示すと（図8）、これまでに論じたように再利用は、農山漁村地域に多いこと、未利用は年少人口割合がやや高く、老年人口割合のやや低い都市地域近郊に多く位置していることがわかる。同様に、廃校位置を森林面積割合と重ねて示すと（図9）、社会体育施設と社会教育施設の位置は、少子化の進んだ森林面積割合の高い農山漁村地域に多いことがわかる。

このことから、地域属性は再利用・未利用に少なからず影響を与えていると言える。再利用事例は、その立地・周辺環境の特徴と再利用の用途に必要な条件が一致している場合が多く、再利用の可否や再利用の用途決定の要因のひとつと考えられる。

有効な廃校の再利用を行うためには、地域属性の特徴を十分に把握し、それらを活かすことのできる用途とすることが重要であると言える。

■ 建築諸元の特徴と廃校の改修工事

廃校の施設の特徴を示す建築諸元に着目し、学校の種類別、再利用・未利用・取り壊し別、

再利用の用途別に建築諸元との関係について考察し、再利用時の改修工事内容についてもふれたいと思う。

建築諸元の特徴

敷地面積の平均は小学校9,045㎡、中学校15,673㎡、高等学校37,998㎡で、延床面積の平均は、小学校1,869㎡、中学校3,120㎡、高等学校は9,435㎡であった（図10）。

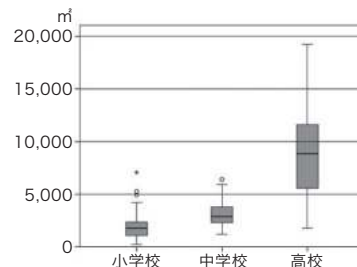


図10 学校の種類別の延床面積

階数の平均は、小学校2.2階、中学校2.3階、高等学校3.7階で、高等学校は延床面積で小学校の約5倍、中学校の約3倍、また階数では、小・中学校の約1.6倍と、最も規模が大きい（図11）。

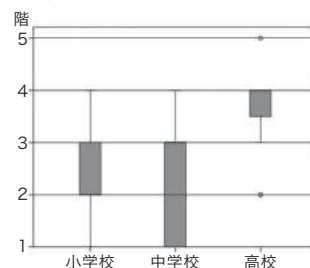


図11 学校の種類別の階数

同様に建設年の平均は、小学校1967年、中学校1963年、高等学校1975年で、高等学校は、小・中学校と比較してやや新しい傾向であると言える。構造種別の割合は、小・中学校はRC造が約60%に留まっているものの高等学校は全てRC造である。

利用状況別の建築諸元の特徴

延床面積の平均は、再利用3,143㎡、未利用3,656㎡、取り壊し1,990㎡であった。階数の平均は、再利用2.5階、未利用2.7階、取り壊し1.4階と、未利用が最も建物の規模が大きく、取り壊しが最も規模が小さい。未利用は規模の大きな高等学校の割合が30%と高いことなど、建築諸元の特徴が再利用・未利用・取り壊し別の利用状況の違いに影響を及ぼしていると考えられる（図12）。

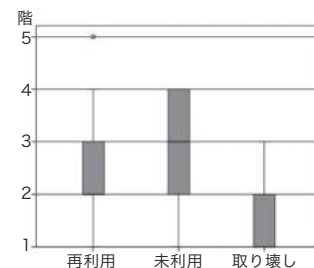


図12 利用状況別の階数

また、再利用と未利用の割合はRC造が約70%を占めているものの、取り壊しはRC造の割合が低く、木造の割合が88%と高くなっている（図13）。

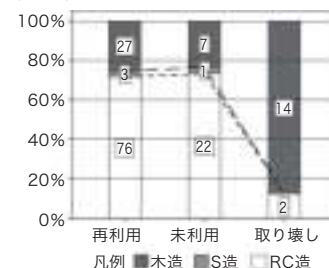


図13 利用状況別の構造

再利用の用途別の建築諸元の特徴

敷地面積の平均で最も規模の大きな用途は、他の学校の22,497㎡で、最も規模の小さな用途は、宿泊・住居施設の7,030㎡であった。延床面積も同様に、他の学校が6,923㎡と最も規模が大きく、宿泊・住居施設が1,446㎡と最も規模の小さな用途であった。他の学校について見ると、高等学校の割合が高く、階数が高く規模の大きい傾向にあり、再利用の用途別に建築諸元の特徴の違いが見られることがわかる。

再利用施設の改修工事

再利用時の改修工事の有無を見ると「改修工事有り」は54%と約半数を占めている。再

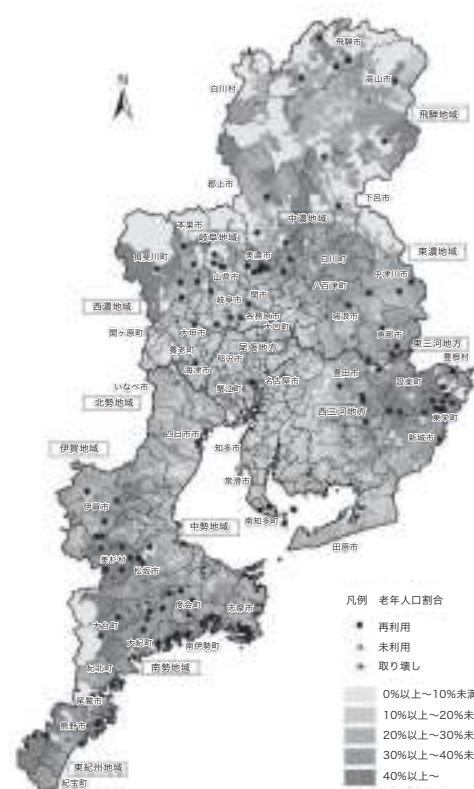


図8 老年人口割合と廃校の利用状況



図9 森林面積割合と廃校の利用状況

利用の用途別に見ると、「改修工事有り」の割合は降順に、医療・福祉施設と文化施設100%、他の学校89%、その他の施設83%、宿泊・住居施設69%となっており、これらの用途は学校の機能から大幅に変更した再利用用途の割合が高くなっている。

一方、「改修工事無し」の割合は、降順に社会体育施設91%、倉庫88%、社会教育施設41%となっており、これらの用途は改修工事を行わなくても容易に再利用が可能な用途とすることができる（図14）。

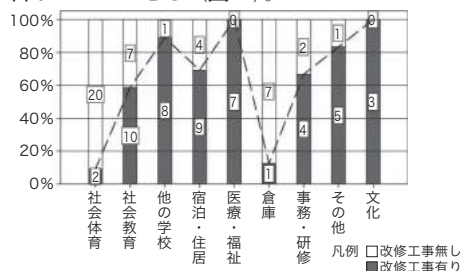


図14 用途別の改修工事の有無

延べ床面積の増減

再利用時の延床面積増減は増加10%、増減無し66%、減少24%と、「増減無し」の割合が最も高かった。用途別で「増加」の割合が最も高い用途は、厨房や浴室などの水廻りの設置が必要な宿泊・住居施設の39%で、「減少」の割合が最も高い用途は、校舎を撤去し体育館のみとなった社会体育施設の58%である。このように、再利用の用途別に延床面積の増減に特徴が見られる（図15）。

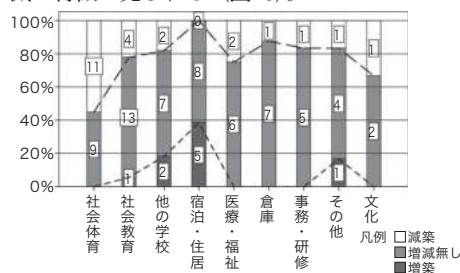


図15 用途別の延床面積の増減

改修工事の特徴

改修工事を外部改修工事、内部改修工事、設備改修工事に分類しその特徴を下記に示す。

外部改修工事は外壁、外部建具、屋根、外構に分類でき、工事を行った割合は、外壁は24%で老朽化による外装材の取替、再塗装などが多かった。外部建具では老朽化した木製・スチールサッシュをアルミへと更新した事例が多く、屋根は老朽化による漏水の補修工事など、また外構ではパーベキュー場などの小規模建屋の増築などである。

内部改修工事は内部床、内部壁、天井、内部建具、バリアフリーに分類でき、工事を行った割合は内部床が59%と最も高い。用途変更や老朽化に伴う更新事例が多く、タイルカーペット、ビニル床シート、フローリング、畳など様々な仕上材料が用いられている。

設備改修工事は更に電気・空調・衛生設備に分類し工事を行った割合は、電気設備工事が59%と最も高く、新設した室の照明、空調機用電源の設置などが多く見られた。空調設備工事は40%、衛生設備工事では53%と、厨房、浴室、洗面など水廻りの新設に伴う工事が多い。設備改修工事で工事を行った割合は、内部改修工事と同程度であり、このことから設備工事を含め、建物内部の改修工事が優先されて行われていると言える。

■ 廃校の再利用の実態と可能性

廃校施設管理人などに対するヒアリングから得られた意見や利用実態も含め、廃校の再利用に向けて配慮すべき特徴・課題を示す。

地域属性の特徴の視点から

- ・新築では無く廃校の再利用とした主な理由は、廃校の立地・敷地の周辺環境と学校建築である建物の特徴を活かすことができること、イニシャルコストの削減が可能なこと、学校特有の愛着があり地域のこころのよりどころにできること、学校と大きく異なる用途とすることで話題性や意外性を持つことができることなどである。
- ・複数の再利用用途とすることで施設の集約化・運営の効率化、及び利便性の向上などの効果が期待でき、広大なグラウンドは新たな用途の敷地としての高い可能性を持つ。
- ・再利用用途の核となる改修工事を積極的に行い、利用者の視点に立ち、継続して施設機能の向上化と安定した運営ができる利用者数の確保をはかることが重要である。

建築諸元の特徴・改修工事の視点から

- ・水廻りの機能の新設が必要な再利用用途は、大規模な改修工事が多く、その部位は再利用用途に必要な建物の内部・設備改修工事が建物外部に優先して行われている。
- ・廃校は敷地にゆとりがあり校舎の隣棟間隔や共用部が広く、教室の天井が高いなどの学校建築の特徴から、用途変更に伴う改修

工事の物理的な制約が生じにくい。

- ・継続的に施設及び運用の改善を行うべきであるが、財政・人材の不足解消が急務である。

廃校の再利用のメリットまとめ

廃校の再利用は、敷地の周辺環境とゆとりある学校建築の特徴を有効に活用できる、イニシャルコストの削減が可能、施設への愛着と話題性・意外性があるなどの長所が多く、増築や建物外部・内部・設備改修を含めた用途変更に伴う大規模な改修工事の物理的な制約も生じにくいことから、再利用に適したファシリティーと言える。更に複数の再利用の用途化、グラウンドの有効活用、利用者の視点に立った施設機能の向上と利用者数の確保なども配慮すべき点であろう。

■ 今後の課題まとめ

廃校の再利用に向けての課題は以下のよう項目をあげることができる。

- ・農山漁村地域において過疎化の進行に対する懸念から積極的な再利用への意向が働くものの、必ずしも地域の要望や地域属性の特徴を活かしきれていない事例が見受けられる。
- ・改修の不要な社会教育施設などへの安易な再利用が多く、上述の視点から再利用用途の見直しを積極的に行うことが必要である。
- ・階数が高く建設年の新しいRC造の割合の高い高校など優良な建築諸元の未利用事例が多く残されており、その活用が急務である。
- ・農山漁村地域の廃校において、立地条件の悪さ、市町村の財政状況の悪化と人材の不足、利用者数の見込みの弱さなどの課題から再利用に至らない事例が多いが有効活用が難しい。

廃校の再利用は、より多くのアイデアやソフットの工夫が重要であり、それらを幅広く発信し、有効に実行・運営できる仕組みをつくることがより重要と考える。（のざわ ひでき）

参考文献

- 1) 野澤英希, 谷口元, 恒川和久, 太幡英亮「廃校のある地域属性の特徴と再利用の関する研究—愛知県・岐阜県・三重県の事例を通して—」日本建築学会計画系論文第674号 pp.865-872, 2012. 4
- 2) 野澤英希, 谷口元, 恒川和久, 太幡英亮「廃校施設の建築の特徴と再利用時の改修工事に関する研究—愛知県・岐阜県・三重県の事例を通して—」日本建築学会計画系論文第684号 pp.445-453, 2013. 2
- 3) 野澤英希「経年による廃校の利用状況及び用途の変化に関する考察」日本建築学会大会学術梗概集(中国) E-1分冊pp.259-260, 2017. 9

小学校から 自然学校へ

地域の記憶を未来へ刻む

愛知工業大学工学部建築学科
教授

中井孝幸

1967年 大阪府生まれ
1991年 三重大学工学部建築学科卒業
1993年 三重大学大学院工学研究科修士課程
修了
1993年 三重大学工学部建築学科助手
2001年 安井建築設計事務所名古屋支社
2005年 INA新建築研究所名古屋支社
2006年 愛知工業大学工学部都市環境学科
講師
2008年 愛知工業大学工学部都市環境学科
准教授
2009年 愛知工業大学工学部建築学科准教授
2016年 愛知工業大学工学部建築学科教授
現在に至る

■三重県大台町大杉谷へ

いつも雨が多い…。施設見学や施設調査と
いった「視察」の日は、大半が雨である。し
かし、今回の取材は私の「雨男」だけではな
いような気がしている。大台ヶ原に近い「大
杉谷」は、全国でもトップクラスの降水量を
誇るといっても過言ではないだろう。

「バケツをひっくり返したような雨」は、
三重県東紀州地方に多い特徴的な雨の降り方
であるが、取材で同った日はそこまでひどい
雨ではなかった。しかし、大杉谷へ向かう途
中に見た山あいから立ち込める霧は、幽玄な
世界をつくり出していた (図1)。



図1 大杉谷の溪谷と宮川 (2018年11月)

■転用の経緯について

三重県の南部に位置し、現在の大台町に
含まれる旧宮川村には、4つの小学校があっ
たが、児童数の減少により宮川小学校への統
廃合が決定した。当時の宮川村は過疎地域で
あったため、ハードにしか使えない過疎債に
より、小学校の建設が行われていた。



図2 大杉谷自然学校へのアクセス (PRパンフより)

三重県の東紀州地方にあたる大台町の位置
と大杉谷自然学校の位置を図2に示す。

木造校舎で建設された校舎は、その多くが
取り壊されているが、旧大杉小学校は平成元
年にRC造で建設され、現在も自然学校や地域
総合センター (デイサービスなど) として利
用されている (図3)。

詳しい経緯は、大西さんのレポートにお任
せするとして、取材した内容を以下に整理し
ていきたい。

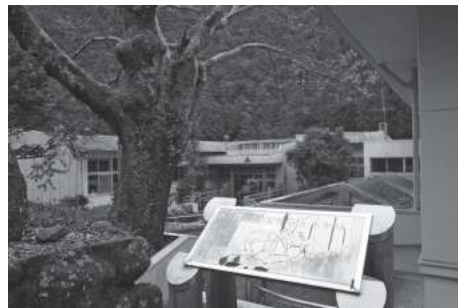


図3 大杉谷自然学校 (旧大杉小学校、2018年11月)

■図書室が応接室に

昇降口だった場所が、そのまま玄関として
利用されている (図4)。まず、最初に案内さ
れたのが、応接室としても利用されている旧
図書室である (図5)。エントランスに近く、
現在のNPO事務室にも隣接しており、取材の
ほとんどが、この部屋で行われた。また、こ
の図書室は、現在も自然学校で学校に宿泊し
ている子どもたちが利用する事もでき、よく
利用されているとのことであった。



図4 大杉谷自然学校の玄関 (2018年11月)



図5 大杉谷自然学校の図書室 (2018年11月)

NPO校長の大西さんとは、三重大学の浅野聡先生にご紹介して頂いたので、初対面ではあったが、私自身が公共図書館や学校図書館を研究している事もあり、自己紹介も兼ねて子どもたちの学校図書館利用と読書活動の継続などのお話をした。また、大西さんとは学部は違うが同じ大学を卒業していたことなどが発覚し、子どもたちの教育について熱く語られていたのが、大変印象に残った。

■学校がなくなるということ

お話を聞きしていた時に、何度か出てきたが、学校がなくなるという事が、相当に地域の住民にとってショックな事であったとのことである。そもそも過疎地であり、将来的に少子高齢化が進むことは、事前から分かっていたはず

なのに、小学校を建設している。将来的に人口が減り、廃校になるのではないかといった意見は、言い出せない雰囲気だったそうである。しかし、市町村合併が行われ、建設後たったの10年で大杉小学校の統廃合が現実問題となった。

小学校存続の道も検討されたが、子どもの保護者の集団での生活体験も必要との判断により、小学校の閉校が決まった。また、旧宮川村では高齢化が進んでいたため、高齢者福祉として、地域福祉センターでもあるデイサービス施設を地域各所に整備する計画があり、RC造だった旧大杉小学校は取り壊されず、その活用も望まれていた。

■大杉谷自然学校について

自然学校は、2010年の調査では全国で約

4000校が稼働しているとの報告がある。では、なぜ大杉谷で自然学校を？お話を伺っているうちに、大西さんご自身が、地元の旧宮川村ご出身という事もあり、これからの地域や子どもたちに何ができるのかを考えると、「廃校」という施設機能を活かし、周囲の豊かな自然環境を活かした体験型の自然学校ができると判断されたように感じた。今、行動を起こさないとけないとの強い想いもあったのかかもしれないが、平成11年3月に閉校、平成13年3月に廃校した旧大杉小学校を活かして、平成13年4月から大杉谷自然学校が開校している(図6)。

活動の内容はPRパンフによると、大杉谷地域をフィールドに地域の教育力(自然・人・文化)を活かした環境教育プログラムを通じて、持続可能な新しい社会の創造に向けた活動を行っている。事業としては、「環境教育事業」「環境教育普及事業」「地域支援事業」「調査研究事業」などがあり、年間の事業の総数は約180本/年、のべ参加人数は約4000名/年となっている。NPO法人を維持していくためにも、大杉谷自然学校のある大台町だけでなく、三重県内の鳥羽市や伊賀市、東員町、県外でも活動しており、参加者は町内約45%、三重県内約45%、県外約10%と非常に広範囲にわたっている。

また、ユニークなのが大杉谷自然学校のスタッフは大西さんを含めて7名だが、三重県出身は2名で、その他は関東や関西からのインターン組であった。ご夫婦で宮川村へ移住された方もおり、大杉谷自然学校の活動内容の良さに惹きつけられた結果だろう。

■活動の内容について

大杉谷自然学校での活動のメインは、なんといっても「環境教育事業」であり、その中でも「キャンプ」だろう。

平成30年度のプログラムスケジュールからみると、大杉谷自然学校を中心に、夏・冬・春に1~3泊する「わくわく宮川体験キャンプ」、夏・冬の日帰りの「大杉谷わくわくデイキャンプ」、春・夏・秋の森や川で遊びながら学ぶ「森っ子クラブ・川っ子クラブ」、春と秋に森で行う「森のようちえん」、夏に宮川で行う「家族で川遊び」、春にテントで泊まる「家族でキャンプ」、春・秋・冬に大杉谷の暮らしを体験する「大杉谷の田舎暮らし講座」、

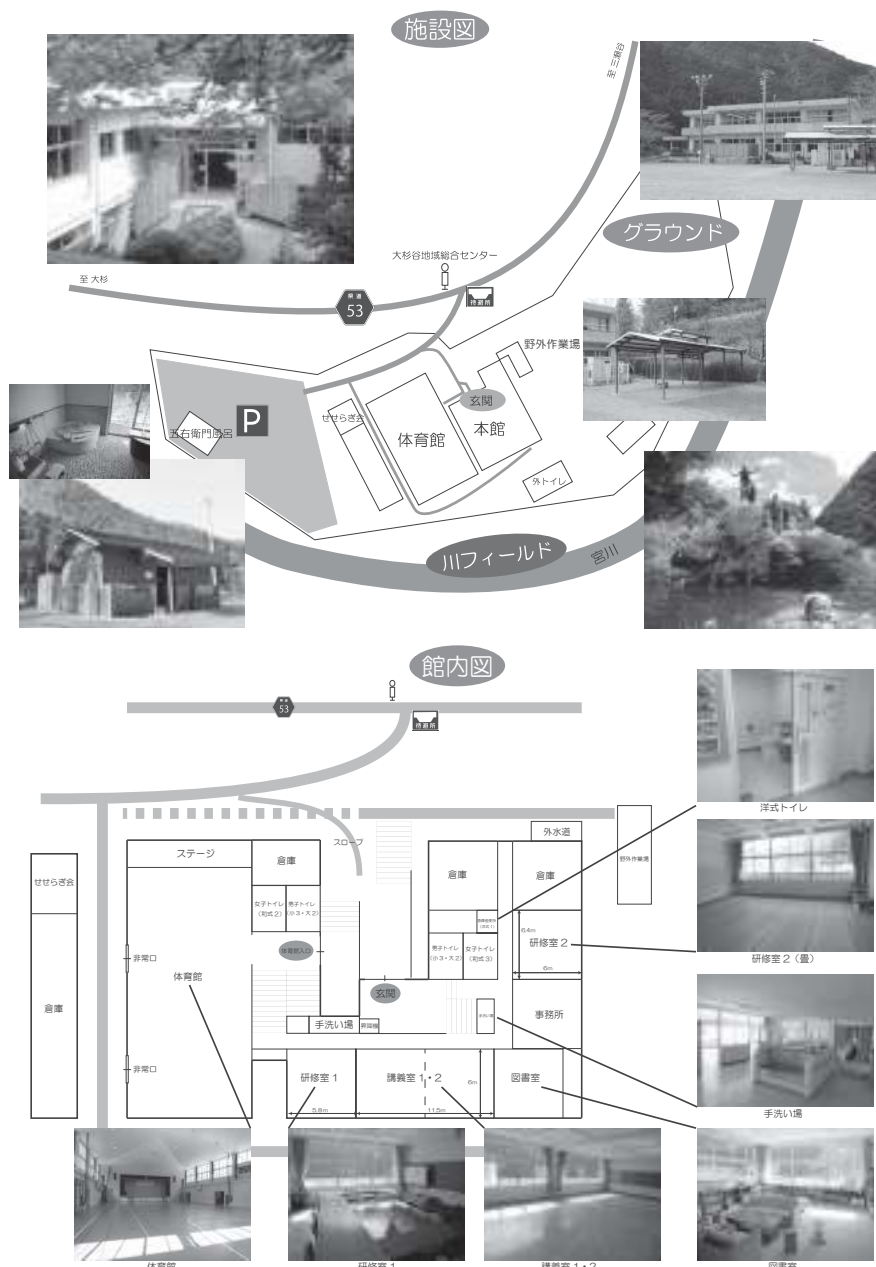


図6 大杉谷自然学校の配置図と平面図 (施設より提供)

春・冬に大人向け日帰りアウトドア「大杉谷エコツアー」、野外での事故対応に役立つ「スキルアップ講座」など、子どもも大人も自然体験ができる活動が四季を通じて目白押しである。また、地元小学校の総合学習の時間では、間伐材の伐採からトラックに積み込むまで体験する企画も行ない、1年中連続して活動しているとのことであった。

その他、「環境教育普及事業」では人材育成や講師派遣、講演などによる環境教育の普及への取り組み、「地域支援事業」では移住促進や地域の暮らしの聞取りと保存継承、地域行事への協力、「調査研究事業」では地域の生態系調査や伝統漁法、地域文化の記録継承など、非常に幅広い活動を展開している。

また、ここ大杉谷だけでなく、和歌山県的那智勝浦町にある宇久井ビジターセンターの管理運営も受託するなど、その活動範囲は相当に広い。ボランティアではなく、NPOだからこそ支援が受けられて、運営できているとのこと。観光業とよく間違えられるそうであるが、民業では「環境教育」といった社会貢献性を保つことは難しいとのことであった。

■活動の拠点としての学校施設

環境教育事業の活動の場所は、学校の目の前を流れる宮川の「川フィールド」、周辺の「山」、グラウンドに設けられた「野外作業場」(図7)、薪で焚く「五右衛門風呂」など様々である。宿泊場所は、テントを張る時もあれば、体育館で寝ることもあるとか。真夏の猛暑日でも、体育館の中は冷んやりしていて、気持ちがいいそうである。

自然学校では「体験」が基本であるため、屋外でも屋内でもいろんなことを体験することが重要であり、既存の学校施設だけではなく、ここではいろんな施設機能が増改築され



図7 グラウンドに設けられた野外作業場 (2018年11月)

ている。前後両方に黒板のある複式学級だった教室は研修室や講義室として使い(図8)、洋式トイレはもちろん、デイサービスも行っているため施設内に浴室も設置されている。

雨天でも炊事ができる屋根付きの「野外作業場」は、渡り廊下でつながってグラウンドに増築され、子どもたち自身で焚く五右衛門風呂のある「風呂場」(図9、10)は別棟で整備され、子どもたちには大人気だそうだ。



図8 複式学級で利用していた教室 (2018年11月)



図9 別棟で設けられた五右衛門風呂 (2018年11月)



図10 五右衛門風呂用の薪で焚くかまど(2018年11月)

廃校となった小学校を利活用する際、なるべくお金をかけずにやるか、最初に改修したものをずっと使い続けていくことが多い。雑然とした倉庫のようになってしまった教室も、確かにいくつかあった。

しかし、大杉谷自然学校では必要な施設機能には増築して対応することで、「環境教育」の付加価値を高めているように思えた。ここでは、学校という施設機能を最大限活かし、地域に根付いた環境教育の実践の場として、また事務所機能の拠点としても活用し、様々な活動が幅広く展開されていた。

■まちの記憶としての学校

大西さんへのインタビューで、旧宮川村の3つの小学校は統廃合され、木造校舎群は取り壊されたが、各地域で1校ぐらいは自然学校のような形で残した方がよいのではないかとのご意見であった。

学校建築は、地域住民にとっても馴染みがあって、愛着も相当に強い施設である。こうした地域の記憶が染み込んだ建築を地域で使い続けることは、地域の歴史や文化を残すことにもつながると考えられる。今回は、学校から大杉谷自然学校への転用であったため、大きな用途変更ではなく、記憶の継承がうまくいった事例かもしれない。

最初に案内された図書室には、子どもたちが読める本もあるが、卒業アルバムや記念誌といった図書資料も保管されている。こうした資料を卒業生でもある地域住民の方が、見に来ることも多いとのことであった。また、お母さまが大杉小学校で教員をしていたというご息子が訪ねて来られて、図書室で記念誌や卒業アルバムを懐かしそうに眺めておられたというエピソードを教えて頂いた。

このお話を伺った時に、廃校になって取り壊された学校図書室の資料もここに集めておけば、もっと違った活用がされたかもしれないと改めて感じた。学校は、最も転用の多い地域施設ともいえる。今回の大杉谷自然学校は、地域の記憶を残す器としても、学校建築を活かすヒントを示唆しているといえる。



図11 学校の記憶がつまった図書室 (2018年11月)



図12 大樹に取り付けられたブランコ (2018年11月)
(なかい たかゆき)

納マリ倶楽部

東海支部青年部会における 30代前後の若手設計者の 活動報告

開催日：2018年3月9日（金）
2018年6月15日（金）
2018年12月12日（水）

執筆者：

塩田哲也（委員長）

日建設計 設計部門 設計部

中井孝幸（副委員長）

愛知工業大学工学部建築学科 教授

久保久志

東畑建築事務所名古屋オフィス 設計室

三宅伸幸

安井建築設計事務所名古屋事務所 設計部

鈴木豊一郎

日建設計 設計部門 設計部

小杉嘉文

竹中工務店名古屋支店 設計部

佐藤 剛

大林組名古屋支店 建築設計部

鵜飼浩平

元・東畑建築事務所名古屋オフィス

■納マリ倶楽部の活動報告

東畑建築事務所：久保 久志

安井建築設計事務所：三宅 伸幸

1. 年間の活動報告

2017年の9月に初開催となった納マリ倶楽部。初回開催から1年と半年が経った。

1年前の本特集号にて報告した活動以降の取り組みについて、先ずは記したい。

この1年間では「納マリ倶楽部」は計3回開催し、その内2回は、「お出かけ納マリ倶楽部」と称して、現地見学会を行った。

3月9日に、日建設計名古屋オフィスにて、納まりのテーマ別に応じた意見交換会を開催した。

6月15日に、初回の「お出かけ納マリ倶楽部」として、塩田委員長のご自宅を見学させて頂き、塩田邸についての意見交換を行った。

12月12日に、第2回「お出かけ納マリ倶楽部」として、小杉さんが担当された直近の竣工作品を見学させて頂き、安井建築設計事務所名古屋事務所にて、見学の感想等の意見交換会を開催した。



写真1 第1回「お出かけ納マリ倶楽部」の様子



写真2 第2回「お出かけ納マリ倶楽部」の様子

数ヶ月、あるいは、半年のインターバルでの開催で、いつも忘れた頃にやってくる機会であるが、ちょうど良い頻度になっている。



写真3 @安井建築設計事務所での様子



写真4 @安井建築設計事務所での様子

2. 広がる活動の輪

メンバーの中心が30代前後の若手設計者ということもあり、皆日常の業務が忙しく全員参加がなかなか難しい状況である。だがいざ集まると、それぞれが関わる建築設計はジャンルも規模も多岐にわたるため、話は弾み、話題は尽きない。同世代の仲間の活動がお互いの刺激にもなっている。

会を欠席するメンバーにおいて、社内で代理の方を立てて頂く気遣いを頂いたことがきっかけで、代理の方自身も以後の活動メンバーになっている。また、東海支部の別の会議体での、今年度で青年技術者を受賞された方との交流を契機に、それらの方への「納マリ倶楽部」への参加依頼等も並行して行っており、活動の輪が徐々に広がりを見せている。

3. 今後の展望について

納マリ倶楽部の今後の在り方については、昨年末にざくばらんに皆で話したが、季節ごとに年4回、無理なく、長く細く、取り組みを継続していくことで納まりよく落ち着いた。この2年の取り組みを通して、やはり現役バリバリの設計者たちの集まりなので、竣工した建築を解説付きで見れることや見学後の苦労話やディスカッションはとても有意義だと思った。来年は、各々竣工した建築の見

学&ディスカッションを遠方で1回近場で1回、テーマ型の集まりを2回企画したい。日本建築協会の良さは、関わる主体が設計者だけではなく、施工者やメーカー、大学関係者と多岐にわたるところであると思うので、横断的な集まりも積極的に行っていこうと考えている。今後も各々が考える「納まり」について深く議論していきたい。

(くぼ ひさし)(みやけ のぶゆき)

■第1回おでかけ納まり倶楽部 あそのびハウス(塩田邸)見学会

1. あそのびハウス(塩田邸)概要

建設地 名古屋市中東区
敷地面積 190.20㎡
建築面積 95.43㎡
延べ面積 161.52㎡
構造 RC造 地上2階
最高高さ 6.050m



写真5 あそのびハウス

2. ひまわり型の住宅プラン

愛知工業大学：中井 孝幸

私は建築計画学を専門としているため、設計者の目線というよりは、皆さんと異なる建築計画的な視点から感想を述べたいと思う。

街並みの形成

比較的交通量の多い道路の交差点に近いが、周辺は既成の住宅地として落ち着いた佇まい

である。敷地は間口が狭く、奥行きが深い形状であるが、前面の車庫と住宅部分がうまく連続しており、アプローチの芝や立木の緑がつながりを演出している。

また、東側の隣家も木質系の外装材が多用されおり、塩田邸と設計者は異なるが、この木質系の外装材、植栽のやや大きめの立木の緑などが連続した街並みを形成しており、たいへんよい印象を持った。



写真6 外観の写真

ひまわり型の空間構成について

平面計画は、前面の駐車場とアプローチから玄関、リビング、キッチンが南北の軸線上に沿って配置されている。また、中央のリビング空間の周りに、立体的に諸室が配されている「ひまわり型」の構成となっている。

内装仕上げはコンクリート打ち放しなど、内部はシャープな印象を受けるが、木材が仕上げ材として使用されているので、温もりは十分に感じられる。

塩田邸で最も空間的に特徴的に思えたのは、住宅のスケールではないやや大きめのゆつたりと登る階段である。この階段が、吹き抜け空間全体の秩序を規定し、緩やかなつながりのある雰囲気を作り出している。



写真7 1階と2階を緩やかにつなぐ階段

建築計画的な視点から

たいへんユニークな試みは、吹き抜けに面した立体的な子ども室の計画である。

平面的にはそれほど大きくないが、机が置

かれたスペースの上にロフトがあり、ロフト部分が寝るスペースになっている。

子どもたちがリビングに面して日常生活を送っているの、家の中から子どもたちの様子もよく分かる。しかし一方で、子どもが大きく成長した際に、身体的や精神的な成長段階に対して、どのように対応していくのがポイントとなるかもしれない。

家の中を見学させて頂き、その後意見交換会をリビングで行ないながら、何時間か過ごした後気づいたことだが、塩田邸にはテレビがないことが判明した。

山本理顕氏が計画した熊本県営保田窪第一団地の時に大きな議論となった、社会とのつながり方を思い起こした。あの時は対社会とのつながり方が家族単位ではなく、個人単位に変化している時期であったが、現在のIT化が進んだインターネット時代において、リビングルームが中心にある「ひまわり型」のプランをみて、改めて家族や社会とのつながりを考えるよい機会となった。

(なかい たかゆき)

3. いつのまにか我が家

日建設計：鈴木 豊一郎

今回は2度目の訪問であった。1度目は塩田部の部会がこの塩田邸で開催された。直属の上司の自宅でご家族と一緒にとなると少しかしこまることを想像されるかもしれないが、そこは塩田さんの人柄だろう、楽しみしかない！という気持ちで今回も訪問した。

家族のための家

建築的に素晴らしい(羨ましい)点はいくつもあるが、何といたっても一番は、中に入った途端に2層吹抜の土間空間。である。久しぶりに会った友人に言葉を交わす前にいきなりハグされる感覚に近い。一気に懐に浸ってしまうのである。建築の魅力に言葉は不要ということを改めて感じる。この吹抜空間を中心に個人スペースが設けられているのだが、その構成がまた面白い。家族5人でワークショップを行い導き出したというこの構成は、塩田ファミリーだからこそ成し得る唯一無二の回答だろう。朝になると誰かしらひょっこり起きて来ていつの間にか円いテーブルに家族が集まる日常をつい想像してしまう。

勝手にみんなの家

住宅というのは、公共建築と違い、最もプライベートな場所である。それが、この家は、先述したように、一歩中に入った途端にハグされるような空間と温かいファミリーにより、いつの間にか他人の家ということを忘れてしまうのである。また、南北面は1, 2階とも大きなガラス面となっており、特に出入口のある南側交差点との距離感、つながり方が絶妙で室内からは開放的だが、道を歩く人からははっきり見えず、すごく魅力的で楽しそうな雰囲気のみ感じるのである。このような街との関係性を創出する住宅を見たのは初めてである。

いつのまにか我が家

1度目も今回も大人数が集まったのだが、公式卓球台と同サイズのテーブルが土間にあるため、ぐるりと囲んで座れる。長机を連結してでは味わえない一体感を生むのである。居心地の良さと心が開放され、軒先に置かれた七輪で焼かれる美味しい食事が加わり、途中で帰宅したご長男に「お帰り～」と言ってしまった。無意識に我が家の気分になっている。普通は「こんにちは」か「お邪魔しています」と言うのだろう。それが、この建築の力であり、塩田ファミリーの素晴らしさである。

この家を訪れた人は、必ず自分の家が欲しくなるに違いない。そして、家族について考える。そんな個性的で魅力溢れる家であった。

あとがき

昨年、残念ながら参加出来なかった吹抜を使った巨大流しそうめん。今年も是非、製作をお願いします！

(すずき とよいちろう)

4. 包容力のある住宅

大林組：佐藤 剛

家庭を持ち、将来的なライフプランをイメージしていく中で、「住宅」について真剣に検討を始めるのが、我々の年代であるように思います。私もそろそろ自分たちの住む住宅をと考えている中で、塩田邸の見学会に参加させて頂き、大変貴重な学びのある機会となりました。その際に感じたこと、思ったことを書き留めたいと思います。

多様な場の形成

中央に設けられた吹き抜けは、1階の土間とフローリング、ゆったりとした勾配の階段、そして吹き抜け周囲のスペースが重なることで、一体的な空間でありながら様々の活動を許容する場がいくつも出来ていることに驚きました。それは用途が決められたスペースではなく、住まい手の想像力によって新たな使い方が発見されていくような可能性に満ちた空間であると感じます。また、1階の土間はお邪魔させていただいている我々にも居場所を与えてくれるような、そんなおらかさのある空間が形成されていると思います。

LDKを越えて

住宅というリビングはここで、ダイニングはここにして広さはどのくらいにしてというように、LDKという概念によって整理することがあります。それはある面では、住宅で起こり得るであろう活動を限定し、住まい方を強制するような側面もあるのではないかなと思うようになりました。塩田邸では個のスペースをコンパクトにすることで、それぞれの活動が自然と吹き抜け廻りにしみ出し、多様な住まい方が喚起されると同時に、家族の成長や年月の経過によっても変化していくであろうことが想像できます。

自邸への計画に夢をふくらませながら、住むという行為の自由さを再度認識する素敵な機会となりました。

(さとう たけし)

5. 計画された危険な安全なあそび場

元・東畑建築事務所：鶴飼 浩平

「あそび」とは家族が「好き好んでやること」という定義のもとに計画が行われたと伺った。しかし、お子さんは未だ小学生。遊びも自ずとやんちゃになる。子どものことを考えたら、あそび場に「安全」を求めたくなる。しかし「安全」を求めすぎると、そもそも、あそび場でも無くなってしまう。塩田邸は各々が「好き好んでやる」＝「あそび」が多少危険でも「安全に」できるような工夫がなされているように感じた。

それは、吹き抜け手摺と階段に表れていると考えている。ボリューム感のある木の頭繋ぎで構成された手摺は子どもが寄りかかって

も安全で、且つ高い視認性によって、安全性をさらに担保している。この頭繋ぎのおかげで、支柱や手摺子を最小限にすることができ、意匠的にも魅力を増している。また、階段も同様に、勾配が緩く、階段をあそび場と捉えることができる、「恐怖心」を拭い去ったあそび場としての階段を実現している。

塩田邸は子どもの活動を誘発する多少危険な、でも安全にあそぶことのできる空間、「計画された安全な危険なあそび場」が実現している好例である。だからこそ、子どもと大人のあそびが別々に、しかし、同時に共存する状況が起こるのであると考えている。

子どもの年齢が小学生から高校生と幅広く、そして家族が増えるであろう将来の使い方も考えると、多様な「あそび」を内包するための「安全」に対する考え方は重要である。

誰もが好みに「あそぶ」ことのできる空間。しかも、建築で制限をすることなく、安全にあそべる「あそび」空間は、設計者の「あそび」に対する真摯な姿勢そのものであると感じた。



写真8 塩田邸内観

6. 発想が求められる場所

竹中工務店：小杉 嘉文

大変図々しくも、1年で3回も訪問させて頂きました。竣工見学会、納まり倶楽部の見学会、それから吹き抜けを使った流しそうめんパーティー。最初の1歩が踏み出しやすいのは、交通量の多い交差点に面していて、大きな開口部に高い天井高さ、土足のままりビ

ング、そんな街にそのまま繋がっている印象だからなのか、プライバシーは確保されているけれど敷居のない、とても入りやすくお邪魔しやすい住宅です。

私自身も子育て中の親として、子供をどんな環境で育て、どんな空間体験をさせてあげられるか最近よく考えますが、塩田邸はそんな興味を大変刺激します。子供部屋である「子供専用の大きな家具」は、土間とカーテンのみで仕切られています。こども土足のままに入ると、そこはおもちゃを床一面に広げようような場所ではなく、街の中の最小限のプライベートスペースである漫画喫茶や自習室、職場の机といった、整理整頓して居心地のよい場所を自らつくることが求められる場所に近い空間です。しかもそれが各自3つずつ。一方、家の中央の吹抜空間に設えられた階段やテーブルは、街の中の不特定の人の様々な利用に配慮されたものに近いやや大きなサイズ感や仕様になっています。

ご両親の圧倒的な量の空間経験からつくられた「あそのび」という緻密に計算されたモジュールで設計されている空間は、自ずとは使い方が決まらず、子供たちは自分自身の空間への思考や与えられたスケールへの発想が求められます。階段の勾配、手摺、床の段差高さ、廊下の幅、棚板や机の形、それらの配置、家のそれぞれの場所の隅々に、子供が大きくなっていくそれぞれのシーンで気づくだろう仕掛けが散りばめられ、随所に先回りした大きな優しさを感じた家でした。



写真9 塩田邸での流しそうめんパーティーの様子

流しそうめんパーティーにはうちの5歳の息子と一緒に参加しました。「あそのび」の中で楽しそうに自由に動き回る姿を見て、心から羨ましく思いました。

(こすぎ よしふみ)

■第2回おでかけ納マリ倶楽部 岐阜商工信用組合本店の見学会

1. 岐阜商工信用組合本店概要

建設地	岐阜市
敷地面積	2,382.48㎡
建築面積	1,411.79㎡
延べ面積	3,697.93㎡
構造	S造 地上3階
最高高さ	13.50m

2. 実作を交えた意見交換

竹中工務店：小杉 嘉文

設計を担当した岐阜商工信用組合本店を、建築主のご厚意を頂き、「納マリ倶楽部」のみなさんに見てもらう機会を持つことができました。間口25mに対し、奥行きが135mある細長い敷地に、間口16.5mの1スパン、奥行き80m、2つのテラスに開いた3層の建物の計画。単一のユニット架構が反復する構成や、サステナブル建築物等先導事業（省CO₂先導型）やCASBEE Sランクの認証など、環境性能技術の積極的な採用に特長があります。

当日は引越し作業の真っ最中でしたが、

様々な視点からじっくりと見て頂き、設計者として大変幸せな時間を過ごすことができました。同世代の少しずつ環境が異なる中で設計をされている方々からもらえるご意見は、自分自身を客観的に捉え、次の課題を見つけるためのとても良い機会になっています。

(こすぎ よしふみ)



写真11 各階のオフィス空間に光と風を呼び込むテラス*

3. 岐阜商工信用組合本店の見学会 & 意見交換会

日建設計：塩田 哲也

竹中工務店の小杉さんのご案内で本作品を見学させていただき、計画面と完成状態の品質の高さに感銘を受けました。その理由と共に雑感を述べたいと思います。

高層を志向したクライアントに対し、あえて低層を提案することで、魅力的なオフィス空間を獲得している

「高層の本部ビル」という設計条件はクライアントより最初に提示があったもので、重要な与件であったと想像します。多くの設計



写真10 日射の自動制御も行う端正なファサード*

者はこういった要点には従うべきと考えるわけですが、真逆の案でクライアントに納得いただいたスキルと勇気にまず感心しました。そしてそれにより得られたオフィス空間も低層の特性を十分に活かした美しく快適なものでした。

環境建築としての付加価値を補助金活用によりクライアントの負担を軽減して実現している。またそれが特徴あるファサードにもなっている。

格子のファサードとそれに組み込まれた外付けブラインドの窓まわりは自分がクライアントだったらこういう提案をして欲しいだろうなと思える内容でした。素直に言うと同業者にあちこちでこういうことをされると困る。それはさておき、構造計画も作品性を高めている要素です。その合理性について説明を受けなくても、これがよいと感じるのは、空間構成や施工計画とリンクしているアイデアだという事に加え、先述のクライアント目線のディテールに説得力があるからだと思います。



写真12 80m見通せる空間*

ディテールの新規性やエンジニアリング面での挑戦が各所に見られるが、バランスよくまとまっている。

一見派手さはありませんが、設計の実務者目線では踏み込んで工夫された箇所が幾つもあり飽きません。それが表に出過ぎていて鼻に付けば若気の至りとなるわけですが、本作はさらりと成し遂げていて好感を持ちました。



図1 岐阜商工信用組合本店・断面図

一言で言うと上手いという事だと思います。小杉さんは若いのに手練れていて羨ましく思います。今後の作品も楽しみにしています。

こんなプロジェクトを手掛けられる幸せ

納まり倶楽部のメンバーは皆共感すると思いますが、主に東海地区で仕事をしている私たちは本作のような程よい規模のプロジェクトに出会う機会が多いと言えます。

程よい、というのは設計者の目が行き届き、様々な試みをしかけ、新規性および品質の高い建築の実現に向いている、といった意味ですが、本作のように、こういう機会をしっかりとモノにしていくとともに、見学会を継続しメンバーと共に相互にスキルを高めていきたいと改めて感じました。

(しおた てつや)



写真13 カフェテリア*

4. 空間を整える

元・東畑建築事務所：鶴飼 浩平

銀行は、いわゆるオフィス空間として、中で働いている多くの人たちは日々、社屋の中で主に一日を過ごしている。つまり、社屋は働いている人達にとっては、「家」のようなものである。「『社屋＝家』に求められているのはスペクタクルではない」、私が岐阜商工信用組合新社屋を拝見して、設計者から受け取ったメッセージである。

岐阜商工信用組合は細長い敷地に低層のオフィスを実現するために、ユニットで組まれた鉄骨造をスラブで繋いでいくといった、構造・設備・施工にまで通底する建物としての

強い特徴を持っている。しかし、外観からも、内部空間からも、その特徴は「わからない」のである。この「わからない」は決してネガティブな意味ではなく、岐阜商工信用組合新社屋はポジティブな意味で、「わからない」建物なのである。容易に建物の個性を見出したと思えば、鉄骨造のユニットを組んでスラブで繋いでいるという構成そのものを強調するデザインを求めれば良い。しかし、岐阜商工信用組合社屋では、その結果生まれる「空間」を最大限に活かしたつくりとなっていると感じるのである。細長い敷地を低層で実現されているからこそできる中庭とオフィスが入り混じるような空間、中庭を介して働く人たちが各々の存在を感じ取ることができる空間。建物の構成から生まれる「空間」をシンプルに感じることができるよう、丁寧につくりこまれているように感じる。

オフィス空間の日射遮蔽のために設けられた中庭の格子は、中庭を囲うことで、屋内のような雰囲気を生み出しており、それがオフィスと連続して80mもの長さに渡り視線が抜けるという圧巻の空間体験をさらにわかりやすくしている。しかも、それだけではなく、岐阜商工信用組合新社屋は全ての空間を丁寧にづくりこむことによって、空間をスペクタクルに表現するのではなく、全体が質の高い空間として整えられているのである。



写真14 執務室*

「社屋＝家」は働く人たちの日常空間であるとする、空間にヒエラルキーをつくり、スペクタリティを求めるよりも、豊かな空間の中で生活ができるように全体として空間を整えるといった設計は、「建築を形骸化させない」という設計者のある種の意思のようなものに感じられた。

(うかい こうへい)

(*：(株) エスエス撮影)

施設をつなぐ「縁側モール」

阿久比町庁舎

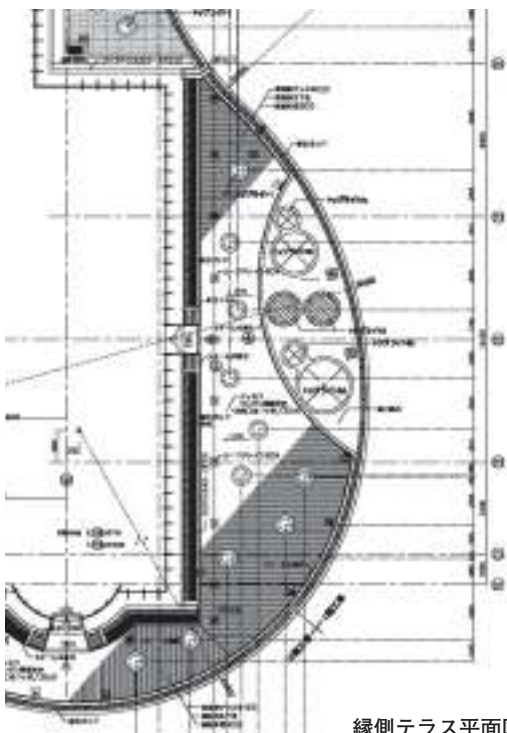
愛知県知多郡阿久比町

安井建築設計事務所
益田正博・川井茂輝

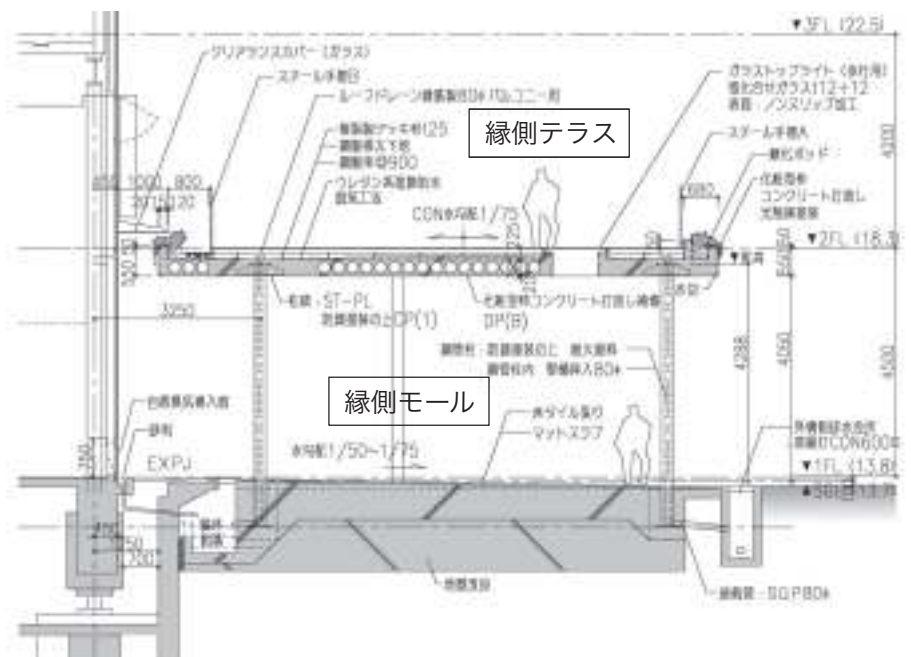
町民の広場「みんなの広場」を囲む形で、庁舎・ホール・食堂そして既存施設である公民館本館を大きな連続する軒下空間「縁側モール」でつなぎ、新旧施設を一体化した複合型庁舎である。縁側モールの屋根部分は「縁側テラス」として利用され来庁者が自由に歩行できる。計画コンセプトは、細柱によるシンプルで軽快な構造イメージと耐震Ⅰ類の性能を確保しつつ、屋根部も町のイベントにも利用できる歩行空間にすること。その実現のため、ボイドスラブと大小多数のトップライトを導入し、大きな屋根の下へ明るい環境を提供しながら自重の軽減も同時に図っている。夜には地盤面からのアップライトがガラストップライトを通してほのかな光を放ち、まちの誇り「ホテル」のイメージを彷彿とさせる。



縁側モールの屋根「縁側テラス」：歩行空間として屋内外をつなぎ、地上との回遊動線を構成する



縁側テラス平面図
(庁舎廻り)



縁側モール断面図
(1/150)

超高層ビルの足元に賑わいを生む「第二の大地」

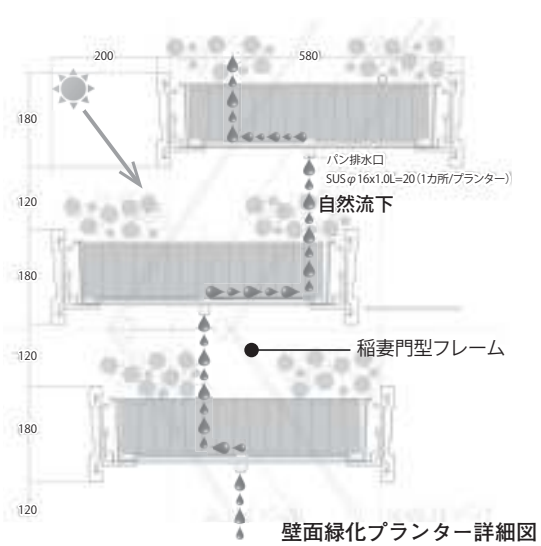
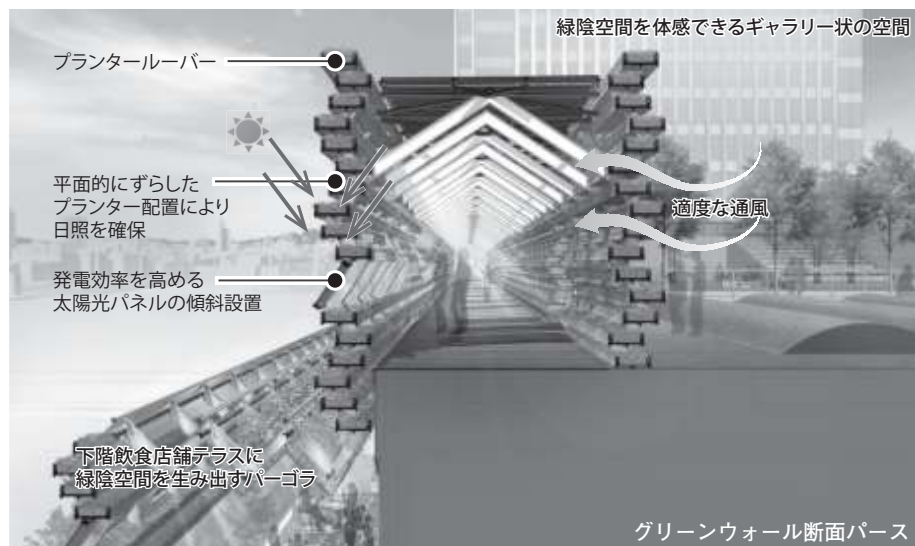
グローバルゲート屋上庭園

愛知県名古屋市

竹中工務店

長谷川寛・上河内浩

2棟の超高層ビルの足元を緑豊かな屋上緑化で繋ぐ計画である。都市景観的な単なる屋上緑化ではなく、様々なレベル差をもった「第2の大地」に緑量を確保しながら密度を変えて人の居場所を囲い込んだ。また地上レベルの街路樹を中庭に引き込み、レベル差を設けながら商業空間と一体化し、屋上まで緑を連続させる断面構成とした。施設の看板でもあるグリーンウォールは、ずらしたプランター配置により植物の生育環境の向上を図るとともに、太陽光パネルの発電効率を高める上向き設置を可能とする立体的な稲妻門型フレームの構成とした。



ショッピングモールを印象づけるHPシェル構造の屋根 ららぽーと名古屋みなとアクルス

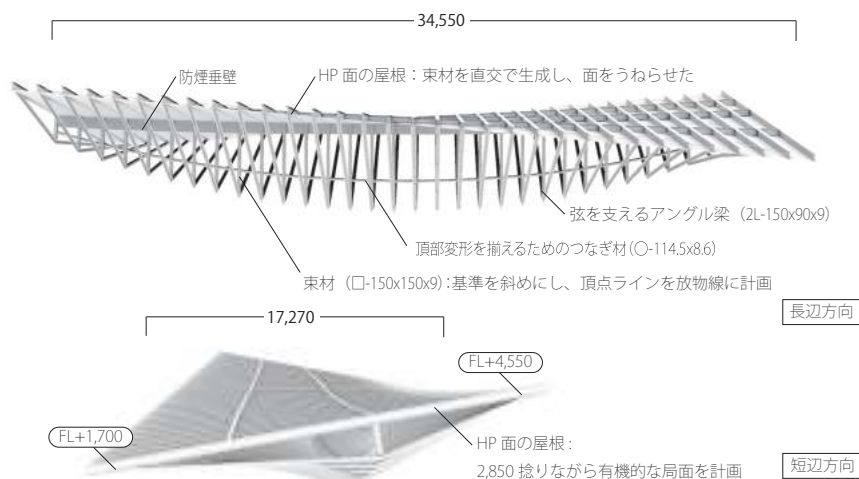
愛知県名古屋市

竹中工務店
因純一・塩野友嗣

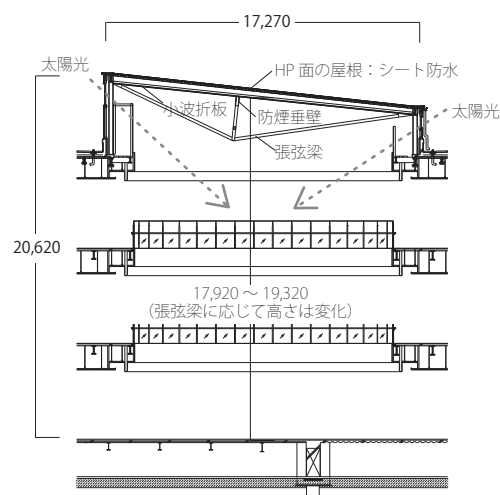
新しいスマートタウン『みなとアクルス』の中心となる商業施設に、大スパン空間をコンピューターショナルデザインにより計画した。34m（長辺方向）×17m（短辺方向）×約18m（高さ方向）のショッピングモールを印象づける大スパン空間を、要素を削ぎ落とし、シンプルかつダイナミックなHPシェル構造の屋根とした。高さ方向を利用した3次元的の立体的構成とした張弦梁で構造美を追求した。



HPシェル構造を支える張弦梁



BIMによるフォルム検討



吹抜全体断面図



上海・杭州 建築の旅

—速度・密度から記号へ
そして記号性の剥奪・漂流—

高木舞人・北川啓介

高木舞人：書き手
1976年 神戸市生まれ
2000年 京都大学卒業
設計事務所、建設コンサルタント、
大学の特任研究員等を経て
現在、シークワッドコーポレーション
チーフアーキテクト

北川啓介：聞き手
1974年 名古屋市生まれ
1996年 名古屋工業大学卒業
2001年 同大学院博士後期課程修了、博士
(工学)
2017年 プリンストン大学客員研究員
現在、名古屋工業大学大学院教授

■はじめに

このテキストは、2018年11月22日から25日にかけて計4日にわたる総勢21名の「上海・杭州の現代建築」を巡る旅について、2019年1月11日に行った対談をもとにしている。建築や都市の体験だけでなく、街の空気感や、多様なツアー参加者、現地で会った多くの人々を含め、得るものの多い旅であった。そして、この対談自体が刺激的な旅であった。そのため、対談における話の流れや言葉の変化を損なわずに伝えることを意図した。誰がどのような発言をしたという事ではなく、どのような経験により、どのような話題が生まれ、そして表現としてどう表れるのか、その臨場感を読者の方々と共有できればという想いである。名文・美文とはとても言えない拙い文章ではあるが、どうかそれは容赦頂きたい。

■20181122 名古屋から上海へ

中国を訪れると日本と比較したくなる欲求に駆られる。残念ながら、そのような比較さえ無意味と感じさせる中国の現状を目の当たりにする旅の始まりであった。それは塵ひとつ落ちていない上海の街中であり、自動開閉する現場ゲートであり、駆け巡る電動バイクなのかもしれない。今、「中国は」と紋切型に語ることは、何の意味もないだろう。



写真1 工事現場のゲート

「合理性」の行方

日建設計 上海事務所を訪問し、劉氏、徐氏から様々なプロジェクトや取り組みの説明を伺った。その後、彼らとともに「陸家嘴世紀金融広場」(2014) および「上海緑地中心」(2017)を訪れた。

「陸家嘴世紀金融広場」の建築主は国営のデベロッパーであり、「上海緑地中心」は民間のデベロッパーである。建築主の違いのため

か、建築の機能による違いだけでなく、「上海緑地中心」からは「消費される速度」としての合理性を強く感じ、「陸家嘴世紀金融広場」はありきたりであるが「モダニズムの延長」としての合理性を感じた。

ファサードにみられる端正なパターン繰り返しや、バランスの良いコアの配置や外構とペデストリアンデッキの心地よい接続など、「陸家嘴世紀金融広場」は矛盾を抱えずに実現されたモダニズムと言えるのかもしれない。

また、これらの作品および、その後訪れる建築に共通した特徴として、外構(植栽)のメンテナンスの良さがあつた。これは、使われるための芝生空間でなく、単に鑑賞目的であることが、その大きな要因であり、後述する「記号性」の予兆であつたのかもしれない。



写真2 陸家嘴世紀金融広場

「上海緑地中心」は羊を放牧するというコンセプトのためか、屋上庭園に馬がいるというアクロバティックな演出があつた。実際に馬を建築の屋上空間にあっけらかんと飼ってしまう無邪気さは、単に「話題性」や「集客効果」を狙ったものとも感じられ、この建築自身のコンセプトより、むしろ集客による投資回収の早期実現の意思を強く感じさせるものであつた。「上海緑地中心」は「消費の喚起を加速させる装置」と表現しても良いのかもしれない。



写真3 上海緑地中心

加速する「速度」

「速度」という視点ではGenslerの「上海中心大厦」(2016)のエレベーターも世界最速という意味で、文字通りその象徴と言える。

最小限で最大の効果でなく、最速・最短で最大の効果という志向性、だから建築が「消費」されることに关しても、何ら矛盾はない。

照明の光でさえ、「最速」である「光」だからこそ意味があると言えるのかもしれない。



写真4 上海中心大厦

インターネット上の店舗が実空間の店舗以上に早く制作され、消費を喚起する装置としてより効果的であるため、ブランド・ショップの実店舗が中国国内で減少傾向にあることも無関係ではないだろう。

「最速」、「最短」の志向、ホテルのFFEが傷み、劣化しても、むしろ「速度」という観点では優れている。より早く更新せざるを得ないのだから。

その夜、宿泊した磯崎新の設計による「証大ヒマラヤセンター」(2010)を振り返りつつ、そのような印象の残るツアーの初日であった。



写真5 証大ヒマラヤセンター

■20181123 上海

対比としての「速度」

Atelier Deshausの設計による「龍美術館(西岸館)」(2014)は現代アートを中心にした私設美術館であり、サイロの遺構を残して建物が配置されている。サイロという遺構が持つ意味でなく、遺構を残すことで「加速的な時代の変化」を感じさせ、現代的でモノコックな美術館と近代的なサイロの遺構のコントラストがそれを浮かび上がらせていた。

消らかで一体的で、コンクリートの固化の時間を想起させることのないテクスチャ、フラットなガラスの開口部からなる現代美術館と、長い年月により風化した粗いマテリアルが寡黙に語るサイロの遺構は対比される「速度」を表しているようであった。護岸には、オブジェ以外の機能を失ったクレーン、美術館と接続するデッキ、コンテナを改修したランニングステーション、真新しいインフォメーションセンターが立ち並び、対比される「速度」を映す鏡のように黄浦江は佇んでいた。



写真6 龍美術館(西岸館)

表現としての「速度」

ザハ・ハディド設計による「凌空SOHO」(2014)は、「速度」を形態として具象化した印象であった。そのためか、この建物には、より早く、新しいサービスを提供しようとするITスタートアップ企業がよく似合っている。「時間の流れ」を感じさせる必要などなく、



写真7 凌空SOHO

「速度」を純粹に追い求める建築と改革開放政策以降の中国の市場経済原理が絶妙に融合した風景であった。

青木淳の設計による「L'avenue Shanghai」(2013)はハイブランドが入居する複合商業施設である。入居するブランド・ショップで見かける人々は多くなく、インターネット上の店舗が実店舗以上の「速度」を持ってしまったことと無関係では無いだろう。

消費を喚起する装置でなくなった時に「建築はどうあるべきか?」、この建築の行く末はその象徴になっているかもしれない。



写真8 L'avenue Shanghai

隈研吾設計による「虹口SOHO」(2015)は、建物に巡らせたスチールを編み込んだルーバーが強調する鉛直性が特徴であり、視覚的に小さな土地で最大限の効果という効果を上手く実現している。鉛直方向のルーバーにより「速度」と「高密度感」、つまり「最狭」での「最速感」を与えている。それは土地の最も合理的な活用手法であるとともに、飽くなき「速度」の追求とも言える。



写真9 虹口SOHO

豫園の屋根の「反り」も「速度」への志向性と捉えることができる。同心円状に配された垂木は、先端に行くほど細くなり、中心から一気に拡がり上昇する。まさに加速的に遠心する「速度感」の現れと捉えることはできないだろうか?



写真10 豫園 屋根の反り

一方、上海市内に散見されるプロパガンダは、こう言った飽くなき「速度」への欲求とは対照的な、「不変の理念」という印象を与えるものが多かった。



写真11 上海市内の公益広告

スーパーポテトがインテリアを設計した「アンダーズシンティエンディ上海」のエントランスの受付に見られるルーバーも、「密度」や「速度」への欲求を感じさせた。

オールデイ・ダイニングの飾り棚に用いられた磨き上げられた単管パイプは、恒常性を求めない意思の表れであり、「速度」への渴望なのかもしれない。



写真12 アンダーズシンティエンディ上海

様々な建築の表現に見られる「速度」への欲求に対し、それをコントロールする主体が「国家」であるというシーンがいくつか見られた。空港、高速鉄道駅、地下鉄、博物館において「手荷物の検査」という行為が必ず介在する。それは、時間をコントロールする主体は「国家」であり、土地・個人・時間を含めたすべての管理主体としての「国家」が見え

隠れしているようでもあった。上海の夜の喧騒とともにラグジャリーなアンダーズの一室でツアー2日目を終えた。

■20180124 上海から杭州へ

超高層ビルの林立する上海は「開発に疲れている」という日建設計 上海事務所のスタッフの何気ない一言にみられるように、上海はデヴェロッピング・シティでなくデベロップト・シティという印象であった。その一方、杭州は街中に建設工事用車両を多く見かけ、デヴェロッピング・シティという印象を受ける。

しかしながら、昼食に訪れた杭州の「運河天地」のショッピングモールは既に荒廃し、時代に取り残されているようであった。

もはや「ショッピングモールを作る」という行為がデヴェロッピングな行為でないと感じさせる経験であった。



写真13 杭州 運河天地

ビッグネス 記号としての建築・風景

デイヴィッド・チッパーフィールドによる「良渚博物院」(2008)はチッパーフィールドの他の建築と比べ異質な印象である。その違和感は、ディティールの無さや、展示空間と建築の乖離などに見られ、まるで展示されていた博物院の模型をそのままスケールアップしたような建築であった。

実際のスケールとして小さな図面や模型で表現されているものを、文字通りそのまま大きくした「ビッグネス」と言い換えても良いだろう。この建築ができた時代背景もあると思うが、約10年の時はそれを既に過去のものとしていた。それは、どこまでがスタッフのエリアなのか判別できないミュージアム・ショップであり、成熟しない空間であり、未分化なままスケールアップした空間であった。機能や性質が定められないまま、引き伸ばさ

れ拡大された空間、人間の感覚からスケールアウトしまったような空間であった。「記号操作」で成り立った建築が、ビッグネスのモニュメントとして、佇んでいるようであった。



写真14 良渚博物院

杭州の西湖といえば中国の誰もが憧れる原風景と言われ、700年の昔から国内外の観光客を集めてきた景勝地である。水深は最大で2.8mしかなく、人工的に造成した景観は「記号操作」としての庭園とも言える。

湖に寄り添う集落や、釣りや食事の準備や農作業などの人々の営みといった「生活景」は全く見られない。それゆえ西湖の外周を埋め尽くす観光客は、西湖という「記号」を消費するために訪れているという印象であった。



写真15 杭州 西湖

西湖の周辺には、高級茶として有名な龍井茶の茶畑がある。西湖と同じく「生活景」としての風景はなく、茶畑に隣接する飲食店やお茶屋が林立し、夜になると賑やかなネオンが村を浮かび上がらせる。それは龍井茶の茶畑や西湖すら単に「消費される記号」であり、路上に立ち並ぶ高級車と違いのないものようであった。



写真16 杭州 龍井茶の茶畑

その文脈から「インターコンチネンタルホテル杭州」(2010) はそのまま「記号操作」として球状形態が成立していると理解できる。内部の吹抜け空間に面する廊下の手すりのガラス面にみられる球状の意匠も「記号操作」でしかなく、浮き上がる光も「記号操作」であり、上海に見られる「速度」という概念とは異質な印象である。

それは、上海の建築において「密度」や「速度」への欲求が表れている事に対し、杭州においては「記号操作」や「記号性」が志向され、明瞭に「記号として認識できるか」が建築にとってのテーマのようであった。



写真17 インターコンチネンタルホテル 杭州

UNStudioの設計による「ラッフルズ・シティ杭州」(2017) も特徴的な形態の高層ビルでありながら、柱の上昇感や高密度を感じさせるものではなく、「記号操作」の表現として模型をそのままスケールアップした印象であった。内部で展開される空間が多様性に富む一方、外部に開かれたテラスは内部空間との関係性や接続性でなく、あくまでも「記号操作」としての「外部性」の象徴に過ぎない印象であった。



写真18 ラッフルズ・シティ 杭州

純化される「記号操作」

ノーマン・フォスターによる「アップルストア 西湖」は「記号操作」の純化として理解できるだろう。プロダクトレベルの「記号操作」を建築に適用したような印象である。

強化ガラスの階段や、キャンチレバーの薄いスラブや、フラットな照明の天井など、純化された「記号操作」の集合体・集大成であった。



写真19 アップルストア 西湖

■20181125 杭州

「記号性」の剥奪・漂流

隈研吾による「中国美术学院民芸博物館」(2015) は虹口SOHOに見られた「速度」や「密度」への欲求は無く、後述する「記号性を漂白」する「空間の振る舞い」と感じられる建築であった。

記号になってしまったデビット・チッパーフィールドの「良渚博物院」やツアー2日目に訪れたPerkins+Willの「上海自然博物館」(2015) のどちらの博物館も展示物は基本的にレプリカであった。

博物館においてレプリカを展示するということ自体、「記号性」の象徴と捉えることがで



写真20 中国美术学院民芸博物館



写真21 上海自然博物館

きるかもしれない。そこに、「文化大革命」における「歴史」の分断・再構築という作用を読み取るのは私達だけでは無いだろう。

そうした「記号性」や「記号操作」の裏にある歴史や物質を中国美术学院象山新校区のキャンパスに点在する建築物(2004〜)を通じて、ワン・シュウは露わにしていると感じた。

非常に限られた予算でのキャンパス計画ですら、ワン・シュウにとっては記号化を避ける行為であったようにさえ思える。

ある意味「予算」(資本=貨幣)というのは信用の「記号化」であり、「予算」さえ無意味化させる建築は、「記号性」への「闘い」であり「マニフェスト」であるのかもしれない。



写真22 中国美术学院象山新校区

今どこにいるのかわからないような迷路性や、瓦と石とコンクリートが混じり合うファサードは、その意志を感じさせた。そして、屋根でさえ、屋根の機能を強調する「記号操作」を避け、伝統的な中国建築の屋根と同様に、拡がり、上昇する遠心性のある形態を踏襲しつつ、その「記号性を失わせる」ために屋根と壁を連続させているようであった。



写真23 中国美术学院象山新校区

木製の建具も、時にそれは壁であり、時に扉であった。それは「記号操作」や「記号性」を付与する形態操作を、建具の持つ機能や形態に収束させないことで実現させた「記号性を失わせた」建築の表情なのかもしれない。



写真24 建具と壁

アルヴァロ・シザとカルロス・カスタンニエイラが設計した「デザインミュージアム」(2018)は、アルヴァロ・シザの建築としてはやや趣が異なる。同じ石材を採用しつつムラのあるテクスチャを残し、白いマッシブな形態を避けることで、記号性を持たせないようにしているようである。



写真25 デザインミュージアム

それは、キャンパスに点在するワン・シェウの建築を読み解きながら、アルヴァロ・シザとカルロス・カスタンニエイラが導き出した応えとも取ることができる。

また、各棟を接続する鉄骨のデッキに用いられる斜めに差し込まれる柱すら「橋」としての記号性を持たせない結果のようであった。



写真26 鉄骨のデッキ

キャンパス内の建物と池の関係性も、水面に反射させるといった「記号操作」を避け、



写真27 水と建物の関係

むしろ反射させる水盤という機能すら入念に避けているような印象である。

改めて、隈研吾による「中国美术学院民芸博物館」を振り返ると「瓦」という記号化の作用の強い材料を文字通り「浮かせて」いる。屋根を想起させる意味性、耐久材・耐候材としての持続性や歴史性、つまり瓦としての「記号性」を「浮かす」ことにより失わせ、ファサードに用いている。巨大な建物を覆う物質でありながら、「瓦」としての記号性を全く持たせないようにしたかったと思える。



写真28 浮く瓦

建物から「瓦らしさ」というものを消し去り、「記号を漂白する」デザインとも言えるのかもしれない。

一方ワン・シェウの建築では、壁や屋根や底で用いる瓦は「物質」として立ち現れ、「記

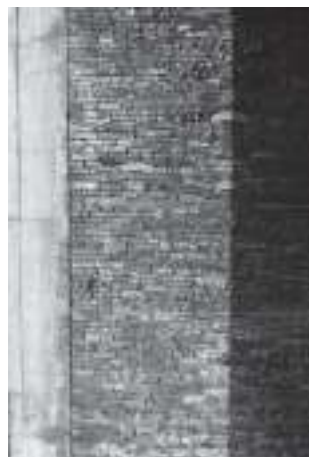


写真29 埋め込まれる瓦

号を剥奪する」デザインと表現できるのかもしれない。

瓦を浮かせて「意味を漂白する」デザインは「負ける建築」としての表現手法とうまく符合する。それは「中国美术学院民芸博物館」で空間を仕切らずに地形の起伏をなぞった連続した展示空間や、屋根をかけて、瓦を浮かせて、内部空間をあたかも外部空間のように「振る舞わせる」ことで「記号性を漂流」させたデザインと言える。



写真30 民芸博物館の内部空間

■おわりに

上海から始まり杭州で終える一連の体験を通じて、「速度」「密度」への飽くなき欲求から、「記号性」「記号操作」、さらには「記号に収束されない」建築への流れを体感した。

ある意味ツアーとは最速最短で建築を見て回るといって「速度重視型観光行動」かもしれないが、それに余る「記憶」や「物語」を参加者に残す経験であった。それは「記号に収束されない」ワン・シェウに見られる空間を実現する「行為」としての「振る舞い」であり、隈研吾による空間のそのものの「振る舞い」へと至る「旅」＝「振る舞い」であった。だからこそ私達の「振る舞い」が「中国の現代建築」の感じ方を露わにし、その空間の認識になり、それによってしか解釈されない経験となる。

本ツアーで中国に滞在中に2025年の大阪万博が決定したが、建築や都市を経験する私達の「振る舞い」が2025年の万博や2020年の東京オリンピックに現れる世界を規定するのかもしれない。

ツアーの参加者、ツアーを実現し、参加させて頂いた多くの関係者にお礼申し上げ、拙い言葉の旅を締めくくる。

(たかぎ まいと・きたがわ けいすけ)

実務経験要件を 資格登録要件に見直し

建築士法の一部を改正する法律 (平成30年改正)の概要

佐々木雅也

国土交通省住宅局建築指導課企画専門官

建築士試験の受験者は、10年間で大きく減少するとともに、平均年齢も高齢化が進んでいる。この結果、設計等の業務を行う、いわゆる所属建築士の高齢化が進み、将来の建築士の確保に大きな問題が生じている。

こうしたことを背景に、建築設計関係三団体（公益社団法人日本建築士会連合会、一般社団法人日本建築士事務所協会連合会、公益社団法人日本建築家協会、以下「建築設計三会」という。）による「建築士資格制度の改善に関する共同提案」を踏まえ、建築士を将来にわたって継続的かつ安定的に確保するため、議員立法により「建築士法の一部を改正する法律」が国会において可決・成立し、平成30年12月14日に公布されたところである。

本稿では今回の改正内容について説明する。

建築士法改正の背景

■建築士試験及び建築士の現状

建築士資格については、平成17年に発覚した構造計算書偽装問題への対応として、平成18年に建築士法の改正を行い、新たに建築士となる者の資質を確保するため、建築士試験の受験資格について

- ・学歴要件について、建築学科等の卒業から国土交通大臣の指定する科目の履修へと見直し
 - ・実務経験要件について、対象実務を原則として設計・工事監理の実務に限定
- など、厳格化された。

これにより、建築士試験の受験資格としての実務経験要件を満たすために必要な時間が長期化し、大学等の卒業から時間を経過してからの受験となることから、働きながらの受験準備が一層、難しい状況となっている。

この結果、10年前と比較して一級建築士試験の受験者は約2/3（H19：4.6万人→H29：3.1万人）へと減少し、平均年齢も+2.4歳（H19：32.4歳→H29：34.8歳）と高年齢化して

いる。

さらに、新たに建築士となる者が減少し、かつ高年齢化したことで、建築士事務所に所属し設計等の業務を行う建築士は、60歳以上が約4割を占めることとなり、極端な高齢化が進んでいる。

建築士は、設計及び工事監理の業務を独占業務とし、多様な建築物を創造するとともに、我が国の建築物の安全を確保する上で重要な役割を担う資格である。このような建築士に予見される将来の人材不足に対応することが必要となっている。

■法案成立までの経緯

こうした現状を背景に、建築設計三会在「建築士資格制度の改善に関する共同提案」を取りまとめ、平成30年6月に自由民主党・建築設計議員連盟（会長 額賀福士郎衆議院議員）に要望された。その後、議連において法案化作業が進められ（議連事務局長 山本有二衆議院議員、議連事務局次長 盛山正仁衆議院議員、同 田所嘉徳衆議院議員、鬼山誠衆議院議員が主導）、議員立法により「建築士法の一部を改正する法律」（平成30年法律第93号）として国会において全会一致で可決・成立し、平成30年12月14日に公布された。

改正建築士法の概要

改正建築士法は、将来の建築士人材を継続的かつ安定的に確保するため、建築士試験に係る受験資格を改めることを内容としている。

■建築士試験の受験資格の見直し

現在の建築士試験の受験資格は、学歴要件と実務経験要件の両方を充足することが必要となっている。

改正建築士法では、建築士試験の受験資格要件となっている実務経験要件について、建築士資格の登録要件へと位置づけを見直し、

- ・原則として学歴要件を充足すれば建築士試験を受験可能とする
 - ・建築士としての登録までに実務経験要件の充足を求める
- よう見直すものである（表）。

具体例を挙げると、建築に関する科目を履修して大学を卒業した者が一級建築士試験を受験する場合、現行制度では、大学卒業後に建築実務の経験を2年以上経ることが必要であったところ、改正法による新制度では、

- ・大学卒業直後から実務経験を経なくても建築士試験を受験可能
- ・試験に合格した上で、大学卒業後の建築実務の経験が2年以上あれば一級建築士として登録することが可能

となる。

今回の改正は、実務経験要件を受験資格要

件から登録要件へと位置づけを見直すものである。表の通り例示として挙げた一級建築士だけでなく、二級・木造建築士についても同様の見直しを行っているが、二級建築士の受験資格のうち、実務経験（7年）のみで受験する者については、現行制度と同様に7年以上の実務経験を経た後でないと受験することができないことは留意が必要である。

今回の改正により、建築士試験の受験機会が拡大し、大学で学んだ知識を生かし計画的な建築士試験の受験を可能とするとともに、建築士事務所にとっても、建築士免許を取得する可能性の高い若手人材の確保が可能となることを見込んでいる。

	受験資格要件 [現行] 学歴＋実務経験	資格登録要件 [現行] 受験資格要件と同じ	
	学歴 (卒業学校)	学歴 (卒業学校)	実務経験
一級	大学 高等専門学校	大学	2年以上
		短期大学 (3年)	3年以上
		短期大学 (2年)	4年以上
	二級建築士	二級建築士	二級建築士として4年以上
二級・木造	国土交通大臣が同等と認める者	国土交通大臣が同等と認める者	所定の年数以上
	大学、高等専門学校、高等学校	大学、高等専門学校	なし
	実務経験7年	—	2年以上
	都道府県知事が同等と認める者	国土交通大臣が同等と認める者	所定の年数以上

【改正建築士法による新たな受験資格要件及び資格登録要件】

■2年以内に施行

新制度の周知や新たな仕組みを整備するために一定の時間が必要であることから、改正建築士法は、公布の日から2年以内に施行することとなっている。

現在、国土交通省では、新制度による試験制度・資格登録制度の構築作業を行っているところであり、今後、新制度に基づき、受験手数料や資格登録手数料の見直しなど所要の制度整備を行う。

（ささき まさや）

●佐々木雅也

昭和53年生まれ。早稲田大学卒業。平成17年国土交通省入省。

膜型圧電セラミックス を用いたスマートな制 振鉄骨階段 SPADA®-stairs

熊野豪人

株式会社竹中工務店大阪本店設計部構造部門副部長

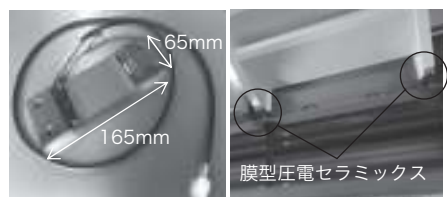
プロジェクト概要

竹中工務店本社・大阪本店が入居している御堂ビルのオフィス空間を再編するにあたり、各部門の連携を強め、豊かで活性化した共創空間を創造することを目的として、ワークプレイスの整備が行われた。

この整備計画の一環として、執務者同士のコミュニケーション活性化を目的として、3～8階を上下方向につなぐ新たな階段が計画された。良好な見通しを確保するため階段設置部は複層に渡り吹抜けとし、執務者の交流を誘発するオープンな空間を創出するスリムかつ振動性能に優れた階段の構造計画が求められた。



写真1 鉄骨階段の外観



(a) 外観 (b) 設置状況

写真2 膜型圧電セラミックスの外観・設置状況

階段の構造計画概要

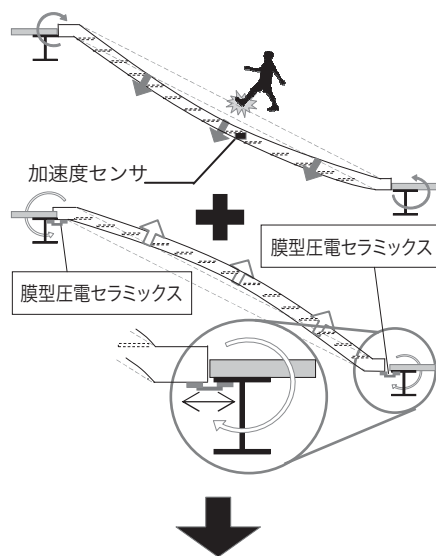
写真1に階段の外観を示す。本階段のスパン長は約7.3m、ささら桁の長さは約8.1m、階段幅は約1.2mである。踊り場や折り返しのない一方向の形状となっており、スパン中央付近に支柱や制振装置は設置できない。

ササラ桁断面のスリム化と振動性能を両立したスパンの大きな鉄骨階段の実現に向けた構造計画を以下に示す。

■①膜型圧電セラミックス制振システムの採用

写真2、図1に制振装置の概要を示す。スパン中央の踏面内には加速度センサが組み込まれており、階段昇降時の振動を検出する。

また、ささら桁の両端部と受梁との接合部には膜型圧電セラミックスが配置されており、この伸縮挙動によりささら桁に曲げモーメントが作用し、階段の鉛直方向の振動の制御力となる。制御コンピュータが、加速度センサに検出された階段の振動に基づいて、歩行時の変形と逆位相の変形を起こすことによって、歩行振動を低減する。



膜型圧電セラミックスが歩行の振動を打ち消すように縮み、歩行振動を相殺

図1 膜型圧電セラミックス制振システム

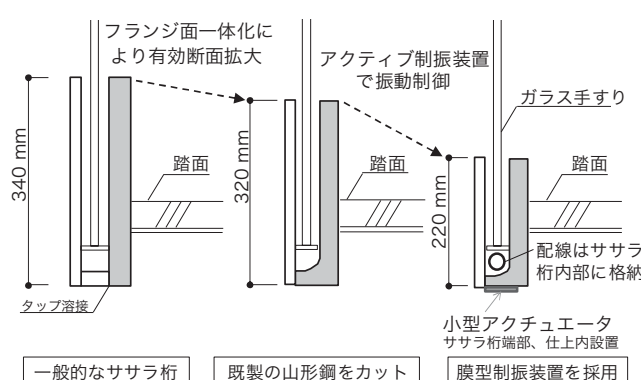


図2 ササラ桁のスリム化

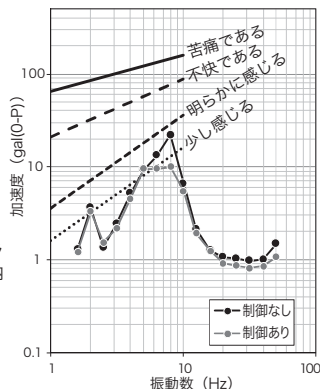


図3 階段昇降時の振動（実測）

■②ササラ桁断面形状の工夫

ササラ桁の断面形状はガラス手すりを納めるため、コ形断面としている。そこで、断面性能を向上させるとともに溶接によるひずみを減らし、エッジの効いた外観を実現するため、厚さ25mmの既製山形鋼をカットしたものに12mmのプレート溶接してコ形のササラ桁を作成した。さらに、制振装置の配線は階段の全長にわたり必要となるが、この配線をガラス手すりのコ形断面ササラ桁内部に納め外部からは見えない納まりとした。

上記①・②の効果により、図2に示すように一般的なササラ桁と比較して、せいを2/3程度に低減でき、スリムかつ振動性能に優れた階段を実現できた。

階段の振動測定結果

階段の振動実測結果を図3に示す。階段昇降時に計測された階段中央の応答加速度を1/3オクターブバンド周波数分析した結果、‘制御なし’の場合は、1次固有振動数を含む8Hz帯域で最大となり、評価指標において‘明らかに感じる’程度であった。一方、‘制御あり’の場合は、8Hz、6.3Hz帯域の振幅が約1/2程度に低減され、‘少し感じる’程度の振動となり、振動制御の効果が確認できた。

おわりに

膜型制振システムの採用とササラ桁の断面形状の工夫により、美観に優れた高性能な鉄骨階段を実現できた。本制振技術は、建物の顔となる鉄骨階段の実現や、既存鉄骨梁の振動性能の改善等、新築・改修問わず幅広い分野で適用可能である。

(くまの たけひと)

●熊野豪人

1975年生まれ。2000年大阪大学大学院工学研究科建築工学専攻修了。同年株式会社竹中工務店入社。現在に至る。

池坊

設計：杉山隆建築設計事務所
施工：鹿島建設大阪支店

(1977年3月号)

石田潤一郎

武庫川女子大学建築学科
客員教授

■高層ビル「池坊」

華道家元池坊はいまでもなく最も古くまた最大規模の華道の流派である。今回取り上げる「池坊」は、「池坊本部ビル」とも呼ばれたように、その事務室、そして教室となる華道研究室がスペースの過半を占め、その他に展示室と資料館、収蔵庫を収める。

工期は、『建築と社会』記載のデータでは1975年（昭和50）2月起工、翌1976年（昭和51）11月の竣工となる。完成を祝う行事としては、同年12月17日に落慶法要（なぜ「法要」かは後述）、明けて1977年1月17・18日に竣工披露式が開かれた。設計者の作品集はじめ多くの記録で竣工年が1977年とされるのは、建設工事上の完工と一般の供用との時期が年をまたいだためである。

地上11階、地下2階、軒高は当時の制限上限の45m、ペントハウスまで含めると地上53mに達した。設計に着手した1970年時点では京都市街地の最高高さは31mであったが、1973年に都心部においては45mの制限に変わる。これを受けて設計を変更し、京都で最初の45mビルとなった。

設計は杉山隆建築設計事務所、施工は鹿島建設大阪支店である。杉山隆は1928年（昭和3）生まれ、1949年（昭和24）に東京美術学校を卒業し、そのまま大学時代の恩師である

吉田五十八の事務所に入所し、15年間にその下で過ごす。1964年（昭和39）に独立して事務所を開設した。1970年（昭和45）に今里家の養子に入り、今里隆と名乗る。事務所名と本名が異なるという珍しいケースである。吉田の愛弟子らしく、和風を基調とする住宅作品が多いが、国技館を手がけたりもしている（1984年）。関西には作品は多くないが、1991年の南座の改修はその手腕をよく発揮した業績であった。また京都・粟田口的美濃吉本店竹茂楼（1992年）では京都市都市景観賞を受けている。

■六角堂とのつながり

『建築と社会』誌で、今里隆は設計の前提条件として、

1. 六角堂のお堂および境内と現代の建物をいかにマッチさせるか
2. テナントビルであってはいけない。いけば花のために使う建物でなければいけない

の二つを掲げている。

今里が最初に挙げた条件について考えるためには、池坊と六角堂との関係を知っておく必要があるだろう。六角堂は俗称で、正式には頂法寺という。紫雲山なる山号を持つ天台宗寺院である。その本堂の平面が六角形をなすところから「六角堂」とよばれている。平安時代から寺院の敷地は動いておらず、境内の中央にある六角形の礎石が京都の中心と唱えられ、「京のへそ石」として名高い。池坊と六角堂はともに有名だが、池坊の家元が室町時代以降、代々、頂法寺の執行として住職を務めてきていることはあまり知られていない。現在の六角堂も、前身建物が蛤御門の変の大火で焼亡したあと、池坊が寄付を募って明治10年（1877）に再建されたものである。家元たるものは仏教を学び、得度しなければならない。家元が名乗る「専永」「専好」は一般的な号ではなく、法名である。この「池坊」の竣工にあたってまず落慶法要が営まれたのは、池坊家元の僧侶としての性格、そして池坊と六角堂の不可分の関係のためである。その一体性は建築においても表現されなければならないのであった。

■その造形

配置計画と庭園設計について、今里隆は次のように記す。

1階は必要最小限の施設以外をすべてピロティとし、境内の延長として開放し、いけばなにとって大切な光と水と緑を添えて構成された広場をつくり、人々のオアシスとしてその歴史を後世に残すこと



①烏丸通り北側から見る。
「建築と社会」1977年3月号



②烏丸通り北側からの現状



③敷地北東奥から1階ピロティ周りと六角堂を見る。
「建築と社会」1977年3月号

を主題とした。正面入口は六角堂側で、境内より池のある庭園をながめながら橋を渡り、ピロティの広場に入るが、烏丸通りからもこの広場に入ることができるようになっている。…六角堂廻りの庭園の雰囲気がそのまま自然に池を通じてピロティ内に入り込むよう…境内全体の統一を考えて完成した〔傍点原著者、以下も同じ〕

簡にして要を得た説明で、水盤と広場からなる自由空地の上にビルを浮かせようとした操作がよく分かる。補足すれば、後で述べる構造上の工夫によって側柱以外の柱は広場内に立たない。遮るもののないピロティ下の広やかさのおかげもあって、空間は内外を自由に流動し、ビルと六角堂は自然に結びついていく。

外観については、こう語る。

京都の中心地に建つ伝統ある日本いけばな池坊の建物として、鮮明に印象づけできる単純な形態をスペイン産錆色御影石の重厚さと、ブロンズ色アルミを使用し追求したものである。

これは明記されていないが、烏丸通り側(西側)立面についてであろう。自身の作品集では、写真のキャプションとしてもう少し具体的に解説している。

池坊のシンボルである「立花」をテーマに地面から生えて空に伸び上がるようなかたちにした。淡いピンク色花崗岩と角アルミ格子のルーパーで構成している。

緩やかな凹曲面の石の壁が地面から立ち上がり、やがて垂直に屹立するというその造形は、立花に思い至らなくても、建築以外の何かの象徴であることをはっきり感じさせる。そして開口が格子で隠され、高さ45mの石のマスに還元されていることで強い記念性を帯びている。平たくいえば、いつ見ても何か特別な建物だと思わされるのである。



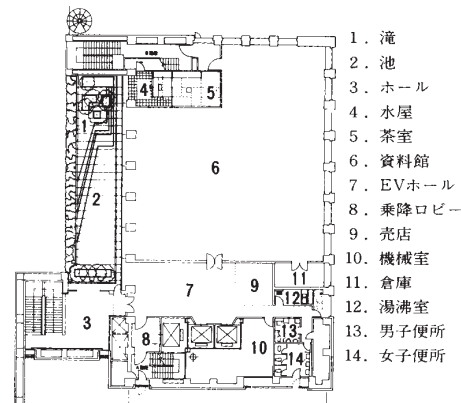
④低層部ディテール 現状

■外からの着想と新技術

外壁の接地部分が曲面を描くというイメージ、内外にピンク色の花崗岩を用いるという手法はともに家元池坊専永(1933～)が提案したものと伝える。家元は、そのエッセイ『池のほとり』で述べるように、今にいたるまで建築に関心を持っている。「池坊」ビル建設自体、家元の念願によって進められた事業であり、先の今里の解説で傍点を付された「光と水と緑」も家元が求めたコンセプトであった。

裾広がりのビルの形態はシカゴのチェイス・タワー(1969年)を見て触発されたと聞く。「池坊」の計画は1970年ごろにスタートしたというから、家元が同時代の情報にも目を配っていたことが知れる。なお、チェイス・タワー、あるいは日本で類似した形態の安田火災海上本社ビル(1976年)は、裾広がりは構造体の表現であるが、「池坊」の場合は外被だけである。

「池坊」の技術的特徴として、『建築と社会』での今里隆の説明では「20m強の大スパン特殊構造で約600㎡のワンルームとし」たことに言及している。具体的には、20.5m×28.8mの平面の外周に細かく柱を配置するチューブ構造を採用した。柱はSRC構造で、長辺(東西)方向3,200ミリスパン、短辺(南北)方向2,750ミリ～3,750ミリスパンとし、そこに架けわたされる約20mの長大スパンの梁は成900ミリのH形鋼とした。これは3階から上の執務・教育空間で機能的なフレキシビリティをもたらしたが、先にも述べたピロティによる広場、また2階ロビーの広やかなたたずまいにも貢献した。



⑤3階平面図。チューブ構造により無柱空間を実現。
「建築と社会」1977年3月号



⑥1階南側の現状

最後に現状について触れたい。「池坊」の外観は大きく変わることなく今日に至っている。特徴的な西側立面は広場に向かう1階開口部が閉じられて大型の生け花が飾られるようになっているが、細部にまで気配りのされた改修である。室内については10年ほど前に全面的な改変が施されている。最も目に付く改修は、ピロティがガラスで閉じられて室内化したことである。内装は全館にわたって変更されていて、竣工時に特徴的であったカラフルなインテリアもほとんど見られない。ただ、それらの改修も、当初からその姿であったかのように丁寧に設計・施工されていて、現代の建築空間として生命力を保っていることを教えてくれる。

注) 写真①③は東出清彦氏撮影

②④⑥は筆者撮影

参考文献

- 『杉山隆建築作品集』(1982年)
- 『同』(1994年)
- 『新建築』第52巻第4号(1977年4月)
- 『建築技術』第307号(1977年3月)

1

六本木クロッシング2019展： つないでみる

「六本木クロッシング」は森美術館が3年に一度、日本の現代アートシーンを総覧する定点観測的な展覧会として2004年以来開催してきたシリーズ展である。第6回目の開催となる今回は、シリーズ初の試みとして、森美術館の3人のキュレーターのみに共同キュレーションを行い、1970-80年代生まれを中心とした日本人アーティスト25組を紹介する。

「六本木クロッシング2019展：つないでみる」は、現代の表現を通じて見えてくる「つながり」に注目する。情報通信技術など、さまざまなテクノロジーが加速度的に進化し、私たちの生活が便利になってゆく一方で、それに起因する新たな問題も浮かび上がっている。価値観の多様性が認められるようになった一方で、オープンであるはずのインターネットが、特にSNSにおいて、意見や認識の同調や共感を助長し、逆説的に閉鎖的なコミュニティを生み出してしまう問題、偏った政治観によって引き起こされる軋轢や拡がり続ける経済格差など、さまざまな「分断」が顕在化しているようである。

こうしたなか、対極のものを接続すること、異質なものを融合すること、本来備わっている繋がりを可視化することなど、アーティストたちは作品を通じてさまざまな「つながり」を提示する。それらは現代社会に対する批評的な視点や発想の転換でもあり、「分断」と向き合うためのヒントとなるかもしれない。本展で生まれる新たな「つながり」が、日本の「いま」に向き合うことのできる有意義な機会となることが期待される。



飯川雄大
《デコレータークラブ
ーピンクの猫の小林さんー》
2017年
木材、蛍光塗料
400x540cm
展示風景：「ゲンビどこでも企画
公募2017展」広島市現代美術館

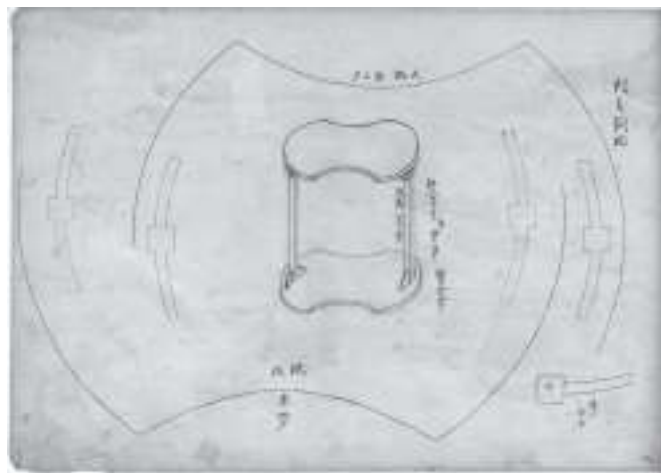
期 間 5月26日(日)まで
10:00~22:00
(火曜日は17:00まで、ただし4/30は22:00まで)
※「六本木アートナイト2019」開催に伴い、5/25は
翌朝6:00まで
※入館は閉館の30分前まで
休 館 日 会期中無休
会 場 森美術館 (六本木ヒルズ森タワー53階)
東京都港区六本木6-10-1
TEL.03-5777-8600 (ハローダイヤル)
観 覧 料 一般1,800円、高大生1,200円、
4歳~中学生600円、65歳以上1,500円

2

特集展示「なにわ人物誌 三好木屑」

三好木屑(もくしょう やじべえ、1874~1942)は、祖父の代から三代にわたり活動した大阪の指物師で、也二、知孫の号でも知られる。二十代の頃には茶道具の収集で知られた豪商・千草屋へ通い、同家が所有する茶道具の棚を詳細に調査して自身の指物製作に活かした。また千草屋の当主であった平瀬露香(ひらせろこう 1839~1908)の薫陶を受けて、茶道・煎茶・書画・和歌・漢詩・俳句など幅広く芸道の修養を積んだ。

木屑の仕事で特筆すべきは、指物師でありながら髹漆、蒔絵などの漆作品の製作に積極的に挑み、成功させたことだろう。帝室技芸員・柴田是眞(1807~1891)が復活させたことで知られる青海波塗や砂張塗などの、あたかも金属のように見える漆の塗布技法などを会得し、さまざまな道具類を製作した。しかしこれらの漆作品の製作は、木屑にとってはあくまでも「余技」であった。本展は、昭和戦前期までの大阪を舞台に活躍した指物師・三好木屑の歩みを振り返る初めての展覧会である。

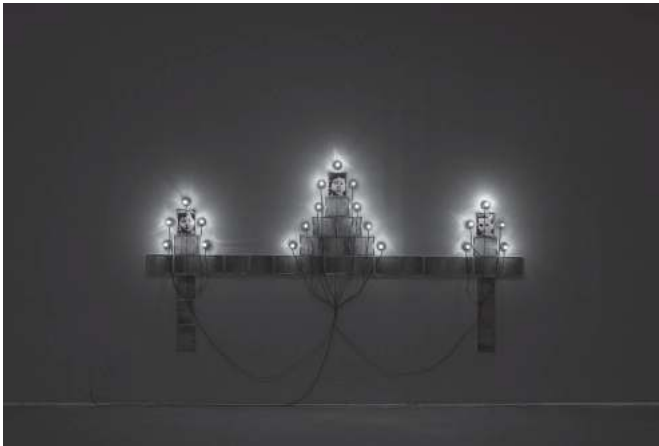


香茶棚物図誌
三好木屑筆写
明治35年~36年(1902~1903) 個人蔵

期 間 3月20日(水)~5月6日(月・休)
9:30~17:00
※入館は16:30まで
休 館 日 火曜日(ただし4/30は開館)
会 場 大阪歴史博物館 8階 特集展示室(常設展示場内)
大阪市中央区大手前4-1-32
TEL.06-6946-5728
観 覧 料 一般600円、高大生400円
*中学生以下無料
*大阪市内在住の65歳以上の方無料(要証明)
*障がい者手帳等をお持ちの方とその介助者1名は無料

3

クリスチャン・ボルタンスキー
—Lifetime



クリスチャン・ボルタンスキー《モニュメント》1986年 作家蔵
© Christian Boltanski/ADAGP, Paris, 2019,
Photo © The Israel Museum, Jerusalem by Elie Posner

クリスチャン・ボルタンスキー（1944年ー）は、現代のフランスを代表するアーティストのひとりである。1980年代に入り、明かりを用いたインスタレーションを手掛けるようになったボルタンスキーは、子どもの肖像写真と電球を祭壇のように組み合わせて展示した「モニュメント」シリーズ（1985年ー）で宗教的なテーマに取り組む。それを発展させた《シヤス高校の祭壇》（1987年）は、1931年にウィーンの高校に在籍したユダヤ人の学生たちの顔写真を祭壇状に並べ、その写真を電球で照らすというものであった。肖像写真を集めて展示する手法は、大量の死者の存在、具体的にはナチス・ドイツによるユダヤ人の大虐殺とその犠牲者のイメージを想起させるものとして解釈され、大きな議論を呼んだ。国立国際美術館、国立新美術館、そして長崎県美術館の3館が共同で企画する本展は、ボルタンスキーの初期作品から最新作までを紹介する、国内初めての大規模な回顧展である。半世紀を超える作家活動を経て、いまなお、積極的に創造を続けるボルタンスキーの広大な芸術世界を紹介する。

期 間 5月6日（月・休）まで
10：00～17：00（金・土曜日は20：00まで）

※入場は閉館の30分前まで

休 館 日 月曜日（ただし4/29、5/6は開館）
会 場 国立国際美術館 地下3階展示室
大阪市北区中之島4-2-55
TEL.06-6447-4680

観 覧 料 一般900円、大学生500円
※夜間割引料金（金・土曜日の17：00～20：00）
一般700円、大学生400円

*高校生以下・18歳未満無料（要証明）

*障がい者手帳等をお持ちの方とその介助者1名は無料

*本料金で同時開催の「コレクション3」も観覧可

▶The ACG Collection

—大西康明、新平誠洙、水野勝規



【左】大西康明《circulation of water》ポリエチレンシート サイズ可変
【右上】水野勝規《monotone》シングルチャンネルビデオ（4K、サイレント）24分
【右下】新平誠洙《Hell Screen》油彩、アルミ板 150x519x51cm、六曲屏風
展示風景撮影：来田猛 提供：アートコートギャラリー

<出展作品>

大西康明：熱加工によって不規則に収縮したポリエチレンシートが宙空に舞う《circulation of water》。展示空間内の空調や人の動きなど、目に見えない空気の流れを可視化し、さまざまな現象を留めながら揺れ動く。人工的な素材でありながら、自然界の風景や生命細胞を想起させ、作品の向こう側や日常の空白に潜む新たな世界の可能性を示唆する彫刻作品。

新平誠洙：文人画家の田能村直入と富岡鉄斎の肖像がモンタージュのように重なり、分裂する《Hell Screen》（地獄変屏風）。二人は幕末から明治にかけて活躍し、共に日本南画協会を設立し良き友人関係にあったが、直入の死後、鉄斎は直入が地獄に落ちた絵を描いた。大正時代に芥川龍之介が記した『地獄変』をめぐる物語も背景に、本作では、時代や次元を超えて画家たちの孤独と地獄が共鳴する。

水野勝規：静寂なモノクロームの情景が構成される映像作品《monotone》、時間の経過をテーマに、蒼天に飛行機雲が伸びる《sky record》。何かが起こる予兆に満ちた日本の風景の「間」が、4K動画によって鮮やかに立ち現れる。

期 間 3月16日（土）まで
11：00～19：00（土曜日は17：00まで）

休 廊 日 日曜日・月曜日・祝日
会 場 アートコートギャラリー
大阪市北区天満橋1-8-5 OAPアートコート1F
TEL.06-6354-5444

観 覧 料 無料

本欄掲載の1～3の美術館等の招待券ご希望の方は、電話等で申し込み後、招待券送付用の切手（82円）を日本建築協会事務局までお送りください。

常任理事会

第6回常任理事会

1月23日(水) 16:00~17:30

日本建築協会会議室

出席者 設楽会長ほか6名

- 議 事 (1) (仮称) <在京会員の集い>トークセッションと懇親の場の開催
 (2) 協会入会パンフレット案
 (3) 「建築と社会」アーカイブ化の進捗状況
 (4) 第38回大阪都市景観建築賞
 (5) 総会講演会の講師
 (6) 第2回論考コンクールの審査経過報告
 (7) 2019年総会、理事会、評議員会、常任理事会日程
 (8) 4団体会長、支部長意見交換会
 (9) O-60委員会(仮称)の提案
 (10) (仮称) 建築レコードマネジメント委員会準備会発足の提案
 (11) 「住まいの寸法」中国語版の発行

編集委員会

第10回広告企画・編集合同委員会

1月15日(火) 18:10~19:20

日本建築協会会議室

出席者 勝山委員長ほか3名

- 議 事 (1) 2月号特集 第25回私の空間作法、京都支部70周年(仮)
 (2) 3月号特集 東海支部特集
 (3) 4月号特集 特別編集委員会企画
 (4) 5月号特集 働き方いろいろ~あなたの会社は変わりましたか?~(仮)
 (5) 6月号特集 片岡安賞(日本建築協会論考コンクール)
 (6) その他

第1回建築計画系分科会

1月28日(月) 19:00~21:00

日本建築協会会議室

出席者 桑原幹事ほか6名

- 議 事 (1) 2018年特集を振り返って
 (2) 分科会運営について
 (3) 2019年特集について

第9回構造分科会

1月25日(金) 19:00~20:00

日本建築協会会議室

出席者 角田幹事ほか3名

- 議 事 (1) 構造の頁の企画
 (2) 2019年特集の企画

第9回設備分科会

1月9日(水) 18:00~19:20

日本建築協会会議室

出席者 橋本幹事ほか5名

- 議 事 (1) 「設備の頁」の企画
 (2) 2019年度特集について

第5回施工材料分科会

1月21日(月) 17:00~17:55

日本建築協会会議室

出席者 吉居幹事ほか4名

- 議 事 (1) 委員交代
 (2) 2019年度特集について

第9回法令分科会

1月16日(水) 16:00~18:00

日本建築協会会議室

出席者 垣内幹事ほか5名

- 議 事 (1) 法令コーナーの企画
 (2) 2019年特集の企画

第9回作品作風小委員会

1月24日(木) 19:00~19:45

日本建築協会会議室

出席者 東井小委員長ほか3名

- 議 事 (1) 作品の選定
 (2) 作品の掲載状況、予定
 (3) gallery掲載報告、予定
 (4) その他

事業委員会

第7回情報見学小委員会

1月10日(木) 18:05~19:20

日本建築協会会議室

出席者 中尾委員長ほか8名

- 議 事 (1) 本年度事業について
 (2) 来年度事業の検討
 (3) 2020年の在阪建築15団体合同新年交礼会について
 (4) 委員会活動の記事掲載について

出版委員会

第9回出版委員会

1月22日(火) 18:00~18:45

日本建築協会会議室

出席者 西委員長ほか6名

- 議 事 (1) 既刊書籍経過報告
 (2) 制作進行中の書籍
 (3) 今後の出版テーマ
 (4) 建築セミナー

教育委員会

大阪府住まい・まちづくり普及協議会全体会議

1月18日(金) 16:30~18:00

大阪建築会館会議室

報告・議題

- (1) 出前講座について
 (2) 安全チェック・ボランティアについて
 (3) その他

未来創生プロジェクト

第10回建築次世代委員会

1月17日(木) 18:45~20:00

日本建築協会会議室

出席者 菅原小委員長ほか5名

- 議 事 (1) 来年度の活動計画の検討
 (2) 新パンフレットの検討

第12回U-35委員会

1月15日(火) 19:30~

PARK Lab.

出席者 鬼頭サプリーダーほか11名

- 議 事 (1) 活動/予定
 (2) 次回予定/その他

審査会

論考コンクール第2回審査委員会

1月8日(火) 17:15~18:40

日本建築協会会議室

出席者 審査委員 舟橋國男審査委員長ほか4名

- 協会関係 設楽会長ほか2名
 議 事 (1) 第1次審査
 (2) 公開プレゼンテーション
 (3) 最終審査委員会
 (4) 審査委員の任期

講習会

平成30年度建築工事実務講習会

1月17日(木) 9:00~17:30

大阪府建築健康会館6Fホール

講師 川井 裕基(鹿島建設(株))

北野 祥兄(清水建設(株))

山口 紀宏(大林組)

参加者 57人

編集委員会(平成30年度)

■副会長

米井 寛

■編集担当理事

木谷 晃之

○勝山 太郎

佐藤 榮一

杉本 浩

竹中 統一

西 博康

松崎 公一

船越 淳久

吉村 英祐

■副委員長

○戸川 勝之

■特集小委員会

■計画分科会

★計画系

飯田 匡

鈴木 克彦

△田中 直人

松田奈緒子

守井 辰

吉村 英祐

★建築計画系

神戸 嘉也

桑原 悠樹

下坂 浩和

中辻 浩介

東 拓郎

樋口 展寛

△松岡 英緯

三谷 帯介

米山 剛史

渡部 剛

★(インテリア)住系

赤川貴世友

今井 充彦

岩田 圭司

川合 隆之

河西 孝平

△黒柳 亮

塚口 洋之

ペリー史子

■構造分科会

宇野 綾真

岡田 健

岸本 光平

瀧野 敦夫

△角田 耕一

萩原 学

松本 裕之

宮久保秀樹

向井 洋一

■設備分科会

有尾清二郎

木谷 晃之

北野 勝也

佐々木章二

寺井 千佳

夏井 重行

△橋本 直樹

梶井 貴廣

宮崎ひろ志

森山 正和

山本 雅洋

■施工材料分科会

門野 陽

桜井 和男

高橋 秀一

藤丸 啓一

山口 紀宏

山崎 順二

吉田 正友

△吉居 哲

■法令分科会

植平 浩司

岡田 耕介

△垣内 明

河野 学

高田 大輔

福岡 誉顕

■作品作風小委員会

▲東井 嘉信

居内 章夫

池上 明

稲垣 和江

太田 栄治

加嶋 章博

菊池 浩輔

倉瀬奈千子

澤田 純一

高木 秀晃

榎野 淳司

西田 佳代

芳谷 晴彦

平野 尉仁

増田 敬彦

■広告企画小委員会

小川 雄介

金築 雄

小山 昭

野山 将男

藤田 昌宏

▲前田 衛

山辻 直樹

(順不同)

◎委員長

○副委員長

▲小委員会委員長

△幹事

印刷 2019年2月26日

発行 2019年3月1日

発行人 一般社団法人日本建築協会

大阪府中央区大手前1-7-31

電話 06-6946-6981

印刷所 榊中島弘文堂印刷所

定価 1230円(税込)

©「建築と社会」誌の記事の無断転載を禁じます

**お客様の抱える問題やニーズに
より速やかに、より丁寧に対応できるように**

企画・デザイン、制作、製版、印刷

株式会社 中島弘文堂印刷所

本 社 〒537-0002 大阪市東成区深江南2丁目6番8号
TEL.06-6976-8761 / FAX.06-6976-8765

東京支社 〒101-0052 東京都千代田区神田小川町1丁目4-2 風雲堂別館ビル2階
TEL.03-3526-5580 / FAX.03-3526-5582

<http://www.n-kobundo.co.jp/>

地球環境を守り、100年建築に貢献する

NACL のアルミ表面処理

株式会社 日本電気化学工業所

<http://nacl.jp> E-mail: sc@nacl.co.jp

本部営業部 〒560-0036 大阪府豊中市蛍池西町2丁目7番26号 NACLビル2階

TEL (06)6843-1235(代) FAX (06)6853-1632

東京事務所 〒111-0051 東京都台東区蔵前2丁目6-7

TEL (03)3862-0978(代) FAX (03)3862-7098

年間広告のご案内

会誌「建築と社会」では、後付部分に
広告スペースを設けております。

1年を通じて、社名広告を掲載されませんか？

掲載期間：4月号～翌年3月号までの1年間

掲 載 料：48,000円（消費税込み）

サ イ ズ：1/12頁（タテ40mm×ヨコ90mm）

※毎月掲載誌をご送付します。

※原稿は1年間同じ原稿を使用します。

お問い合わせ先

一般社団法人 日本建築協会 内山・井筒

TEL：06-6946-6981 FAX：06-6946-6984 E-mail：koukoku@aj.or.jp

日本建築協会

告

◆第4回 建築セミナー◆

主催：日本建築協会出版委員会 共催：学芸出版社

日本建築協会出版委員会では、「建築の本」の著者をお招きし、手軽にご参加いただける連続セミナーを開催しています。第4回として日本建築協会企画『図解 建築と設備の接点』の出版を記念して実施いたします。お気軽にご参加ください。

建築と設備の接点 トラブル予防のツボ

講師： 仲本尚志 氏
馬渡勝昭 氏
赤澤正治 氏

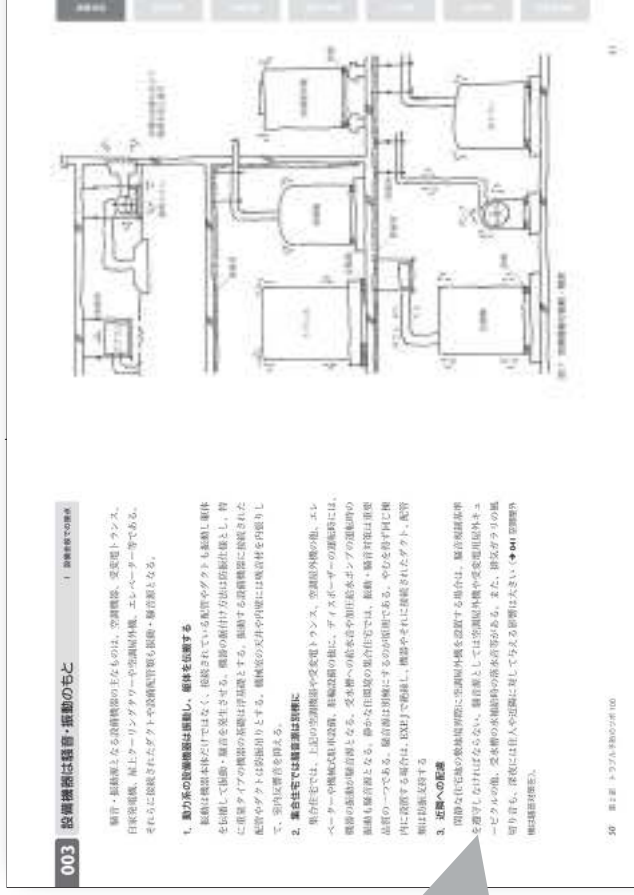


『図解 建築と設備の接点』では、手描きイラストをもとにトラブルにつながるやすい「取り合い」を紹介しました。建築と設備の融合のための考え方を伝えできればと思います。

〈講師プロフィール〉

仲本 尚志 (なかもと たかし)
atelier UNI-SUPPORT主宰。著書：『建築工事の祭祀式』『建築品質トラブル予防のツボ』『図解 一発で通す！確認申請』
馬渡 勝昭 (まわたり かつあき)
一般建築士事務所 Atelier・YOU代表。著書：『建築品質トラブル予防のツボ』
赤澤 正治 (あかざわ まさはる)
TAKシステムズ大阪支店設備担当。著書：『改訂版イラストでわかる消防設備の技術』

このセミナーは、建築 CPD 情報提供制度認定プログラム申請中です。建築関連 CPD (2単位)



日 時：2019 年 5 月 15 日(水)

18:00 ~ 20:00 (17:45 開場)

場 所：TOTOTekニカルセンター大阪
大阪市中央区久太郎町3-6-8御堂筋ダイワビル2階 地下鉄本町駅から徒歩4分

参加費：テキスト購入＋受講4200円
受講のみ1500円 (※日本建築協会会員と学生はテキスト購入＋受講3700円、受講のみ1000円)

定 員：50名

使用テキスト：『図解 建築と設備の接点』
A5判・232頁・本体2800円＋税

※当日はテキストを税込3024円⇒税込特価2700円で販売します。

【申込み方法】

下記を記載の上、メールもしくは FAX にてお申込ください。

①催し名(第4回建築セミナー)②氏名(ふりがな)③所属④会員・一般・学生の別⑤当日の書籍購入希望の有無⑥受講票郵送先住所⑦電話番号⑧E-mail アドレス⑨CPD を申請される方は申請先団体名と番号
申込先：(一社)日本建築協会 TEL 06-6946-6981 FAX 06-6946-6984
E-mail:hensyu2@aaj.or.jp (担当：入谷)

